

特集 一世一代の買物

新連載 自主保育っておもしろい!

時事放談 わが家でやっているリサイクル



逐次刊行物

平 9, 6, 4 成

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

読んで、書いてネットワークキング





〈小学校初級から〉

●広島市に伝わる伝説の王様ぎつね「おさん」の現代風話。

おさんぎつね
毛利まさみち文・絵
*1470円



●戦争と平和のライブラリー

泣いた木曾馬
加藤輝治文・星野京絵
海を渡ったタヌキたち
おじいさんの戦争は終わったか
近藤泰年著
地図のない島へ
武田英子文・吉本宗絵
*1223円

●木曾馬と不思議な縁で結ばれた少年・太一を待ち受けていた運命は...。
木曾の御岳山のふもと開田村の風土と人々が育んだ、
心根やさしいずんべり馬は戦火の場へ... *1260円
加藤輝治文・星野京絵

自然の中の**微生物と人間編** ●全10巻
人間シリーズ
西尾道徳他編 肉眼では見えない微生物の働きを、あらゆる角度から描いた初めての絵本。A4変32頁 *冊21,000円
そだててあそぼう ●全5巻
もりとしと他編 トマト・ナス・サツマイモ・シシトウ・ピーマン・トウモロコシの栽培と観察ポイントを描いた絵本。A5判 *冊9450円

シンプルイズベストの本!



耳をすましてきいてみよう! からだはあなたに

スタディセックス

●からだのこと、よく知りたい *1260円

井尾裕子●医学博士・井尾レイシツック院長著
〔内容〕自分のからだのこと、よく知りたい! 心長き思春期・卵子1個と3個分の1の精子・スタディセックス・自分の人生、主役は自分・Q&A・女子高生生のアンケータ・エイズシンボ / 対談・娘たちよ! 宮本美智子十著者

アロマテラピー わたし流

和田はつ子著 ●ストレスタイプ別・香りの選び方作り方・ストレス型の子エックテストで自分を発見し優しく癒す健康法。 *1680円

ハーブオイルの本

●既刊 育てるフレッシュハーブ12か月 *1377円
●既刊 食べるフレッシュハーブ12か月 *1631円

これなら大極拳

●始めてはみたものの、こいつ方へ 続けるコツ解説。 山内孝道著 *1470円

来し方風土たべかた事典

小野重和著 ●ハートとソートの三千年 縄文時代からの加工調理器具(ハート)から外食(食事作法(ソート))の変遷事典。 *2100円

来し方風土たべもの事典

●既刊 来し方風土たべもの事典 *2243円
●既刊 来し方風土たべもの事典 *2243円

一年間でできる週末菜園

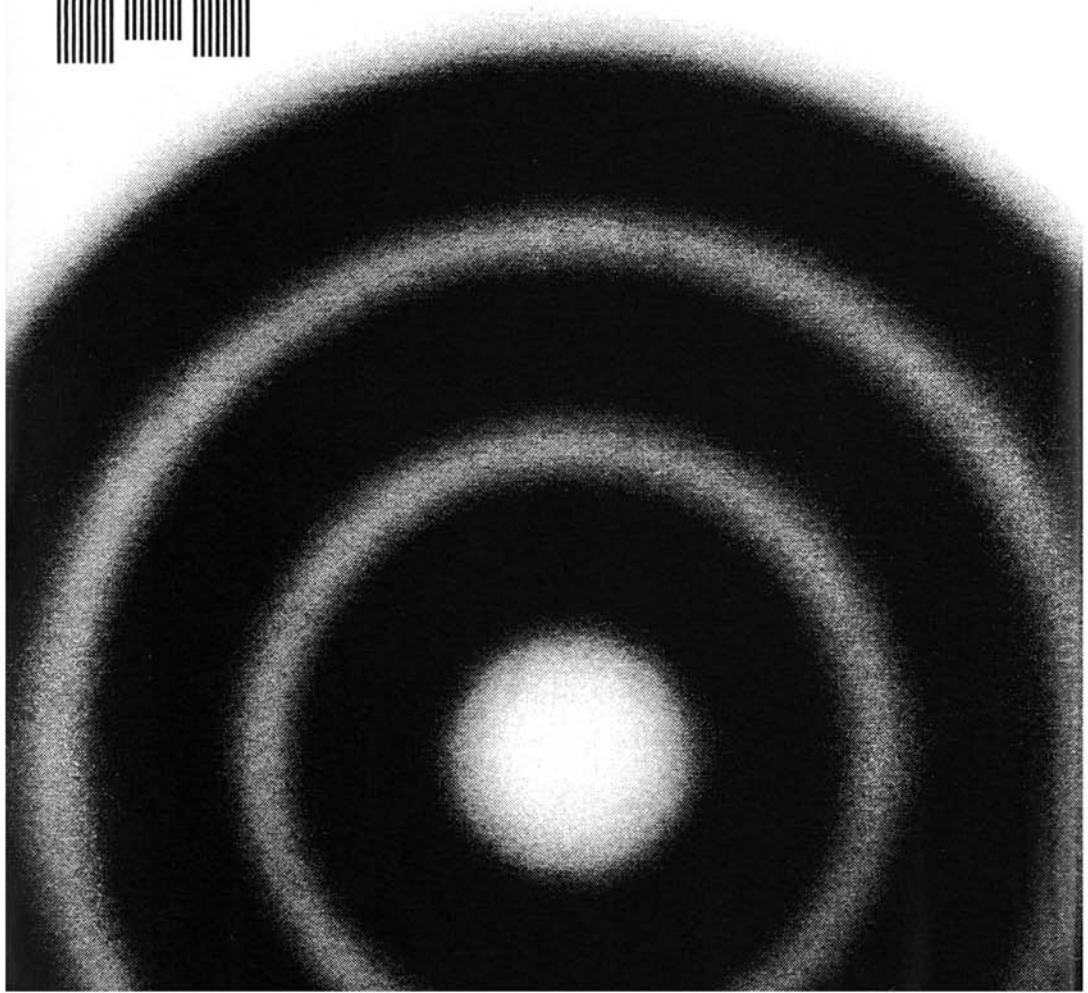
喜多村敏三著 周年栽培で年間自給をめざす元エコレッ工場長。そのノウハウを即坪に活用する農家も驚く独創的アイデア。 *1680円

野菜のバスケット栽培

増田繁著 スーパーで使フラスティックのカゴは最高のプランター。通気性・排気性抜群。収穫の野菜のつくり方を詳述。 *1680円



●—— 読んで、書いて ネットワーキング



読んで、書いてネットワークング わいふ二六六号

目次

4 ヴアラエティ・ライフ⑭

葬送の自由から生き方の自由へ 川村君子さん
文／川村君子さん 写真提供／葬送の自由をすすめる会・川村君子さん

特集 一世一代の買物

- 10 ただより高いものはない? 森 真砂子
- 17 ヘルソ健康器具を買った私 中松ミナ子
- 19 あこがれの楽器 加藤君子
- 21 ああ、憧れの出版をするまで 松本とみよ
- 26 愛とお金と 匿名

31 エッセイスト・クラブ

浅川涼子・後藤美幸・須賀まり子

37 おすすめの一冊 山影夏子

89 篠田英子

新連載

38 自主保育っておもしろい! 川村美代子

45 パソコンワールド

作部径子

48 ワーキングマザー

花岡京子・安村豊子

連載②

52 崩壊した似非楽園 広田トシ

―有料老人ホーム倒産―

60 マイジヨブ・マイホビー

新井純子・奥島千恵子・松本育子

66 おさない子を育てる

井上いづみ

70 私が宗教に近づかないわけ 中野耀子

76 家族と私

匿名・匿名・十河温子

83 平成おったまげーション③② 西田淑子

84 サーフレシーブ

クワシイ智美・飯塚真里・島田容子

88 忘れ得ぬ人々

小川文子

第三回

90 豊穣の女神 高松恭子

99 ブック情報

100 時事放談②「わが家でやっているリサイクル」

菊池裕子・木暮洋子・平尾輝子

108 コミック●痛快ノ一般人③⑨ 栗田笑

112 三度おいしいマレーシア② 上田弥生子

118 わいわいがやがや

小澤長太郎・渡辺初子・石山美佐・木村澄子

122 わいふネット

124 母のベッド転落 田中慶子

131 フリースペース

広瀬サカエ・堺 みどり・高橋安子・石川久代

139 老人ホーム情報センター発

140 私もひとつ

岡田美幸・鈴木和子・根来恵子・渡辺禎子
米良恭子・飯島まゆみ・副島めぐみ・潮田京生子
青木千恵・宮崎貴子・後藤 晶・伊藤てる子
井上いづみ・布施孝子・鈴木美奈

143 ファム・ポリテイク編集室より 田中喜美子

144 情報コーナー

投稿規定 146 次号投稿募集
編集室から 151 編集だより 152 148

バックナンバー 15 お友達にわいふを 25
文章講座のおすめ 17 わいふ原稿整理方針 51
自費出版はわいふへどうぞ 117 お花見報告 142
新しいわいふにアイデア募集 149

■表紙／レイアウト・工房はやし
■AD・林 佳恵

イラスト・梅村 苺・奥島千恵子・小沢恵子
カステラネンコ・小林正子・小宅昌枝
佐藤瑞江子・田沼千恵・田村幹代・鳥居禎子
西宮さき・橋本美智子・山田京子



葬送の自由から 生き方の自由へ

川村君子さん



四十歳を過ぎるころから、私は夫の実家の墓には入りたくないと思つうようになった。さりとて、結婚で姓の変わった私の実家の墓に入る気にもなれない。息子に面倒をかけるのも気がひける。

さてどうしたものかと考えていたころ、市民運動団体「葬送の自由をすすめる会」の発足を知った。自然と人間の共生と再生をめざすこの会の、意表を突く次のような発想は、まさに『目からうろこ』だった。

葬送のための
節度をもつた
自然葬は
現行法に
触れない。
遺灰を
山に還して
森を育て、
養われた
水を
都市住民が
いたくことで
霊園開発による
自然破壊を
防ぐとともに、
散灰する際に
基金を積んで
過疎の村の
活性化や
山林の保全に
役立てる、
という
「再生の森」構想。



ベナレス・ガンジス河での自然葬。日の出を待つ



絵の描けない私が
日の出に感動して
描いた水彩画



ベナレスのホテルで、中央に安田睦彦会長・
山折哲雄顧問を囲んで。ベナレスの街で買った
民族衣装を着てファッションショーの後

早速入会した。葬送の歴史や人権問題などを学ぶうち、死後の葬送の自由どころか今を自由に生きることさえ、あまり考えてこなかったことに気づく。以来、仕事の傍らやりたくてもできないと思っていたことや、興味のあつたもの、何でも積極的に実行するようになった。

いろいろな講座に通い、あつちの市民運動やボランティアに顔を出す。

たくさんのお出合いがあり、友人や仲間が増え、あけく「葬送の自由をすすめる会」で働くこととなった。



札幌の集会。人があふれてゴザを敷く



ミュージカル劇団
「ステージシアター」
の公演でフィナーレ



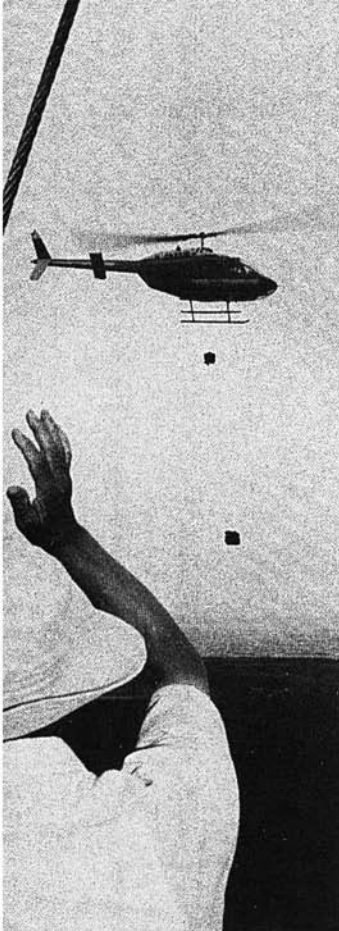
70歳代の方も……

アマチュアのミュージカル劇団にも入った。団員は中高年の人が多いユニークな劇団で、練習はしばし浮世を忘れさせ、ストレスを解消させてくれる。公演のときは、私もときおばさんもキラキラした衣装でスポットライトを浴び、端役の女優に「ヘンシーン」する。

私にとつて葬送の自由との出会いは、自由な生き方を探る始まりでもあった。

近年、災害時のボランティアや市民オンブズマンなど、市民運動の活躍が目立っている。行政や営利企業に任せきれない問題は、市民自らの手で解決するしかないと感じ始めたからだろう。これからは様々な市民運動が、人々の生きがいや生涯教育の場となつて盛りあがっていくのではないか。

相模灘へ、ヘリコプターからの自然葬。溶ける和紙で作った紙風船に入れて落とす



上海市、揚子江での海上葬の視察



葉を乾燥させ、トレー状に加工し、とうろう流しに利用している。ペナリスにて



投稿誌 **わいふ** から
生まれた

ニュー・マザリングシステム (NMS)

ゼロ歳から満3歳までの子どもを持つお母さんを対象とする通信教育です

「生きる力」のある子を育てましょう!!



- ・実践と理論の両方を学べます
- ・子育ての悩みから解放されます
- ・徹底した個人指導で安心できます

お問い合わせ先 **NMS研究会** 〒162 東京都新宿区市谷加賀町2-5-26
(株)グループわいふ分室内 ☎03-3260-2509 FAX03-3260-9398

教育史料出版会

〒101 千代田区西神田 2-4-6
☎03(5211)7175

ハイスクールレポート

自分にあつた学校をえらぶ私立高校ガイド

入学してからでは遅すぎる!
服装・頭髮規定は? 生活指導の中身は?
どんな行事があるのか? 力を入れてい
る教育内容は? 進学への取り組みは?
学校生活がこの一冊で見えてくる!

関東版 わいふ編集部編 4月末刊 ★1800円+税
関西版 公立校も収録 / 5月末刊 ★1710円+税

子どもはなぜ
★1500円+税

渡辺 位
学校に行くのか

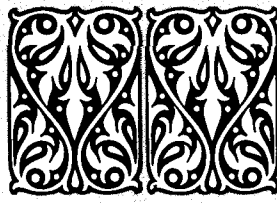
自分にあつた
★1602円+税

早川 裕子
高校のえらび方

●生徒・父母・教師が綴る 私の北星余市物語

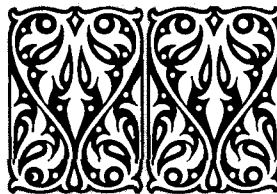
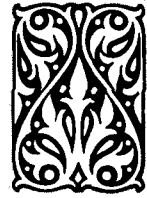
やりなおさないか
君らしさのままで

北星学園余市高校編
中退生を受け入れる北の学園!
★1500円+税



特集

一世一代の買物



特集

一世二代の買物

ただより高い ものはない？

埼玉県入間市●森 眞砂子

縁があつた捨て猫

昭和五十四年、今から十八年前の十月。娘が、生後二カ月ばかりの子猫を拾ってきた。ちょうど一年ほどいた猫が姿を消して三カ月ぐらい。いなくなつた子猫は、きれいい好きといわれている猫には珍しく、布団の上に排尿するという悪癖があり、そのため夜は外

に出していた。

電柱やスーパ―などに張紙をして捜した結果、その晩ご近所の何匹かの猫が一緒にいなくなつたことがわかり、猫とりに連れていかれたのだろうということになった。正直言つて、布団におしっこされないようにと見張つている毎日から解放されて、ホッとしたのも確か。そういう時に、またもや猫があらわれたのだから、私が「もといた場所においていらつしやい」と言つたのは当然のこと。

しばらくして娘は一人で帰つてきた。ところが夜中に帰つてきた夫の腕の中に、その猫が。二度も我が家に拾われたのは縁があつたのだらう、と飼うこ

とになったのが「ラッキー」だった。

それから一年後、ラッキー出産。どんな子が生まれるかと楽しみにしていた私達の前に、神様がいたずらがきをしたような柄の子達が三匹。ただラッキーも家族からしか可愛いと言われたことはなかった。人間というのは意外に正直なもので、皆ほめようがなくて「大きい猫ですネエ」という。

眼光するどく、毛色は白地に黒と茶のまざつた縞模様の子猫。生まれつき幾重にも折れまがつたしっぽの骨。

我が家は比較的人通りの多い道に面しているので、出産直後から生垣に「可愛い子猫さしあげます」の札をつけるが、いっこうに反応なし。二カ月

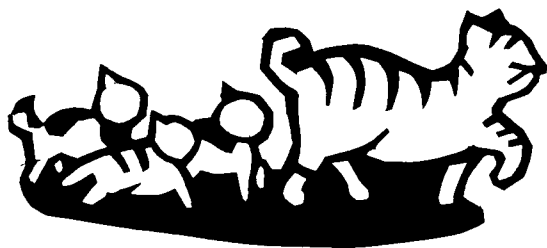
もするとラッキーまたもや「さかり」の時期を迎え、これ以上猫口が増えては大変と、避妊手術をうけさせることにする。いろいろ調べた結果、低料金で手術すると広告を出していた、八駅離れたA医院に依頼。

いっぽう子猫のほうはというと、生後二カ月目に一匹が、娘の友達のところへもらわれていったきり。三匹目の嫁入り先が決まったのは、「可愛い子猫」という看板が気恥ずかしく思えるようになった十カ月目だった。

ラッキーの医者通い

月日は流れ、その間時々、食欲不振やのみアレルギー、喧嘩の傷などで近所のB医院にかかる。

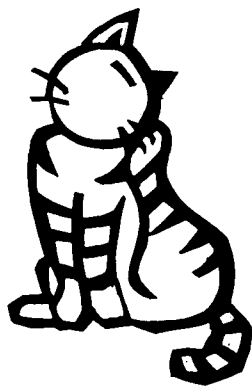
ラッキーが我が家の家族になって八年目、いつもの医院で「ヘルニアがある。発作がおきてからでは大変だから、体力があるうちに手術をしておいたほうがよい」と言われる。ラッキーが腸の嵌頓かんとんをおこして苦しんでいる姿



を想像するとたまらず、いくらぐらかかるものでしょうかとときくが、はっきり答えない。いつもの料金から推計してみると最低十三万円くらいかかりそう。

以前避妊手術をうけたA医院にたずねたら、五万円くらいでできるというので連れていく。ところが開腹したら、避妊手術のあとの縫目の針ほどの穴から脂肪が少しずつもれて、表皮の内側にたまっていただけ。せっかくだからと、たまっていた脂肪をとり除いて縫ったそうだが、縫目がつくのになに時間がかかり、遠くまで何回も再縫合やら消毒などに通う。

A医院では、こちらの言ったことと触診だけで開腹してしまったのではないのか？ B医院に依頼していたら、レントゲンをとってヘルニアではないということ、切らなくてもすんだかもしれない。本当にかわいそうなことをしてしまった。そのうえ快復がおくれたために料金も最初の約束よりかかってしまった。



ラッキー十二歳。いつもののみアレギーで毛が抜けてかゆそう。様子をみているうちにお盆になってしまう。あちこちの病院に電話するが、どこも盆休み。ようやくあいていたC医院に連れていく。

C医師「全身を洗って毛をそり、薬を塗りこんだほうが治りが早い。ついでに歯石もとっておきましょう。少し麻酔をかければすぐすみますから」というのでお願いする。医者、麻酔をか

けながらラッキーの心臓の音を器械で拡大してきかせ「いい音です。これなら十六歳くらいまで元気でしょう」

処置が終わったので連れて帰る。

ところが翌日になっても麻酔からさめない。あわてて医院に連れていく。

結局体中の神経を冒され、目はほとんど見えない、耳はきこえない、そしゃくすることができない、手足の力は抜け、という状態で、医者は特異体質なのだから仕方ないと逃げ腰。そん

な医者でもこうなっては頼らざるを得ず通う。そのたびに一万円近いお金が出ていく。

お盆休み中は家族が皆いたので、二人がかりで、食べたがらないラッキーをおさえて口をあけさせ、スポイトで流動食を流しこんでいた。休みが終っても、ラッキーを家に一匹でおいておける状態でなく、交替で休暇をとって食事をさせることが続いた。

二カ月ほどで、何とかもとの状態の八〇パーセントくらいに戻る。ここまでのになる前は、ほとんどなく外出しても、目に力なくぐったりしているラッキーの姿がちらついて落着かなかつた。現金なもので心配ないとみきわめがついてくると、外出先でラッキーを連想させるものに出会ったり、帰道、我が家に近付くにつれて今日は食事をちゃんと食べたかな、元気で玄関先まで出迎えにきてくれるかな、などとは思っても、いつも瞼の裏に姿がちらつくということはなくなっていた。何年かしてわかったことだが、この

時ラッキーはもう腎臓がかなり悪く、それを血液検査もしないで麻酔をかけたための医療ミスであった。

ついに入院

ラッキー十四歳の一月、食欲がなくなり焦茶色のドロリとしたものを頻繁に吐く。少し食欲がでてきたり食べなくなったりをくり返しながら、五月になる。いよいよ具合悪そうでB医院に連れていく。

血液検査の結果、かなり尿毒症が進んでいるのと食事をしていないため、脱水症状が強いといわれる。先生から二十四時間点滴をして水分補給と、尿から老廃物を流すことにする。もともと神経が細い子だし、とくに年老いている猫に入院はストレスが大きいのでさせたくないが、この際そんなことは言っていられない危険な状態」との説明があり、お願いして帰る。

結局六日間入院。これだけ点滴を続けても、血液検査で腎臓の働きを表わ

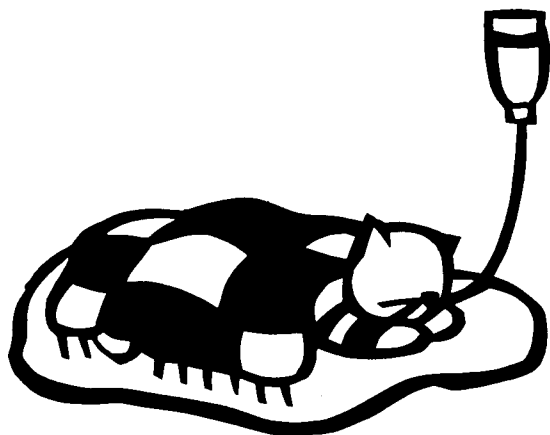
す値はほとんど下がらず、慢性の腎不全だといわれる。私、腎臓はがんばりやで七五パーセント以上冒されるまでは症状としてあらわれない、などということをはじめて知る。この時の支払い十万円。

根気よく通院を

そして一日に三回薬をのみ、一週間に三回点滴に通うという生活が始まった。

十年前には裏通りの小さな借家で、先生が一人で診ていた医院が、しばらく行かないうちに、表通りに堂々とした建物を構え、スタッフも獣医五人に看護婦一人という、地域でも錚々たる医院になっていた。その中でラッキーの主治医に決ったのは、まさに「インフォームド・コンセント」とはかくあるべしを地でいく、二十代後半の青年医師で、半年後にやはり二十代の女医が加わり、二人でチームをくんで治療にあたって下さった。この先生達が主





治医だったから、続けて通院することができたといえる。

点滴は人間の人工透析のかわりに行なわれる。日本にも何台か動物用の人工透析機はあるそうだが、B医院にはなかったし、あつたとしても費用の面で我が家では恩恵に浴せなかっただろう。

はじめの三カ月間は「中心静脈点滴」をしていた。これは腿の静脈から体の中心へ向けて、プラスチック製の細い針を入れて留置しておく。ラッキーの場合、腎臓が悪くて麻酔が使えないのでだいぶ苦労したとのこと。この方法の長所は、例えば一時間に三〇ccと決めたら、コンピュータをセッティングしておいてゆつくりいれられること。直接血管に入れるので吸収が速いこと。

欠点の一つは点滴をしている間は動かないように小さなケージにいられ、そのうえかなりの分量だから拘束時間も長くて、ラッキーのように家族にしかつかない家族猫には、とくにストレスが強いこと。第二に体の外

に出ている留置針が抜けたり、または猫がとつてしまわないように、固いプラスチック製のカラーを首にはめるので、勿論外へ出すことはできないし、行動のすべてに制限をつける。私達は、きれいな好きなラッキーが留置針以外の場所を心ゆくまでなめられるように、手があいている時はいつもカラーをはずしてあげていた。しかしそれにも限界はある。

さいわい三カ月後には、血液検査の値も少しは下がり、これなら皮下点滴にきりかえられるということになった。猫の首筋から背にかけては表皮をつまむと、その下にながりの空洞部分ができる。そこに体格・病状などによって一〇〇ccから二〇〇ccの輸液を直接いれていく。体重三キロぐらいの体にそれだけの量が入ると、外からみてもかなりの「カサ」として感じられる。それが少しずつ吸収されて、尿として排泄され、六―十二時間後になくなるというわけ。

そして平成七年七月二十二日に亡く

なる（享年、推定十五歳十一カ月。人間でいえば八十五歳ぐらい）まで一年二カ月間、一カ月十万円強の治療費を払う。

我が家は平均的サラリーマン家庭なので、家計費に占める治療代は大きな割合であった。この年だったから払えたという情況もある。子ども達は学校を卒業して各々働いており、家族皆が健康で、ただただラッキーが、残された命の日々を苦しまないで過ごしてくれることを祈っていた。

家族の中心だったラッキー

ラッキーのどこが私達にここまでさせたのか？

呼んでも気がむかなければこない、芸をするわけでもない。けれど、子ども達が思春期の嵐の中で、学校に行きたくなかったり、うつ屈した気分の吐け口がなくてムシャクシャする時、いつもそばにいた。家族とは話したくなくても、ラッキーにはとびきりの優し

★わいふバックナンバー

- 251号 集合住宅での子育て
- 252号 うちの子のおばあさん・おじいさん
- 253号 阪神大震災
- 255号 家事サービスを利用してみたら
- 257号 ああ、マニション暮らし！
- 258号 時事放談「私たちのゴミ問題」
- 259号 夫の過労死は他人ごとか？
- 260号 トラブル旅行記
- 261号 嫌われる姑・好かれる姑
- 263号 わが家の親子ゲンカ
- 264号 ふるさとの伝統行事
- 265号 私の初体験

どうせ死ぬなら上手に死のう
死ぬのに必要な手続きのすべて

本体二二六二円十税

こんなになふた
安くはいれる有料老人ホーム

―付 退院後の療養・リハビリに老人保健施設
本体二五〇〇円十税

シリーヌ老後の暮らし

お年寄りが安全に暮らすために

一五〇〇円

変わる主婦・変わらない主婦

一五〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。

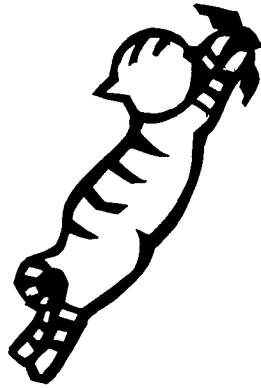
☎〇三―三二六〇―四七七―

い声で話しかけ、抱きしめて頼ずりし、そうしているうちにこわばっていった気持ちさがほぐれていく。

我が家の帰宅の挨拶は「ただいま」

じまった。

素晴らしいハンターだった。垂直跳びで庭の雀を捕まえた。玄関先におかれたたぐさんの鼠と昆虫。



ではなくて「ラッキーは？」だった。いつも、今日はラッキーがこんなことをした、あんなことをしたから話は

子猫達にはよき母親で、メリハリの
ある接し方（ラッキーの百分の一にも
及ばない私）をした。しっかりと家族

の生活をみつめていた。網戸も襖も開け方をすぐマスター。どこに何があり、誰に頼めばいち早く要求が通るかをよく知っていた。

家族を結びつける強い絆であり、よきパートナーだった。

一世一代の買物どころか、ただの拾ってきた猫だったけれど、結局医療費は、夫婦で豪華な旅行ができるくらいにかかってしまった。ただ、ラッキーにかかる費用を惜しいと思ったことは一度もない。

そして昨年の八月、一人暮らしをはじめていた娘が、旅行に行く間だけ預かってと、アメリカン・ショートヘアの子猫を連れてくる。知人から無料でいただいたそうだが、結局そのまま我が家の猫に。もう二度と猫は飼わないつもりだったのに。

この三月、元氣一杯、食欲旺盛だったキッキと名付けたその子の元氣がなくなる。しばらく様子を見ていたが、たまりかねてB医院へ。

ただより高いものはない？

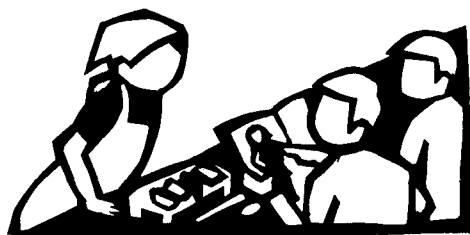
ヘルソ健康器具を買った私

和歌山県日高郡●中松ミナ子

衝動買いしなかった私が……

主婦歴四十一年にも成る現在でも、五万円以上の（品物にもよる）買物をする場合、私の一存で決めたコトがない。したがって、衝動買いをする性分ではないはずだった。

ところが、十数年前、たまたま我が家へ「すし」を食べに来た四人連れの男性客に出会ったことから、私は大きな買物をする羽目に成った。実は、彼等は、健康器具のセールスマンであった。最初、彼等も商売抜きで、昼食を「すし」と決めて店に入って来ただけと思うが……、いや、ひょっとしてアワヨクバ、と下心もあったかも知れない。こちら、つい商売用の笑顔で世



間話をする。そして、そこはプロのセールスマンの饒舌で、アレヨアレヨのうちに、色鮮やかな立派なパンフレットを開いての説明を、聞かされている側の私だった。

どうやら、今になって気が付いたのだが、当時、貧血、低血圧、腰痛、頭痛等に悩まされていた。こういう健康器具にフラツとなったのは、商売に忙しく気にもならなかったが、一般に言う更年期障害の時期ではなかったろうか――。

まさに、セールスマン側には、タイミングよくカモに出合ったようなもので、パンフレットのうたい文句に早くも幻惑状態の私に、

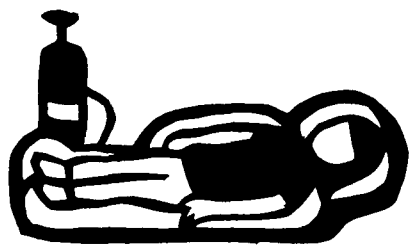
「奥さんのような症状には、まさにピッタリですよ。ぜひ一度試して見て下さいよ」と言い、

「ほら、奥さん今、こんな風に美容サロンでは、一回、何千円も払って痩せたい人が利用しているんですよ」

と同種の器具を使用する美容サロンの

広告まで見せる。

というわけで自宅の一室で、いよいよ試験的に着用することに成った。こ



れは大きく地厚なビニール製で、一見宇宙服に似たソレの中に私は入って、横に成る。すると別の器具とホースで

結んだ穴から空気が送られ、パンパンに脹らませたあと急激に抜いて圧縮状態にする。実に単純な器具なのだが、普段あまり動かさない体のあちこちが、突然の刺激を受けて妙にスッカリする感じは、正直なところ気分爽快であつた……とすでにおぼろ氣になつた記憶の中にも残っている。

ともあれ私は、その時、正しくは夫に説明もいひ加減で「ねエ、買つていい?」と言つたものである。夫も「お前さんがいいようにすることや」と寛大な返事で、またたく間に購入手続の書類の記入欄にペンを走らせていた。その名は「ヘルソ健康器具」なんと三十六万八千円の超高価な代物であつた。

面倒で使わなくなる

今思うと、なぜあんな器具を、わずかな間に買う氣に成つてしまつたのか……ふしぎでならない。

さて数日後、ヘルソ器具が我が家に

届いた。

物珍しさと支払つた金額による興奮と陶酔感で、宇宙服まがいの中に納まつて連日、シュ、シュ、と喜んでいた。

二十の娘は、美容サロンに行かないで自宅で瘦せられると、これまた着用（と表現するものなのか……）していた。

だが、狭い部屋の半分を占領しなればならず、装備とスイッチの切り替えには助手を必要とする厄介さから、次第に面倒となつて、「今日はやめ、明日やろうつと!」といったの間に部屋隅でホコリをかぶるようになっていた。時に珍しがり屋が「なにこれ? ヘエちよつと使わせて」などと言おうものなら押しつけるように貸し出しをしていた。

そして今では押入れの中に納まつたまま、日の目を見ることもない。

一世一代の私の買物とは、効果のほども確認できないままの後悔のつまつた、健康器具のなれの果てである。

あこがれの楽器

福岡市西区●加藤君子（53歳）

ついに買った三味線

「やっと」といおうか「ついに」のほ
うがびつたりする。五十万円もだし
て三味線を買ってしまった。

高校生のころから、三味線を弾く母
の後ろ姿を見て、私もいつかあのよう
に三味線が弾けたらいいなあ、と心の
片隅で思い続けてきた。それが二年
前、友人からの「三味線、一緒に習わ
ない？」という、ただそのひと言で、
長年の夢を実現した。その時は、うれ
しくてうれしくて、子供の時、ほしい
物がやっと自分の手に入った、そんな
気持ちになった。

楽器店から持って帰る時、近い距離
なのに、途中で落したり、ぶついたり
してしまいそうで、心配で心配で、夕

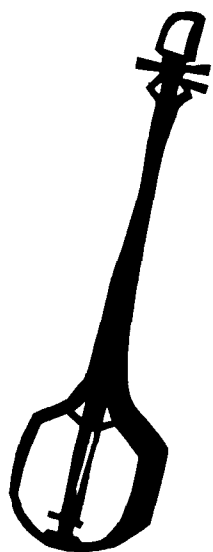
クシーに乗ってしまった。ケースから
出して眺めているだけで、知らず知ら
ず顔はほころび、膝の上に乗せて持っ
た時は手が震え、夢を見ているような
気分とは、こんなことをいうのだろうか。

五十万円は大金だ、自分のためにこ
んな大金を使ったことはない。宝石も
毛皮も和服も買ったことがない。五十
歳をすぎ、子供の学費もいらない

り、少なかった夫の給料もそれなりに
増え、私のパート労働でためたお金も
少しはある。キャッシュで楽器店のこ
主人に渡した時は少し緊張した。

さあ、がんばろう。一生、続けよう。

毎週一回、あの長い三味線を袋に入
れ、たすきに背負い、自転車に乗って
約十分、地下鉄の駅へ行く。それから
電車に乗って二十分、博多駅前にある



カルチャーセンターへ通う。

雨や雪の日は駅まで歩かねばならないが、全く苦にならない。気分は浮き浮き。練習時間は二時間。途中休憩が入るが、バチの持ち方がまだへたで、手はしびれる肩はこる、楽譜をみつめ必死に弾くので、終るころはへとへとになる。

おさらい会に出演

三味線は名前の通り、糸三本が木の棒にまきつけてあるだけの単純な楽器だ。だから一本ずつの糸の音を合わせるのも至難の業だ。弦楽器で、弾いている途中に音が狂ってくるのは、三味線ぐらいなものだ。ギターやバイオリンの演奏中で調弦しているのを見たことがない。

時には糸が切れることもある。こんなむづかしい楽器を弾ける人は尊敬に値すると思っていた。それに私が挑戦しようとしているのだ。

昨年の十二月、おさらい会に出演し

た。舞台の上に揃いの和服を着て正座する。足の悪い人は椅子に座る。総勢五十名以上、大ベテランと一緒に私のような初心者も弾いた。間を外さない

た。

私が習っているのは民謡三味線。唄のほうは十年ほど前から習っているの
で、弾き唄いができたらどんなに素晴



よう、変な音を出さないよう、五曲を無事に弾けた時は、ああ三味線を始めて本当によかったと、つくづく実感し

らしいかと思うが、まだまだ道は遠い。最後に、夫は全く無関心で値段も知らない。

ああ、憧れの 出版をするまで

熊本県天草郡●松本とみよ

家族新聞を出版社に送る

財布からお金を取り出すのが嫌いな私である。百万円の出費は、宙返りジェットコースターに乗るのを決心するのと同じくらいの勇気がいった。これぞ一世一代、出版である。理解出来ない、バカって言う人もいるだろう。

私の発行する家族新聞が面白いから、本にしてみたらと言われたのがきっかけだった。しかし、有名出版社に、素人の原稿持ち込みは出来ない。私は、この家族新聞を共同出版で有名なA出版社に送った。もし、五千部以上売れるとふめば、企画出版となつて、費用は出版社持ちになる。共同出版は、そのワンランク下で、費用の一

部は著者が持たねばならない。

企画書が送られて来た。二五〇ページのハードカバー本。百八十万の費用で共同出版という結果だった。千部刷つて、五百部は著者にくれる。売れたら、二刷目からは、印税一〇パーセント。国会図書館にも納品になるという。全国の書店から注文出来るが、店頭には出ない。

企画出版であつてほしかったが、甘いものではない。だが、決心一つで、夢だった本が出版される。私の心は揺れた。独身時代のへそくりがあるので、費用は何とかなる。だが百八十万は大きくすぎる。本が売れて、黒字になることは可能なのか？全然利益にならない公算のほうが大きい。本を作るだけなら、もつと安い方法はいくらでもある。利益もさることながら、それ以上に、一冊でも多くの人に読んでもらいたいからこそその出版なのだ。趣味のオーディオセットや車に何百万と注ぎ込む人もいないではないか。私が本に百八十万出しても罪にならないのでは？

さんざん迷つた挙句、妹に相談した。

「私なら、本を作るのに一円だつて出さない。出版社がたのみに来るのを待つ。そんな金あるなら、海外へ行くとか、自分に投資することを考えるべき。書く材料を集めるほうに使う」

出版社からたのみに来るなんてあるわけがない。コンクールで賞を狙うのも苦節何百年で老いさらばえそう。

「素人のエッセイは売れるかどうか難しい。書きたいことを書いてもだめ。出版社は、売れる本になら、いくらだつて金を出す」

というアドバイスにはギャフン。A出版に聞いてみた。

「私が本を買うのは、店頭の本を見てというのがほとんど。店頭の本が出ないのに売れるでしょうか？書店宛の出版情報だけでは心もとない。お宅の本は、平均どれくらい売れますか？」私としては費用のいくらかでも取り返したい。できればトントンくらいにはなりたい。しかし、印税一〇パーセントでは、一万部売らねばならない計



算となる。有名作家の本も売れない時代、ベストセラーは宝くじに当たるようなもの。担当者苦笑い。

「まあ、うちは、出版を楽しんでもらおうという方針なんです」

私は、この一言でやめた。書店に置いても、返品が多い。返つて来た時は、傷んで売り物にならない。千部くらいの量では、注文があっても売れる品がない結果となるので書店に置かないそうだ。妹の、「五百冊もの本で、一部屋占領されることを考えてみた？ 本を買って下さいなんて、セールス出来るの？」という言葉も私の気を重くした。

出版社の担当者に励まされる

もう一社だけ、B社にも新聞の束を送ってみた。ここは、共同出版のみを取り扱っている。今度は、担当のMさんから直筆の手紙が届いた。

「とても面白く読みました。きっとよい本が出来ると思います。これをエッセイ風に書き直していただかせん

か？」参考までにとページ数毎の費用明細が添えられていた。ここは、八百部刷って、百部を著者に、後の七百部は、定価の六割で買い取ってくれるという。二刷目から印税七パーセント。

ここから出版された本が一冊入っていた。B社の本は、私好みの本が多かった。題名にも購買欲をそそられたし、売ろうという姿勢が感じられた。本は、いくら中味がよくても、買ってくれねば、勝負も何もない。お菓子と同じくパッケージは重要だ。カバーデザイン、タイトル、帯文のキャッチフレーズにそそられて、中をパラパラッとめくってみる。目次に気になる箇所がある。買ってみようかな？となるのでは？ B社は合格と思えた。

「とにかく原稿を書いてみませんか？」と担当のMさん。

「私も仕事を持っていますので、いつになるか、お約束出来ません」と言う。

「いつまでも待ってますから」ととても明るい方で、私はすっかりこ

の人が気に入ってしまった。きっかけなんてそんなものだろう。

膨大な新聞を原稿用紙に書き直す作業を思っただけで、うんざり。八月の暑い盛りで、筆も進まない。どうしようと思いを抱えていると、「夫婦編、子供編、銀行編、姑編に分けてみました。それぞれ、特に面白いと思うものをピックアップしてあります。参考までに」との手紙が来た。それに従って、作業にかかってみると、意外にすんなりと一週間で書き上げることが出来た。まだ本にすると決めていたわけではなかったが、Mさんに、「とてもよいと思います。勢いがあります」

などとほめまくられて、すっかりその気になっていた。私の原稿を本にすると、百五十ページ、ソフトカバーで百万円也。これくらいなら許せる。何しろ、百八十万で驚いた後だったし。手元に来るのも百冊なら、売る心配もない。B社の取引先の書店には出るといふ。もちろん、営業マンが売る努力

をしてくれる。

このころ、地元の本屋に、B社の本が出ていて、私は一冊買った。「ひよんなことからスリランカ」という本。自分の本もここに並んだ様子が目に浮かんだ。買った本も面白く、編集もよく出来ていた。妹は、またも反対したが、今度ばかりは決心が固かった。「しなかった後悔よりした後悔」が信条の私だ。死ぬ時も前向きに倒れたい。

マン画もはいつとても満足

編集を担当しますとNさんが電話して来た。

「原稿読んで笑いました。息子さん虫好きなんですね。玉虫も好きですか？送ってあげましょうか」

玉虫が宅急便で送られて来た。

「注文はありますか？ 文字の好みは？」

初めは、何もわからないので、お好きなようにと言っていたが、カバーデザインに注文をつけた。本の内容を反

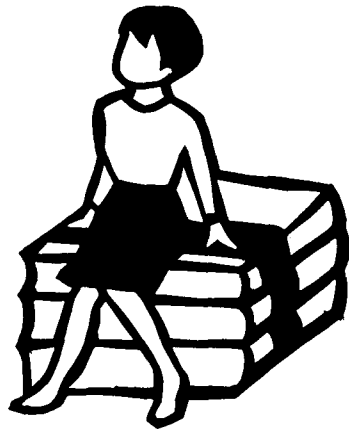
映させるようなイラストがほしいとのんだ。イラストレーターに発注、ラフデザインが送られて来た。それを見てアッと驚いた。私の家族新聞から書き起こしたマン画になっていたのだ。

天井裏の蛇を捕えに行ったじいちゃんが、天井板踏みはずして、こたつの上に着ちて来るシーンなど傑作。見るだけで楽しくて笑っちゃう。まさに目からウロコ。「マン画で出版することも可能だ。一体！このイラストレーターK氏とは何者？ マン画でデビューする気はないの？」

とB社にファックスしたくらい。

気に入ってしまったので、本文にもマン画のさし絵をお願いした。結果は大正解。もうホントに見ただけで笑っちゃった。プロの手で、自分の家庭生活がマン画になってるところを想像してほしい。もう楽しくて、たとえ、本が一冊も売れなくても、私はこれだけで満足した

本の売れ行きなんてどうでもよかった。出した資金は、これだけで価値が



あったと思えた。妹、

「そう言えば、あんたマン画家志望だったじゃない。自分で書けば」

それを言ってくれるな。

帯文のキャッチフレーズをどうするか。帯は赤にするか青にするか。赤は

アピール力抜群だが、青のさわやかさも捨てがたい。

「風水によると今年のラッキーカラーは？」

「ワインレッドよ」

「じゃ、帯は赤ね」

いい加減なものだ。

タイトルを入れたカバーデザインが三種類送られて来て、どれか選べと言う。どれも甲乙つけ難く頭が痛い。

初校が送られて来た。目次や、著者略歴、定価、出版社欄など見ると、本当に本なんだと作家気分になった。

初校の校正を送って一カ月が過ぎた。今度は、さし絵や写真が入った状態で再度校正。その後、もう一回の校正をへて校了となった。

本を各種雑誌や作家、評論家にも送るようにしなさい。将来有益になるからとB社が言う。本を出すということは、その物が売れる以上に副利益のほうがありそうだ。「わいふ」会員、酒井智恵子さんの本「田奈の森」ほどの一人歩きは、期待できないかもしれない

いけど……。

「そんなこと言って、何もなかったらどうするのよ」

と妹。

「かまわないわよ。何も失う物はないもの」

全国からお手紙が来たら楽しいだろうと住所も入れて、あと書きにも感想を送って！と書いた。小松錬平氏の「石の墓は何も語らないが、紙の墓は永遠に語り続ける」という言葉が好きだ。子孫が、私の本を開いて、私を想像する様を思うとたまらない。これぞロマンだ。自分の足跡を残して死にたい、この世に仕事と言えるものを残したいと思いつけて来た。それが、思いがけなく叶おうとしている。

不思議なのは、自分の足をひっぱっているとはかき思えた家庭生活。それがもとで、本が出来たという事実。何が幸いするかわからないのも人生の面白いところ。

本を作って本当によかった。妹、「いいなあ。私も出版しようかなあ」

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に贈り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がございします。

愛とお金と

匿名

今、私は一世一代の買い物をしようとしている。品物は「愛人」。

浮気、不倫、貢ぐ……etc. また深刻で暗い話かと辟易する方がいらっしやるかもしれないので、できるだけ告白ものつぼくなく書いてみたい。

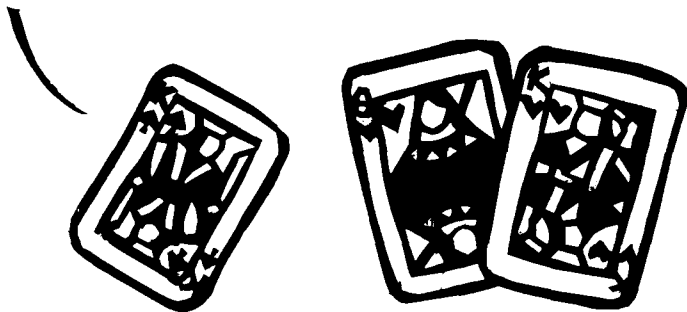
夫がいて愛人がいて

彼と会うようになって、もう十年近くが経つ。何でもそんなことになったのか、理屈で考えたと今でも分からない。優しく包容力があり教養のある夫、可愛い子供、決して家庭に不満があったわけではない。けれども彼と巡り会ってしまったのだ。

人目を避ける関係のうえ、限られた時間での逢引なので、会うのはいつも

ホテルである。でもそれも不思議なもので、ここまで続くと肉体関係というより、もつと原初的な、人と人が求め合う原点の形のようなものを感じている。そして、昔はかなり胸を痛めた罪悪感も最近では薄れ、よいことではないにしても、人に迷惑をかけないならば自分の気持ちにあらがうこともないのだろうか、などと正当化してみたり、運命なのかもしれないなんて思ったりもしている。

一方、夫のことは今でも好きなのだ。家庭のことも心地好く色々している。子供との残り少ないであろう蜜月も、大切に思っている。仕事も楽しい。でも、心は複雑。こんな幸せが続くはずないと思ったり、こういう状況は本当の幸せなのではないと考えたり……。彼と会っている後ろめたさがあるから、夫にも不満をぶつけず、やることはやらねばと思い、家事もこなしているのかもしれない。これぞ上等の仮面の夫婦かもしれない。でもどの家庭でも多かれ少なかれ、家族が仮面を被る



ことはあるはずだ。

色々考えてはみるが、まあ一言でいえば、「好きなのだから仕方がない。でもお互いに家庭も大切」といった、まったく調子のよい月並みな表現に尽きるのかもしれない。ところがそんな私が、最近二人の間に介在する「お金」についてひとしきり悩んだ。

「お金」について見てみると、二人が会うようになって以来ずっと、その経費は基本的に彼が支払っていた。といつても月二、三回のホテル代、お誕生日とクリスマスなどのささやかなプレゼント。妻子を抱える彼の立場でも、そのくらいは何とかなっていたようだった。

私は最初から彼に経済的援助など期待していなかったのだが、何となくホテル代を割り勘にしてとは言ひ出せず、プレゼントをもらえばやはりうれしい。お弁当やお菓子、そしてお返しの特等品ぐらい（あまりプレゼントが多いと疑いの種になり、かえって困らせることになるということに気付

いた）で七年ほど経った。

ちょうどそのころ、彼は色々問題のある職場にいた。その人事管理の難しさは言語に尽くせず、彼も相当苦勞していたようだった。ある事件が起こつて、内密に彼が他人の借金の立替払いをするようになったのだが、その用立てを私に頼んできた。奥さんに頼んだら（浮気？なんかしているわりには呑気な彼は、預貯金の管理はすべて奥さんまかせで、定額のこづかいを貰っているだけなのだ）、なぜ、個人が自腹を切つて払う必要があるのか」と断られたそうなのだ。確かに義務はなのだが、私がもし彼のポストだったら、やはり立替えたくなる事件だった。

そんなこんなで何十万円というお金を渡した（私の家庭も預貯金の管理はすべて私まかせなのである）。七年目にして初めてお金を頼まれて、嬉しいような気がした。こんな時こそ私の出番、やつと役に立てるような気がして、彼がより身近になったように感じた。

愛人にまとまったお金を渡す

そして翌年、彼は職場が変わった。

ノイローゼ続出のポストを数年間無事に務められたのは、私という精神的支えがあったからかもしれないと感謝された。今度の職場は前ほど気は使わなけれど、付き合いが広くあるところ。もともとお酒好きな彼は、極度の緊張感の後のエアポケット状態も重なったのか、頻繁に人を誘つてはお酒を飲み、気前よく払っていたようだ。

お金が足りないのを察して、私からお金を渡し彼が受けとる、そんなことが何度か続いた後、私は彼を試してみたくなった。私と会うのも頻繁になつたし、付き合いも急に広がり、お金が要るのはよく分かる。でも彼がしっかりしているのか、だらしないのか、八年目にして試すなんて変だけれど、はっきりさせたいと思つた。そしてかなりまとまったお金を渡して言つた。「どうせ使うのだからまとめて渡すわ」。そう言われれば、彼はむきになって返

すだろうと思つて……。

けれども予想に反し、うやむやのま
ま、私の通帳は七桁のマイナスのまま
だった。

さて、どうしよう。

お金を返してとはつきり言おうか、
これを機会に付き合いを止める決断を
するべきか。私は大いに悩んだ。あ
んなに頼もしく見えた彼が、ちっぽけな
軽率な人間に見える。お金に馬鹿な人
は他のことにも馬鹿なものだという、
それが真実で、私が長い間錯覚して
ただけかもしれない。私のほうがかな
り年下にもかかわらず、彼の我がま
まを受け入れ甘やかし、駄目な人間に
してしまったのかもしれない。でもで
も、そうだとでも捨て切れない憎め
ない人間性もやはりある。まるでドラ
マにでてくる、男に貢ぐ馬鹿で情の深
い女だなあ、なんて思つたりもした。

価値ある人でいてほしい

そして、ああして、こうして、泣い

て、笑つて、結局こう彼に言つた。

「こんなだらしない人だとは思つて
いなかった。だから別れましょうと
言つても、あなたの一途さにほだされ
てまた会つてしまうかもしれない。だ
から、今度こそあなたにしつかりして
ほしい。どんなに時間がかかつても、
少しずつでよいからお金を返してちょ
うだい。何年先になるか分からないけ
れど、返し終わった時、またあなたは
出会つた時のようなあなたになれるの
よ。それができるかどうか分かるま
で、しばらくは会いたくありません。
これなら大丈夫だと思えたら、私から
連絡をとります。そうして会うことにな
つたら、その時のお金は私が払いま
す」

何とスゴイ。完全に私が主導権を
握つている。彼に言わせれば、こう言
われてほつとしたという。この一年、
いつもいつも自己嫌悪で胸のつかえが
あったのが、駄目な自分をさらけ出し
てしまひすつきりした、後は頑張るだ
けだから簡単だ、などと言う。エアポ

ケット状態も治まってきたらしい。そ
して残つていたお金をとりあえず返
し、一カ月後に第一回目の返金が机の
中にあつた。そしてもう会いたいなど
と言つてきた。

お灸を据えるため、もうしばらくは
会わないつもりだが、そのうちには
会つてしまふだろう。

彼が立派な人間かどうか、彼に価値
があるかどうかずつと悩んできた。よ
い夫がいて、そんな男に入れ込み面倒
まで見る私は、何と馬鹿なのだろう
と。でも、彼が大したことない人間で
も、他人には何の価値がなくても、私
には宝物に見えることもある。もしか
したら夫が過ぎ過ぎた人だからこそ、
型破りで危なっかしく真つ正直な彼に
引かれるのかもしれないけれど、それ
はそれでやはり私には大切な真実なの
である。

もし彼が存在しなくても、私は生き
ていけるだろう。でも彼がいたほうが
毎日が楽しい。我ながら贅沢な話だ
と思うが、自分の気持ちに正直に、これ

からも彼と会い続けることになると思う。

毎月何万円かのお金を返済してもらっても、会う経費を私が払えば、彼

の負担は今までどおりで、形式的には彼の男も立つ。返済されたお金は密かに通帳を作って積んでいる。返済し終わった時、その通帳を彼に見せて喜び

合うのを想像したりしている。それにしても不思議だ。

長年ホテル代を彼に支払ってもらっていたが、決して自分を卑下して考え



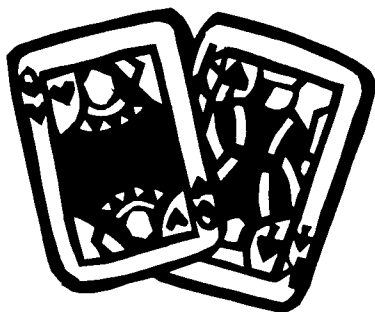
識する。

考えてみれば、貸したお金の額は長年のホテル代には及ばない。私も払っていたのだと思えば、返済どころか何でもないことかもしれない。それなのに「しっかりと」と言って返済を迫っている。

女は支払うことに慣れていないのかもしれない。付き合って九年目にして、お金というものを通して、私が私の意思で愛人と会うということを、強く意識させられた。

もしこの返済計画が途中で挫折して崩れたら、そのことは私の人生にとって大きな勉強になるはずである。だとしたらあのお金で「愛」というレッスンをしたと考えるればいいのじゃないか、などとも考える。その場合、そこでレッスンを終えられるかどうかがまた問題なのだけど……。

願わくば、彼がこれからも私にとって価値ある人であってほしいと思っ



たことはない。彼も、自分がお金を払っているから私を思うとおりにしているなんて、考えたことはないと言っていた。お互いにとっても自然にその状

態を受け入れていたのだ。でも、今度から私が払うのだと思うと、彼と会うことがすごく能動的で、私が自分のために彼と会うのだということ強く意

(え・小林正子)

階段

東京都八王子市

浅川涼子

久し振りに横浜へいった。駅のコンコースに降りたち、人の群れに押されるようにして西口に向かった。

目の前に、中央にエレベーターが設置された階段が現れた。

ああ、と私は思わずつぶやいた。心の奥にしまいこんでいた記憶が、瞬時に蘇ってきた。もう九年近く前になるが、時折この階段を、私は上ったり下ったりしていた。

西口のロータリーからバスに乗り、三ツ沢公園で降りたところに、Sセンターという登校拒否児の宿泊施設があつて、娘がそこで暮らしていたからだ。

娘からよく電話がかかってきた。

「きてよ。すぐに」

娘の声は、脅迫的だったり、哀願的だったり、と

きには涙声だったりした。

私はとるものもとあえず、横浜にいくことになった。駅の改札口で待ち合わせることもあった。

けれど、指定した場所できくら待っても娘が現れないことがあつた。時間とか場所とかが間違っているのでは、と電話をしてきたときの声の調子まで思いだしてみるのだが、確かにこの場所のこの時間だった。

一時間も立ち続けて、しかたなくSセンターに電話をかけても、呼び出し音が耳に響く。諦めてバスに乗る。北軽井沢などという地名の街を通り、三ツ沢公園で降りる。坂を下ってSセンターの古びたドアを開け、脱ぎすてられた運動靴の間をかきわけ、室内に入る。娘の部屋をノックすると、布団にくるまった彼女が泣きはらした目で私を睨んでいた。

「もう、駅で待っていたのよ」

そんな私の愚痴など、聞く耳を持ってないほど、娘は情緒が安定していないのだ。それが分かっていても、私だって長時間待たされた怨みごとを、ついぶつけたくなってしまう。

娘は、通信制の高校に籍を置き、ここから二週間に一度のスクーリングに通い、なおかつ大学受験に備えて予備校に通っていた。

あのころは、私にもみえていなかった。心の快復



が充分でない娘に、大学受験などという過重を強いていたことを……。

「あなたのためなの。あなたの将来のためよ」と、大義名分を掲げていたけれど、なんのことはない、親の都合のためだけだった。娘を人並みのレーンに乗せたい、それが彼女のため、とまたしても世間の軌道に乗せようとやっきになっていた。なんと親というものは、いえ私は愚かだったのだろう。

そうやって訪れたSセンターの近くの三ツ沢公園を、娘と散策したことがあった。

ちょうど桜の季節だった。満開の桜並木の下を二人でもくもくと歩いた。風が渡り、花びらがふりそそぐ。

娘の腕が伸び、私の髪にとまった花びらをつまんでくれる。

「裕子の頭にも」

手を伸ばす私の頬がほころんでくる。現実の哀しみ、憤りなどが遠くへと去っていくひとときだった。

今日、横浜にきたのは、桜の絵を観たかったからだ。岸田劉生の孫にあたる岸田夏子さんが好んで桜の絵を描いている、というのを一年ほど前、新聞の片隅で見つけた。

「薄暮の一時の桜が、だれにも話したくないくらい、いいのです。……明るさのない光の当たっている感じ、とでもいえばいいのでしょうか。その一瞬に悠久の時を感じて……。」と、コメントしていたことに魅かれた。

今日が、Tデパートで開かれている個展の最終日だった。

きてよかった。「月に舞う」「無限の刻」「残照」などという十六点の作品に囲まれて、私は佇んでいた。駅の階段を目にするまでは、娘が横浜に住んで

いたことなど忘れかけていた。娘はアップダウンを繰り返しながらも、人生の階段を上り、昨年の春、結婚した。

そして、この春、娘のおなかに宿った二カ月ばかりのいのちが流れていってしまった。

娘よ。時は悠久なのよ、と私は桜の絵の中で、語りかけたい思いにかられていた。

ろうそくの灯の光のなかで

神奈川県平塚市

後藤美幸

明日は休日という晩は、何となく気分的にリラックスして、子ども達もなかなか自室に引き上げず、だからとりピングで時を過ごすことが多い。

そんなある日の夕食後、クリスマスで使ったスパークリングキャンドルが残っていることを思い出し、今日が特別な日ではないけれど、ちょっと明かりを消して点してみようということになった。引き出しの隅にあったそれは、夏の線香花火のような華

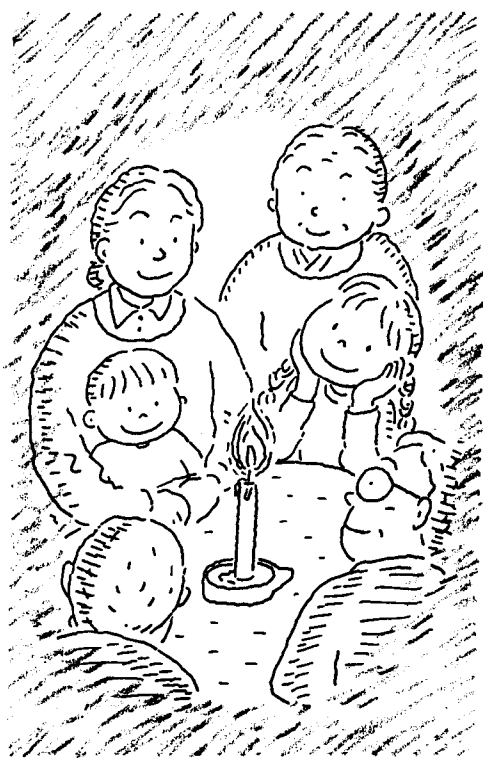
麗さや危うさがない分、その名の通り、わずかなスパークと光を長く楽しんでいられるのがいい。耳かきほどの細いろうそくだが、一斉に三本も点すと、テーブルの上は予想以上の明るさになり、その光の中に子ども達の顔が浮かび上がった。

その顔がやけに立体的に見えたのが不思議に思えて、ふと考えてみた。それは日ごろの生活で、常に高いところから明るく照らす電灯の下で暮らしているためらしい。あらゆるものが広範囲に見渡せて、人間も含めて全てのものが、ただ漫然とそこに「ある」というだけにしか意識されていないことに気がついた。

さてこの暗闇の中に浮かび上がった子どもたちの目は、何だかとても生き生きとして見える。それはただじつとろうそくを見つめ、単にその炎が目反射しているからだけではなさそうだった。彼らと一緒に見つめているからといって、今の私がそんな目をしているとはとても思えないが、遠い昔にはやはりこの子達と同じ目をしていたと思う。

それは台風や大雨による突然の停電で、手探りでろうそくを探して火を付けたあの時。そう、あの時も今日のように家族が茶の間に集まり、座卓の上に白くて太いろうそくを立て、じいっと炎を眺めながら電気が来るのを待っていた。そんな日は決まって

外は大荒れであった。家の中が静かなぶん余計に外の風雨の音が激しく聞こえる。もし私達子どもだけであったら生きた心地もしないだろう。大人達に囲まれていると、不安は全くないばかりか、突然訪れ



た「団らん」に心が弾んだ。子どもは皆きらきらと目を輝かせてろうそくを見つめていたものだ。勿論私の目とて同じだったはず。

確かに停電自体、不都合な出来事ではあったが、

私達は楽しくて、このまましばらくは停電が続けばいいとさえ思った。けれど、いい加減時間が経つと、チカチカッと一瞬の点滅とともに電気が来て、このわくわくするような「団らん」はプツンとお終いになるのだった。

スパークリングキャンドルに二度火を点して三十分くらい、何だかすっかり昔にタイムスリップしてしまった。

お豆腐屋さん

東京都足立区

須賀まり子

「うちのほうは今でもお豆腐屋さんが売りに来るのよ」と友だちに話すと、「へえーっ、珍しい!」と驚いていた。

私の家の辺りには、自転車の荷台にお豆腐の大きな木の箱を乗せた、昔ながらのスタイルのお豆腐屋さんが回って来る。

短く刈り上げた頭にねじり鉢巻き。腰には釣り銭

の入った黒革のバッグをぶら下げ、プー・プー……とラッパの音を響かせながら、路地から路地を隈なく流して歩く。

うちの横を通る月曜と金曜の夕方、隣の実家の母は、時間を見計らって、通りから少し奥まった車庫の横で、小銭をポケットに椅子に座って待機している。

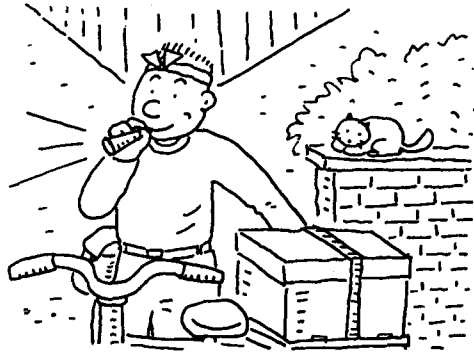
やがて、裏のほうからラッパの音が聞こえてくると、ゆっくりと通りへ出て行く。古くから顔馴染みの母とお豆腐屋さんは、世間話に花を咲かせ、高らかに笑い声を上げる。

たまたま通った近所の奥さんが、お金の持ち合わせがない、と言えば、「この次でいいよ」と一丁包んでくれる。また、その時間留守にするので玄関横に置いてって、と前もって頼めば、それも快く引き受けてくれる人だ。

「俺の道楽はこれさ」と荷台のお豆腐の箱を手でポンポンと叩く。酒も煙草も賭事も一切やらないというお豆腐屋さんは、豆腐作りが本当に生きがいのようなだった。

今年、一月半ば、そのお豆腐屋さんのラッパの音がパタリと途絶えた。

どうしたのかしら、病気にでもなったのかしら……と、母と氣を揉んでいた矢先のこと。お豆腐屋さ



んが交通事故に遇った、というニュースが洩れ伝わってきた。

ある日の深夜三時ごろ、ここからほど近いコンビ

二前の交差点で車と接触。肋骨を六本も折る重傷を負ったという。燃料の薪を仕入れに行き、自転車の後ろに積んでの帰り道だったそうだ。

朝は毎日三時起きだと母に話していたという。これから店に戻って仕込みに入るところだったのだろう。

「肋骨を六本も折っては、治るのに時間が掛かるね」。六十三歳になるお豆腐屋さんの年齢から考えると、回復は若い人のようにはいかないことは想像出来る。私も母も、美味しいお豆腐が食べられないからだけではなく、どこか身内の者が怪我をしたような気になり、気持ちが沈んでいくのだった。

事態はさらに深刻になった。事故から二カ月後の三月、総合病院から老人専門病院に移ったと聞かされた。脳障害が現れたという。

一丁百円の地味な商いで、三人の子どもを育て、所帯を持たせ、夫婦二人これからという時である。七十五歳までは豆腐屋を続けたい、それがお豆腐屋さんの口癖だった。

ここから二停留所先にあるというお店で、奥さんが独り頑張っていると聞いた。この数年、店仕舞いを勤めていた奥さんにとっては、悔やみきれない事故となってしまったにもかかわらずである。

(え・小沢恵子)

おすすめの一冊

文化としてのいじめ問題

「対策」でいじめはなくならない

藤井護郎 著

神奈川県藤沢市 山影夏子



「いじめ」。このことばに接するたびに、もどかしい思いがつのる。現象は名を持つてば、輪郭がくつきりしてくるものだ。

だが、いじめは定義されて逆に膿化し、しかも減少しない。ことばが生活感覚から遊離して、周囲もことにあたる方法をみつけれない。

だからこそ「なぜいじめや自殺があつてを絶たないのか、それをどう考えたいのか、その『考え』を追ってみよう」という本書の意義があるのだろう。

いじめはなぜへらないのか、動物としての人間自体に問題があるのでは？ 人間とはどういう動物かと述べ、文化を持ったことよって変わり、本来のムレ

て生きる生き方・ムレ方を忘れ、生活感覚を喪失したと指摘する。

そうして戦後五十年の、多忙と、価値観の何次にもわたる激変のすえマヒとしてしまった感覚をとりもどすために、豊かな感情交流を、と提唱する。その救いになるのはあくまでも、ゆつたりしたおおらかな人間関係、温かさだと。それをするのとはかでもない親なのだと。

いじめは遊びから始まる、という現場教師の指摘は重い。だからなくなりようはないが、そういう経験をした人として、山田多市という登場人物を設定し、彼に語らせる形式で論は進む。一人一人が自分で判断して暮らす家族、そういう中で

は「いじめ」も相対化され、自殺へと収斂していつてしまうことはないのでは、と。

経済の高度成長からバブル、目的のためにすべてが合理化されたこの時期は、あるいは戦争だったのかもしれない、と結ばれているが、結局、主体性のある一人の人間として親自身が生きていないのだめなのだ。やさしい語り口で、社会全体の問題として大きくとらえながら、個々の生活にたちかえつて親の生き方自体を問いなおしている。

厳しい本である。

農山漁村文化協会
本体一四〇〇円＋税

新連載

自主保育っておもしろい！

東京都練馬区 川村美代子

第一章

八年前、仙台にて

三歳の娘をどこに預ける？

仙台で暮らしていた私は、第三子である次男を妊娠したが、出血とお腹の張りがあり入院することになった。覚悟はしていたものの、二人の子どもをどうするかで頭が一杯になった。

小学生の長男は、自分のことはほとんど自分でできていたのであまり心配

はなかったが、当時三歳になった長女の保育をどうするかで、私達夫婦は考え悩みぬいた。快活で明るく、朝から元気に遊ぶ子どもだったが、おかあさんの私とともに仲良しだったので、昼間の保育環境をどうととのえてやれるかが、私達夫婦にとって大問題だった。

仕事と家事の調整をしながら、夫と長男が家を出た後に、幼い娘を連れて毎日外へ遊びに行っていた。娘はほんとうにおもしろい子だった。秋の日、澄みきった青い空に、赤トンボがおもしろいくらいいた目のことだった。公園のスベリ台のてっぺんにいた娘は、「お母さん、飛ぶよーっ」と言って、あっという間に柵をこえ、

飛んでしまった。もちろん飛んだのでなく、飛び降りたのだが……。

周囲の人達の叫び声の中を私が駆けつけた時はすでに遅く、娘は地面に落ちた後だった。幸い怪我はかすり傷程度ですんだが、さすがに私は一瞬息が止まると同時に、直感的に娘がどうしてこんなことをしたのかを理解した。

血は争えない、私の思ったとおりだった。「赤トシボを見ているうちに



長女、飛び降りたスベリ台

気持ちよさそうで飛んでしまった」。

また、娘はいつもの遊び場所の一つである神社の木の下で、黒い樫の実を拾い家に持ち帰り土にうめ、それから毎日をやっていった。だが翌年、それがネズミモチの木とわかった時はおかしくて、皆で大声で笑ったものだった。太陽が低く、影が長い形になる午後、一緒に散歩をしていると、娘は自分の影が自分の体から決して離れないこと

をととても不気味がったり、不思議がったりもしていた。影に怯え、走って逃げ切ろうとしていたこともある。しみに、自分の影より大きい影に包まれて、やっと一息ついていていた時があった。ゼイゼイと息をはずませる様子は、子どものころの私に似ていた。私は娘に、こんな三歳の時間を出来るだけ自分のものにして、遊びを楽しんでほしかった。なりふりかまわずに、一度しかない子ども時代を安心して遊びこませたかった。

また入院中のもう一つの心配は、贅沢ではなくとも、温かい食事を子ども達にあたえてやりたいことだった。サラーマンの夫は非常に忙しく、毎日のように帰宅は夜半で、家族で夕食がとれるのはたまの休みの時だけだ。私の入院中の夕食は、おそらく疲れて帰る夫が作るには当然限界があり、惣菜屋の弁当がきつと中心になるだろうと思われた。こんな時、長男の小学校の給食を、どんなに有難いと思ったことか……。

そこで娘の保育問題だが、私たちは、親族にあずけるか、あるいは来てもらおうかと非常に悩んだ。だが両親もすでに年老いていたし、都合のつく親族もない。友人達は普段から子ども達と遊んだり、おかずを差し入れたりしてくれていた。しかし出血があつての入院、どれほどのものになるか知れないので、長期間の場合も想定しなければならなかった。

考えたあげくに、私たちは区役所に相談に行くことにした。

ようやく見つかった保育所

青葉区の区役所の窓口に行くと、福祉課の担当にまわされた。私はそこで出来るだけ詳しく、切羽詰まった状況を話した。しかし、担当は、すでに仙台市の保育所は定員になっているので無理、と言う。

生まれてくる子に二人の兄弟がいることや、他にだれも手伝いが見つからないと切実に訴え、せめて保育所の空きの有無を、電話で確認してほしいと

私は頼んだ。しかし、それでも各保育所に、直接確認をしてくれようとしな。私は「万一お腹の子になにかがあったらあなたの責任です。問い合わせすらしてくれなかったと世の中に訴えます」とすごんだ。必死だった。

そんなやり取りの末に、ようやくため息をつきながら、担当の職員は、仙台市のすべての保育所に電話をしてくれたのだ。

驚くべき結果が出た。

その時点で、仙台市の保育所の三箇所には空きがあつたのだ！ ひどいところは数カ月前から空いていた。保育課の担当は、「保育所の市役所への連絡ミスです」と言った。あの時、もし食いがらなかつたら、私達は他にどんな方法を考えられただろうか。

私達はさつそく紹介された施設を幾つかまわり、結局、多少建物は古いが、娘の送迎をする夫の会社に近い（自宅からは遠かった）、自然の環境に恵まれているところを選んだ。そしてなにより、職員と直接話をしてみて、世話

になる保育所をきめた。

そのときの保母の話で心に残ったのは、「私達は知育よりも、他人の力を借りずに、自分で自分のことをちゃんと出来るようにすることから教えます」ということばだった。

私は、長男の幼稚園の教諭から、こんなに自信に満ちたことばを、きいたことはなかった。

父と子どもたちの絆

青葉城址のふもとにあった（老朽化のため廃園になり、今はない）その保育所は、日本で最初の野外スケート場の池と溪谷にはさまれた、美しい桜並木の中にある小さな園だった。

私の入院後、夫は出勤前に娘を送り、勤めが終わると迎えに行く。しかし仕事時間が時間通りに終わるのは稀で、会社には保育所から催促の電話がくるのはしょっちゅうだった。

長男は文字どおり鍵っ子になり、そして何度も鍵をなくした。小学生の長男は、保育所に行っている娘よりはる

かに帰宅が早く、買い物ほとんどは彼がした。食事の片付けも子ども達が手伝った。

次男が誕生するまでのこの時期は、夫の精神的、肉体的な負担は計り知れないものだった。今思い出しても頭が下がる。親だから夫婦だから当然だとは思うが、思うのとやるのでは遙かに違う。仕事と病院と保育所の行き来、そして小学校のことを把握するのは、中途半端な気持ちではできない。

つらい時は「これ乗り越えれば楽になれる、家族が一緒になれる」と、お互いそう言い聞かせていた。

五カ月入院生活をして、無事に次男が生まれた。そのころには長女と父親は、毎日の通園でより密接な関係になり、母親の私が入るすき間もないほどになっていた。

出産後一カ月ほどで退院してから分かったことだが、父親と子ども達との、食事と入浴の様子も実に微笑まし

く、私の入院中に親子が肩寄せ、生活を守っていた様子が想像できた。

特に夫と娘の二人が、保育所へ続く満開の桜並木の下を、歌を歌いながら歩く姿は、母親の私が見ても羨ましいものだった。私は一種の寂しさを覚えた。

保育所というところ

退院してから見たその小さな保育所には、私の高校の同級生が偶然にも保育母をしていて、とても驚いた。照れ屋だった彼女が子どもを両脇に抱え、走り回るのを見ると、こちらまで元気になったものだ。

園では赤ちゃんから就学前の子ども達が毎日ガチャガチャと生きていた。

運動会では近所のパン屋からパンとジュースの寄付あり、雑貨屋からはノートの寄付あり、おじいさんやおばあさんもスプリンレースや綱引きに燃えている。それ以前仮退院の時であったが、夫と二人三脚を楽しんでしまったぐらいだ。一歳の子も二歳の子も、描いた



長男、長女、私、松島にて



写真上 保育園の運動会
下 長女、保育園の運動会するとき

旗を狭い園庭にはためかせ、特別な制服もなく、特別な飾りもないけれど、そこにはとびっきりの笑顔があった。少人数の保育所の家庭的なよさが心に染みた。

日常の散歩や、ハイハイしている赤ちゃんのオムツを替えようとする三歳

の子の真剣な顔、大きい子が小さい子に水をかけては逃げていく様子に、私は縦割保育の子ども本来の逞しさを見た。

ケンカはしょっちゅうで、いちいち止めていたらしきがない。あえて多少のことは目をつぶり、子どもにまかせ

ているほうが、ずっと気持ちの大きい子になるようだ。

昼寝をする子もしない子も、同じ部屋に居てちっとも困らない。気持ちの落ち着かない子を、腕にだきながら一緒に横になるのは、他人とはいえ、保母という名の母親であった。

肩車をし、大声で追いかける後ろ姿は保母という名の父親であった。

各々の事情で子ども達は保育所にいるが、一人ひとりが異なる家庭の子だということとは、一目瞭然だった。毎朝顔を合わせていると、子どもの目や顔の張り、声や歩き方などで様子がうかがえる。家庭が落ち着かないと、子どもはすぐに何らかの影響をうける。まさにその保育所では、親たちが子どもを預ける背景、その各家庭の職業と文化や家族構成、一人ひとりの子どもをとりまく環境は異なっても、しっかりと自分で生きていく子どもの横顔が、浮き彫りになっていた。

この点、長男の幼稚園での経験は全くかけ離れていた。娘の保育所の体験

より早く、同じ仙台で長男の幼稚園時代を迎えたが、心ときめくような出来事などなく、時間ばかりがいたずらに流れて行き、私は子育てをしている実感がなく、空しい日々が過ぎていた。自分の子どもの姿が見えず、放課後の、先生の簡単な報告を聞いただけでは物足りなく、やりきれない気持ちの毎日だった。

母親たちの意識の中には、お弁当がないから楽だとか、放課後続けて教室で習い事があって便利だとか、通園バスがあつて便利だとかいうことばかり、子どもにとってそれがどうかということより、親の便利さのほうが魅力の人が多かった。

また幼稚園によつては、早期教育が子どもの才能をのばすとか、反対にお弁当持ちで野外自由保育とうたつていても、園内保育が中心で、どちらにしてもやはり教諭の報告を聞くだけで、空しいことに変わりはなかった。しかし残念なことに、そのころの私は幼稚園を辞めてはいけないものと考えてい

たのだ。なんとなく義務教育と同じような気がしていた。

妊娠のための入院で、娘を保育所に預けたことが、私の幼稚園と保育所の質的な違いを勉強するきっかけとなったのである。

自主保育への思いが芽生える

長男の幼稚園体験と、長女の保育園体験は、それぞれの特徴はあったものの、私に一つの決意をさせるには、十分だった。染色の仕事をしてはいたが、次男の幼年時代の環境を私の手で作ってみようと思った。幼稚園で味わえなかった親子での共通体験と、保育所の、生活レベルでの縦割保育の逞しさを、自分のものにしたかった。

子どもの育つ所には信頼できる大人と、心からふれあえる友人、自然、遊びされる時間と空間等が必要だ。その土地で育つ子どもは、その地域の風に吹かれ、そこに生きるものに出会い、育ち合うのだ。私達が生き物の一つであるように、その土地にも多くの生き

物がうごめいている。子どもは、毎日の暮らし、遊びの中でそれを実感していく。私たち大人の役目は、幼い子ども達を不安におびえさせず、安心して生きていけるように見守っていくことなのだ。

次男も日増しに大きくなって、毎日野外で遊ぶようになった。風が吹き、木の葉が舞えば、掴まえようとする。闇夜に月の光を追ひ、ずっと見つづける。子との散歩はおもしろい。一歩外に出れば町や自然は、宝の山だ。

子どもは野外でこそ生き生きとし、野外でこそ初めて自然と季節を感じ、人にやさしく出来るようになる。

大人が歩けば一瞬で通り過ぎてしまふ道も、子どもの目と足にとっては、不思議な魅力を秘めたパラダイスだ。それは、ただの道にすぎないのだが、子どもには、単に通る過ぎただけでは味わえない意味を、もたらすのだ。

たとえば町の中なら、石ころ、空カシ、草、家並み、塀、犬、猫、ダンゴ虫、カラス、工事現場、駅、車、自転

車、アンテナ、店の表と裏、アスファ

ルトのでこぼこ道、電信柱と広告のいろいろ、荷物を持ったおばさん、茶髪のおにちゃん、違法駐車を取り締まる婦人警官、ビル風、ガラスに反射する夕陽、踏み切りの音、赤ちゃんの泣き声、バイクの疾走音、曲がり角で擦れ違う人、町の匂い、町の音、町の影、自分の住む町、となりの町、遠くの町、すべての町にそれぞれの個性があることを知る。暮らしがあることを知る。

自分の住む町から離れ、よその町を歩けば、新しい発見があるのは言うまでもない。それは、突き詰めて言えば、自分と他人の違いを知るといふことにもなる。

どんな人が住むのか、どんな暮らしをしているのか……。自分はどこから来た、何者だったのか……。そんなことを無理なくごく当り前に思い始める。

各々のライフスタイルが織りなすその足跡を、子どもは巧みに実に敏感にかぎわける。多くの人生経験はないけれど、柔軟な頭と心で、素直に感じて

いる。

大人もそんな歩きをしてみると、散歩がきつと楽しくなるはずだ。しかし悲しいかな、時間に追われ、片付けなくてはいけない問題に振り回されるだけでは、足元は見えにくい。

だが、子ども時代に十分歩き、遊んだ子だったなら、こんな散歩、そして遊ぶ尊さを、ときどきは思い出すはずだと思う。

一方、山や、川や、海は、そこにいるだけで心安らぐ思いがする。水の流れ、土の匂い、時に静けさに震え、一輪の花に慰められる。空を仰げば流れる雲に語りかける。

一人でいる楽しさも友といえる楽しさも、それぞれにあじわいが違うということ、私達大人は送った人生の経験で知っている。自然への深い敬意を感じている。

しかし、幼い子ども達は、五感でそのことを感じる。町の散歩と同じように、素直な子ども達は自然への怖れと憧れを、頭ではなく、心と体のすべて

をつかって理解する。

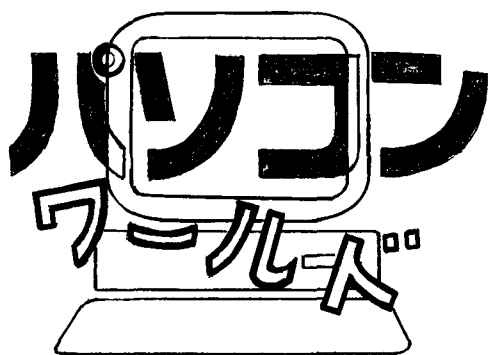
それよりも幼い子どもに、大人は、疲れた心を癒されることさえあるだろう。さらに子どもと歩いていると、幼いゆえの感性に、度々大人は失ったもののいとおしさに気がつく。普段見落としてしまうものや四季の移り変わりを、敏感に感じとって吸収していく子どもの姿は、過ぎてしまったものへの悔いと、忘れかけた生命のもつ力を、大人にはつきりと見せつける。

長男と歩いた道の思い出と、長女と歩いた道の思い出だけでも違うのに、じき三十五歳になろうとする私と次男との道は、このときからゆつたりと、ときに激しく歩く道になろうとしている。野外での自主保育。それはまだ私の中で母としてのひそやかな希望に過ぎなかった。

突然夫に、サラリーマンゆえの転勤の時がきた。長男が中二、長女が小学校に入学して一週間目、そして次男が二歳になった時だった。

—つづ—

(写真提供・筆者)



新聞ごっこ

東京都杉並区●作部 怪子(39歳)

私が新聞ごっこを始めてから、三ヶ月が過ぎた。子どもと絵本についてのニューズレターを発行して、同じ杜宅の住人や、公園や児童館で知り合った母親たちに読んでもらっているのだ。

この新聞ごっこ、私の生活を根底から変えつつある。

私の経歴はちよつとユニークで、大学卒業後、短大と大学院で合計五年学び、そのうちの三年は留学していた。学校と学校の狭間に仕事をし、二度職業を変えた。三十五歳で結婚して、三十七歳で娘を産み、現在、専業主婦である。いろんなことをしてきたが、これといってやり遂げられたことがない。結局、何のスペシャリストにもなれなかった。飽きっぽいのか、持続力がなく、すぐあきらめる。根性がない。自分に自信が持てなかった。

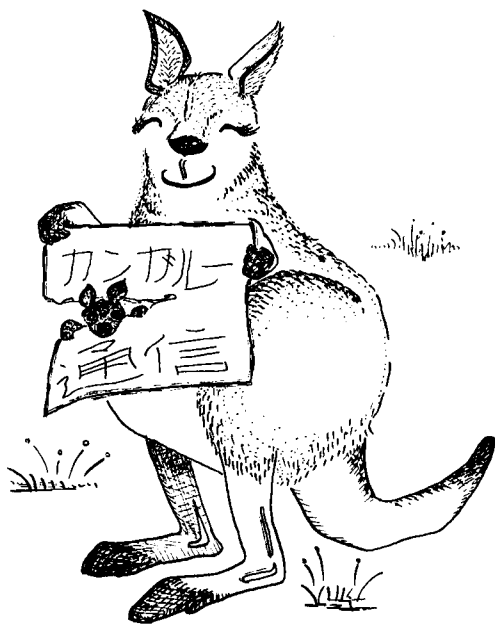
そんな状況は子どもが出来るというそう悪化した。自分の時間のほとんどが子どもに奪われると、やりたいことや出来ることがますますなくなってしまう気がして、どんどん落ち込んでいった。留学時代の友人たちは、不安定な生活を送りながらも、着実に夢を現実のものにして、論文や作品を発表している。振り返って、サラリーマンの妻である私は生活の心配はないが、

いい年をして自分はいったい何者なのか、いまだにわからないでいる。情けなくて悲しい気持ちだった。

「子どもの手が離れたら、何か始めよう」「子どもが幼稚園に入ったら、また勉強すればいい」と希望の先送りをして、ただただ子育てと家事をこなす



生活が一年半。普通のお母さんになり
きろうと、公園や児童館で「普通っぽ
く」振る舞ったが、年齢も経歴もまわ
りの人たちとはやはり異なる。どこに



いても浮いてしまうような気がする。
いきおい自分のことを話さなくなり、
自己表現をしなくなる。そんな自分が
嫌で仕方がなかった。

ある日、娘に絵本を読んで聞かせながら、ふと絵本に関するニューズレターをだしてみてもどうか、と思いついた。そのころ、絵本のガイドブックのようなものをいくつか読んでいたが、母親たちが書いた推薦文みたいなものがあつた。こんなのなら私だって書けるはず、と考えた。さいわい妊娠するまで、近くの児童館の読み聞かせのサークルで活動していたので、多少の基礎知識はある。

ニューズレターを発行するには、それなりのハードもソフトも必要だ。パソコンは大学院時代に論文を書いたので一通り操作できるし、パソコンおたくの夫が家にレーザープリンターも完備していた。さっそく新しいワープロのソフトを購入し、企画を立て、文章を書き、レイアウトする。文章はしばらく書いていなかったの、なんべんも書き直し、推敲を重ねた。手をつけて、一週間で「カンガルー通信」の創刊準備号が出来上がった。すぐにレーザープリンターで印刷してみる。――

けっこうそれっぽくて、いいじゃない。誰に読んでもらえばいいのかしら——。頭のなかで、友人・知人の顔を思い浮かべながら印刷した。

出来上がったものを手渡すのが、また緊張した。人とは違うことをしたら、嫌われたり、敬遠されたりするのではないかと心配だったのだ。「私、こんなこと始めたんですけど……読んでもらえませんか」と、おそろおそろニューズレターを手渡す。相手の意外そうな顔に、少々ひるみながらも、内心ほっとしていた。

「なんでこんなことするの?」とか、「モノ売りかと思った」というやや否定的な意見もあったが、大方は好意的に「えらいねー」「こんなこと出来るんだ」と言ってくれて、ちょっと氣をよくする。でもまわりの反応以上に、「こんなことしてるんです」「私ってこんな人間なの」と堂々と自分を出せたことが、何よりも嬉しかった。

どんな小さなことでも一つ成し遂げると自信がわいてくる。さらに、こん

なこともできるはず、あんなこともしてみたい、とどんどん意欲が出てくる。子どもを夫に預けて、特集記事の取材に出かけたり、いろんな人に会って意見を聞いたり。また読者になってくれた友人たちに文章を書いてもらって、編集者気分を味わった。

思っていたより大きな反響があり、読者からの電話や手紙、電子メールの数もかなりのものになった。たった部数五十部の超ミニコミ紙ではあるが、それでも自前のメディアと読者が出来て、編集長ははりきっている。

世間的に見れば素人の道楽としか受け取ってもらえないかもしれないが、私にとっては新聞ごっこは本来の自分らしさを取り戻すための特効薬となった。もちろんニューズレターの発行が私の最終目標ではないけれど、今、出来ることを可能なかぎりやり続けていると、何か新たな道が見えてくるのではないかと、と樂觀的になっている近頃の私である。

(え・橋本美智子)

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

また、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。デスクの間瀬、老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当いたします。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げますので、それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてください。引き受けてくれるところも多いと思います。

●PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としてもご依頼ください。



ワーキングマザー

十年目

長野県小県郡

花岡京子（48歳）

久しぶりの休日、居間の掃除にとりかかった。私はあまり掃除は好きではないが、しかしやり始めるとことんやりたくなる性分である。

テレビを拭いて下の棚も拭く。その棚に手紙入れの箱がある。たまにはこれも整理しようとフタを開けた。すると――。

随分昔の物がたくさん詰まっていた。夫の友人からのはがき。私の友達からの手紙。下のほうからは娘さちこからのはがきが出てきた。消印は昭和六十三年三月一日付で、さちこ小学一年の時のものである。担任の先生が社会の時間に「手紙の書き方を知るために、家の人へ手紙を書きなさい」といって出させたものだ。宛て名は私になっている。裏を返すと「お母さん、どうしていつも八じにかえってくるの

ですか。三かいぐらいしか六じか七じにかえってこないじゃないかー。もうおこるぞ。ブン」と、このような主旨の文と家族の顔がかいてあった。

そうか、昭和六十三年は今から十年前にもなる。夫が十八年勤務した会社を脱サラして、今の会社を設立したころで、私の生活も大幅に変わってしまったそんな時だ。

あの時の忙しさは会社以外の事を考える余裕などないほどで、食べていくことで必死であった。

このはがきを読むと、さちこの心の叫びが聞こえてくるようだ。そういえば、お風呂に入った時には毎回のようにな「早く帰って来てね！ 明日は早く帰って来る？ 約束だよ」と言われたものだ。子供の気持ちもわかったが、石の上にも三年のころだったので、夕食も一緒に食べることが出来なかった。淋しい思いをさせていたね。ごめんよ。ある夏の日の事、雷が鳴りすごい夕立の中、さちこは家で一人きりだった。おまけに雷が怖いときたものだ。会社

に電話をかけてきて「お母さん、雷怖いから早く帰って来て！」と言う。私は肯定の返事をしたが、結局は帰ってやれなくて、いまだに言われる。

さちこの姉の場合は、学校で蜂に手を刺され、あまりの痛さに家に帰らず会社に来たが、ちょうど来客中だったらしく追い返されてしまった、と同様



に言われる。

あのころは、私の気持ちにゆとりがないがために子供達に悲しい思いをさせてしまった。

さちこの担任の先生は、

「母ちゃん、さちこのために家にいることは出来ないかな？ まあ、生活のほうも大切かと思うが……」

私だって子供の帰って来る時間に家にいて、手づくりのおやつなど作って待っている生活は理想だったが、しかしどうにもならないことだっただるんだ、という事をいやというほど思い知らされた時であった。

そのさちこも十七歳になった。こんな親であったが、伸びやかにすばらしい娘に成長してくれた。あの雷を怖がっていた姿は、今はどこにも見えない。

しかし、女が仕事をすることは大変だなアと実感してしまう。特に我が家の夫は現代風ではないので、家事を協力してやってくれるような人ではない。だから私の家事労働の時間は相当

多い。私のやる仕事にはきりがないのだ。ああ、こうして女はたくましく生きてゆくものなのか。

あら、随分手紙箱で掃除の手が止まってしまった。早く片付けて、久しぶりに家族でゆっくりとお茶にしましょうか。

休暇は終わった

東京都文京区

安村豊子（33歳）

「休暇は終わった」なんて田辺聖子の小説にあったが、こんなに長いこと稼がずに家にいたのは、（幼児時代は別にして）初めてだ。二人目を十二月に出産、産休をとり、長男と同じ保育園に四月から入れるために育児も少しとった。

本当は一年、さもなくば授乳が終わるまで休もうかと思ったのだ。だがマシヨンを買ってしまった。引越す



のは半年先だが、税金や引越して何かと物入りになると考え、短縮した。休みになったらあれこれしようと思っていたが、約五カ月はあつという間だった。

先日、他の異動になった人と併せて復帰祝をしてくれるというので、休暇中だったが、夜呼ばれた。そこでほろ酔いかげんの上司がいうには、

「昔わしはあまり母親に構われず、祖父母に育てられた。だが熱を出したときは、母親のにおいのする寝間着をかいで眠った。子供の小さいうちは、買うもの買わんでもそばにいてやったらええんとちがう」

他にもいろいろいつてたが、要するに自分のトラウマを私に訴えているだけねと考え、はーはーそうですねと聞いておいた。何かおかしいというか、かわいそうで反論できなかった。だつて真顔で「男は会社のために死ぬるが、女は死ねない」なんていうんだもん。

ハイ私は死ねません。男も経済成長

の時代はそれでいばつていられたんだらうけど、今はいつ会社にフラれるかわからない世の中。それで家の中にも自分の居場所がないんじゃないかね。家に帰ってダンナに話すと、

「ふーん。じゃああなたが総理大臣になって、住宅が今の半額で買えるようにしてください。そうしたら喜んで仕事をやめますっていえば、黙るぜ」

今度の休暇で家にいて、私決して仕事が好きじゃなわけじゃないってわかりました。すっかりテレビピっ子になっちゃったし、経済的余裕があれば俺だつて専業主婦になりたいって、ダン

ナもいつてたけど、そのとおり。だけどないのよね。

はつきりいつて日本は貧乏だよ。それなのにみんな自分が中流だと思ってるから、苦しいのよね。私すてきな奥さんになるのもやだし、だったら働いたほうがいいもん（ダンナも、奥さんが家にいるとかいえないとかいう問題じゃなく、おこづかいが多いほうがいいって）。

そんなわけで私、来週から会社復帰いたします。この次休むのは会社をやめて失業保険もらうときだあ（ああ楽しみ）。



（え・佐藤瑞江子）

わいふ原稿整理方針

◆編集部では、皆さんの投稿を「原稿整理」してから、掲載しています。誤字、脱字を訂正することから、読みにくいと思われる漢字をひらがなにす、読点を入れる、長すぎる段落をわけ、改行を調整するなどの作業をします。もちろん、投稿誌という性格上、「著者尊重」の姿勢で整理しています。

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆次のような語は原則としてひらがなに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 頃↓ころ 丈↓だけ 方↓ほう様↓よう 御↓ご お 迄↓まで 良い↓よい 沢山↓たくさん 中々↓なかなか 筈↓はず 更に↓さらに 但し↓ただし 何故↓なぜ e t c.

崩壊した似非樂園

え せ

有料老人ホーム倒産

岡山県

広田 トシ (64歳)

従業員の山口さんの手記

黒川はつ子さんの件

山口記

当直の夜、いつものように薬をぬりに下りて来られた。小さいポチ袋を出して、私に渡した。

こんなに職員にお金をあげる事はない事を話した。死ぬまでお世話になるんだからと強く言う。いろいろとお金を出すことについて話しているうち、こればっちのお金をもらってく

になる額ではない。他の人に言ってもらっては困るが、江原施設長と大林次長さんにも車二台分のお金をあげている、と言う。二台分と言われるとどの程度の金額だろうと思い聞くと、車はどのくらいの値段かとさく。私のも大林のも今の車なら新車で百万円少々である事を言う。黒川さんはそんなに安いですか？ 八百万円あげました、二台買えると思ったという。それで施設長は新車を買って乗っている。七人

乗りの三菱自動車だ。たった一度だけ乗せてもらったことがあると言う。大林さんには江原さんに二台分あずけてあるが買わないんですかときいたそう。六月十八日に長男が結婚するので、今新車を買おうと近所がうるさいので買いませんと答えたそう。私は返す言葉が失ってしまった。

あげる金額でもないし、また受け取る金額でもないことを話す。さらにまだ聞いてほしい事があると言う。

日時ははっきり覚えてないが、部屋へ社長が急に来て、二百五十万円貸し

てくれと言ったと言う。初めは、社長が来たので、出てくれと言われるのかと、胸が高鳴りだしたと言う。二百五十万円ぐらいならと思つて貸したと言う。それからさらに二回、合計三回で五百五十万円貸していると言う。それと食費の前渡しで四百万円出していると言う。

これから先長生きしたら心細い。いっそのこと死んでしまいたいと泣く。九百五十万円あれば、月々十二万五千円払つても小遣いを入れても、六年近くは大丈夫だと話すが、五百五十万円は、もう返つて来ないお金だと



思っていると言う。一回だけ百万円返してくれて、一晚だけ置いたら、次の日事務員がその百万円を、また貸してくれと持つて行つた。そんなにお金に困っているのなら、もうあげたと同じようなもんだと言う。期限は、とつくにすぎで、利子も全然もらつてない。利子などほしいとは思つてないと言う。兄弟姉妹もあてにならない今の私には、お金のみが頼りで、またサンシャインを追い出されたら行く所がない。この事は、だれにも言わないで下さいと泣く。

一晚中寝れなかった。あのおとなしい黒川さんは、どんな気持ちで今の事を私のような一介護員に話したんだろうか。今後次々貸すことがないよう、何とかしなくてはいけないと思つた。かと言つて私は、何の力も、残念ながらない。相談出来ることも、黒川さんの立場を考えると、する人もいない。その時、入居者の山田さんなら何かアドバイスしてもらえるかも……と思つた。が大阪の自宅へ歸つておられた。

六月

やつと歸つて来て下さったので、全てを話した。話すことによって、胸のつかえも少しは楽になったが、いずれ会社へ話し、大きくなる事も引き替へに覚悟した。

山田さんが聞いたことだが、黒川さんが遺言状を書いているそうで、死んだ後、残つたお金はサンシャインに寄附するとの事。社長、江原、大林、小谷さんが知っているはずとの事。

七月六日

また、八時過ぎ、薬をぬりに来られた。

以前話を聞いてもらったので、自分も力が出たと言う、今度お金を借りに来ても、けつして出さないと、いやなことを聞いてもらつたお礼だと言つて、またポチ袋を置いて行く。主人の生前の話や、また娘時代の苦勞話を長時間して、自室へと歸られた。小さい黒川さんが、よけい小さく見えた。ハンカチで涙をぬぐいながら、今の心境、淋しい事を話された。

妹に同居するよう話したが、いい返

事をしない。半分お金を出してやるつもりなのに、と言う。また出してやって長生きして、お金が少なくなるとよい心細いので、来なけりやそれもまたいいしと言う。妹は〇〇教信者なので、江原さんのうわさも多少聞いているのではないかとも思うと言う。自分もうわさは聞いているが、いい人と信じている、と言う。いい人にはまちがないが、お金をあげる人でもないし、またもうほうも考えものである事を話す。今後は、このような事もけつしてしないように言う、しようにもお金はないと笑う。

遺言状のことを聞くと書いていると言う。四人しか知らないのとびつくりし、また、こわいと言う。遺言状も自分の金庫にはないと言う。また金庫の鍵も一ヶは江原さんが持っていると言う。どうやって鍵と遺言状をとりもどしたらいいかと聞くが、私はわからない。本人が見たいので、と言おうかとも言う。たとえ遺言状を返しても



らつても、金庫の鍵を持っているので一緒だと言う。

サンシャインの六階でホーム喫茶が、はじまっていたので、上がつてもらうように、さそいに行く。PM二時すぎで寝ころんでおられた。昨夜寝れなかつたと言う。どろぼうが三回入っている。気がついただけでも三回で、かなりのお金をとられているが、全部はとらない。最近気をつけていた。タンスの引出しの紙の下の菓子の袋に入れていた金を六千円ほどとられて、気持ちが悪わるいのと、こわいので寝れなかつたと言う。

すぐ江原さんに報告する。

最近朝礼で、あいさつをしないとか、職員が入居者にいろんな事をしゃべっている守秘義務が守られていないとかしきりに言う、私の事を言っているんだと思つて聞いている。他の職員も、自分が何をしたのかイライラしている。私は黒川さんのことを言つて私に聞かしているとわかつている。山本さん、野村さんもおこっている。ついに私も野村さんにすべて打ち明ける。

八百万円のお金で江原さんは車を買つたらしい。大林さんは会社に貸しているお金を返してもらわないと長男の結納金がないと言つていた。その後、お金の事を言わないので、大林さんに聞くと、社長が払ってくれないので江原さんが用立てしてくれたと言つた。今思うと残りのお金かな。

山田さんが、全て社長と江原さん、大林さんに話したと、三神さんより聞く。勇気を出して言ってくれた事に感謝する。江原さんは、出るところへ出たら、きちんと処理してあると言つた

そうだ。社長は知らなかったと言った
そうだ。山口のしたことは守秘義務に
反するので退職の対象になると言った
そうだ。

山本さんが四年間で六十七百万円数
回にわたって貸している。四月末に利
子として五十万円くれたそうだ。大林



さんだけ江原さんが返したことを知り、江原さんにつめ寄った。手をすり合わせて山本さんに、この事で今大事になっているので、金の事は社長に言ってくれとおがんだそうだ。社長に言くと、自分は知らなかったと言う。

朝礼で黒川さんが薬をぬってもらうのに、毎晩菓子袋を持って来る件を野村さんが言う。社長は、黒川さんは人に物をあげて、自分とその人をつなぐ人なので、もらわないと深くきずつく。菓子ぐらいはもらってみんなでわけるように。お金はもらってはだめ。以前大金を手元においていたので、あずかって、そこから月々の費用を引いている。ボクには、何もあげると言ってくれない。ほしいわけではないが、内緒内緒が耳に入る。後でお礼を言うこともあった、と言う。

黒川さんに、社長がお礼を言ったのかと聞くと、あのお金は社長には関係ないし、お礼も言ってもらってないと言う。

八月一日

十二時まで山田さんとホールで話す。自分が八月末日までに退居する事とか、今後の事をいろいろと聞く。

八月二日

九時すぎ風呂そうじから降りてみると、下田さんが、社長が呼んでいると言う。いよいよ来たなと思い、仕事をすませて上がる。

社長、江原さんと三人で話す。

社長、いろいろなことを聞いている、入居者からも、職員からも聞いている。山口はこの会社になさわしくないで、自分から退職届を出して、円満退職してくれと言う。黒川さんの件ですか、と言うとそれもあるが他にもあると言う。明日までに返事をしてくれと言う。円満退職でなければ、こちらを手をうつと言う。私はやめるつもりはないとはつきり言う。

次に江原さんに聞く。

八百万円もらった事は事実ですか？と言うと、もらっているが、全部会社に入れている。大林さんに返した百万円もこの金でない。黒川さんにはお礼

を言っているが、月々自分が払っていると車の明細書をみせる。山分けをしたと言われたが、大林はそんな人でない。でも車を買った時はお礼を言ってくれと言っている。この事を山田さんに言った事は、守秘義務を守っていないので、退職の対象となる由、社長にはつきり言っている、という。それなら山田さんに言ったことと、今言ったこととちがうではないかと言うと、いろいろ関係ない人に説明することはない。すぐ呼ぼうと思ったが、今まで待ったと言う。自分が何もないので、すぐ呼ばいいでしょう。今呼ぶのは、もちはだんごにする気ですか（何もかも一緒に丸めこんでしまうこと・編集部註）と言うと、そこまで言うのなら、話はない、これ以上話す必要はない、との事で帰る。

山田さんと三神さんと三人で話す。山田さんが電話で社長にいろいろと言った。

（以上、山口さんの手記を、そのまま掲載しました）

山口さんへの解雇通知

つけ加えておくが黒川さんが金がなくなったというのは、呆けているせいではない。今まで数人の人が、盗難にあっている。それも鍵をかけて出た室内でなくなる。金額も大きく五万円というのも二回ある。施設長に伝えると、誰にも絶対言わないようにと口止めするだけで、調べようとしないうちに、マスターキーでしか開けられない訳だから、調べたら判ると思うのに、調べないから盗むという悪循環になるのだ。後に社長に「度々あった盗難事件はどうなりましたか」とたずねたとき、こう答えた。

「ありやあ犯人が判りました。従業員がやりようたんです。十一月にやめさせました」

十一月までに、解雇した従業員は一人山口さんだけである。盗難はそのあとなん回か起こっている。平然とこんなことを、弁護士と協会の前で口にするこの男のいい加減さを、改めて認識

した。

八月一日、解雇通知を受けて、山口さんが我が家に来た。暴力団風の理事の一人が、

「おまえがなにゆう文句言おうと、守秘義務のある会社の規則を破ったんじやけんう、どねえもならんのんでえ」

とわめいたという。

「わたしは、何もわるいことはしとりません。正しいと思うことをしただけです」

しかし、結局山口さんは辞めた。規則違反だというのなら、入居者からの金品の受けとりはどうなるのだろうか。黒川さんがあげたという八百万円について、施設長は会社に出したと言う。

社長にきくと施設長の江原がもらったと言う。どうしてももらってほしいと泣きつかれて、仕方なく功德だと思つて江原はもらったのだそう。江原に聞いたらくんとはなんと言うだろうか。どちらがほんとでどちらがうそで、それとも両方とも違うのか、よく

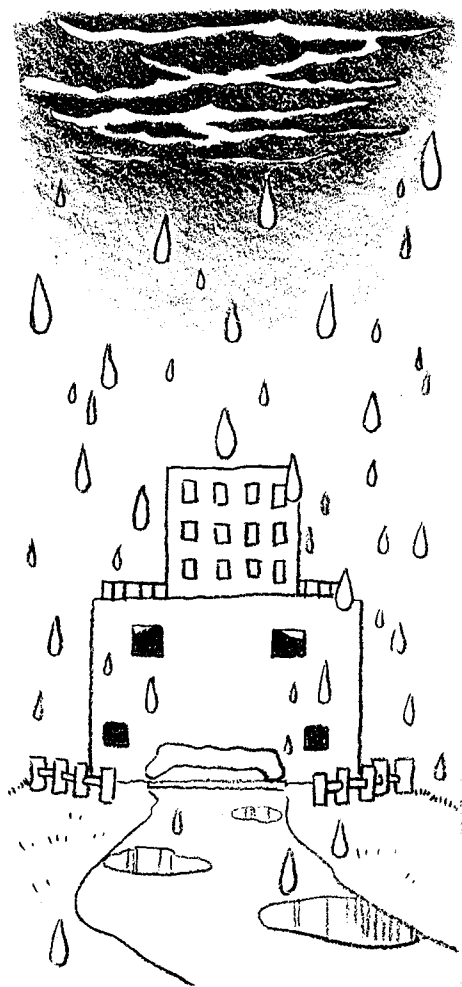
判らない。江原四百万、大林四百万で山分けとの噂もある。

山田さんは大阪から帰った夜、山口さんから話を聞いて、おどろいた。「自分だけ退去したらすむというものではない。全員が、なんとかやってい

けるようにして出なければ」。びわ湖のアクティバというところへ調べに行った。此処も、一度倒産して、入居者全員でしばらく自治管理し、他企業が入って今は立派に立ち直っていると

自治会を作ろう

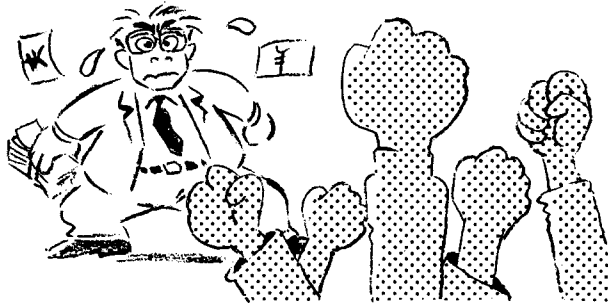
八月八日、私たちも、こんな事情を聞きながら、ここはもう経営が成り立たないとみた。自治会を作って対応を考えなければならない。倒産は時間の



崩壊した似非楽園

問題だ。ひょっとして、計画倒産をさせて、社長は、ドロンをきめ込むつもりかもしれないと山田さんが言う。夫が呼びかけ、山田さん、三神さん、田本さん、他に二人ほど集まった。遠野氏と元税関長は入院中だった。個人で悩まず自治会で対処しよう。もし、会社が倒産するような事態になれば、三人の要介護老人は、近くの特別養護老人ホームに事情を話して預ける。元氣な者が食料を買い出す。あるいは仕出しをとる。管理費で、自治経理して、しばらくがんばる。買い手がつか、公的な援助に持つていくか未だ判らないが――。山田さんがアクティブの例を出しながら、熱っぽく語る。

一応、山田さんが自治会長、三神さんが経理担当（三神さんは、売店をやめたいと思っていた時だった。経理面がめちゃくちゃで、長尾の身内が勝手に品物を持って帰るので困っていた）、副会長は田本さん。私たち（広田）夫婦は、しばしば自宅に帰るので雑務のとりまとめをすることになった。会則



も案を立ててみた。田本さんが忠告してくれたのに、アホアホと罵倒したことを、山田さんは申し訳なかったと繰り返した。

八月十六日に遠野さんが退院してきただので、彼が問題点を指摘していたこともあり、一応了解を得るため、山田さんと夫が六階ホールで話し合う。三日後、自治会を開くことにして別れる。遠野氏は納得しようだったが、元税関長がその翌日、病院から帰ってきて、遠野氏の居室に入り込んで長時間談合した。

その次の朝、遠野氏は山田さんの部屋をノックした。前々日とうって変わった強硬な態度で、

「明日は滝原氏（元税関長）は、病院から帰れないので、自治会はできない。山田さん、私が間に立つから、滝原氏を自治会長にして話し合いましょう。あんたらの組合を作って会社をつぶされたんではかなわんから」

態度の急変をみて山田さんはうちに電話をかけて来た。この電話も盗聴さ

れている不安が充分あった。

退居を決意する

「もうこれ以上、他の人のことを心配してあげる必要はない。私たちはもう、退居しましょう」

もともと遠野氏たちの先々を案じてこそその自治会だった。もう、ふつきた。

山田、三神、田本、広田の四世帯で退居を決める。ここで安定した老後が過ごせる見通しはない。今、最大の目標は、規定の返還金をいかにして取り戻すか。まともに出すとは考えられない。会社に話し合いを申し入れる。

九月に入ってから自治会が不発に終わったことで、甘くみた社長が出てきた。平常ほとんど顔をみせない。借金取りを避けるため、目的もなく岡山方面に車で出て行って、ふらっと夜帰ってくるらしい。ガソリン代は近くの特別養護老人ホーム（南風荘）の名前をつけているようだと、同乗させてもらった人の言。社長はその理事長も

している。年配の保健婦、山本さんが入院したため、最近代りに来た若い看護婦は、特養に応募したはずなのだと、頭をひねっているようだ。

自治会不成立で、私達が旗をまいたと思ったのか、社長がとうとうしゃべる。入居者が思ったより少なく経営が苦しいとか、バブルがはじけてとか経理面の言い訳を並べる。結局四世帯が、退居の意志を伝えると、意外そうな顔をした。この人は状況の判断がにぶいのではないかと思う。退居についての時期や金額については後日施設長と話し合うことになった。社長ではよく判らないのではないかと思わせる節があった。

これを境に、退居についての話し合いを申し込んでも言を左右にして、会おうとしない。

山田さんは、退居を決意した時、夜中の十一時、帰宅している施設長をホームに呼びつけて、朝まで話したという。きちんと返還金を返せるかと詰め寄った。その時三つの切り札を出し

た。一つは、マスコミに事実を公表する。一つは施設長の家が〇〇教の分教会で、その本山の教主夫人と山田さんは、師弟関係にあり、なんらかの手をうつ。世の中はオウム問題で宗教不信に陥っている。このようなサギまがいのことに手を染めていると、ただではすまない、と言うと、施設長は顔面蒼白になって、親父の教会に害が及ぶのなら許さないとすごんだ。それならこの包丁で俺をさせと山田さんもすごんだ。自分の親をそれほど思うなら、私達の立場にもなれるのが宗教家ではないのか。実際、教主夫妻は困ったことになりましたねえと嘆いて、すぐ資料をみたという。もう一つは、教え子が関西に拠点を持つ東光会の会長をしており、「せんせい。いつでも自動車をつらねていきますで。がいせん車を使いましょうか、オウムの村井の手で行きましょうか」と言っているという。

—つづく—

（え・西宮さき）

（文中の名前はすべて仮名です）

マイジョブ・マイホビー

社会教育指導員 という仕事

●新井 純子

夫の転勤で千葉県から神奈川県に移り住み、家庭生活も軌道に乗り始めたころ、私は市の広報紙で、市の非常勤職員の募集を見つけた。週三日から四日勤務。給料十万円強。公民館の社会教育事業の企画、運

営、実施が主な仕事。「社会教育指導員」という名の、私には初めて聞く仕事だった。

仕事につくための条件として、教員の免状を持っているか、社会教育に何年間で携わっていたことがあるかといった内容だった。

勤務地である公民館が自転車ですら十分ほどの所にあった。勤務日が毎日ではなく、その勤務日も自分で事前に組み立て提出するというものだった。一応朝八時から夕方五時までのフルタイムではあったが、時として半日勤務ということもあった。私の再就職の職場としては好条件が整っていた。

その日のうちに履歴書を持って公民館にでかけていた。二週間後、私は採用され、社会教育指導員という仕事を始めた。

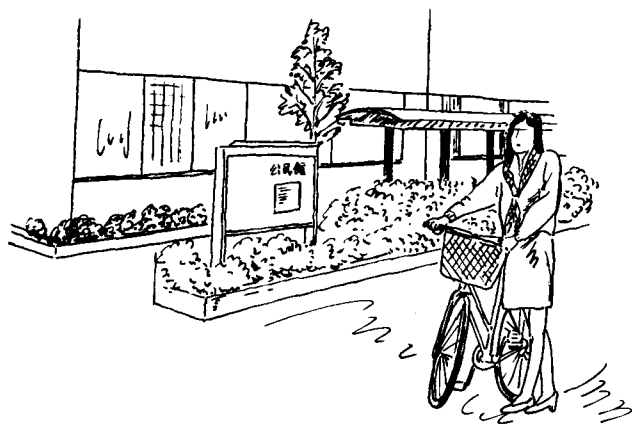
途中、週三日から四日の日数が週二日から三日に減った（俗に言う百万円の壁だった）。私が採用されて二カ月後、日数は減らされた。そして指導員の人数が六人から十二人に増えた。その分給料は、もちろん減ったけれど、まだまだ手のかかる子どもたちを抱えている私には、余裕の働き方になった。

私が仕事を始めたころ、同僚は六名、

三十代の終りの人がひとり、他の方々は四十代だった。歴代指導員で三十三歳という私は、とびきり若いのだった。どの人にも驚かれた。「こんなに若い指導員さんは初めてだ」とか、「子どもたち、大丈夫なの？」と言われ続けた。

学校教育以外の教育が社会教育と言われている。すべての市民のために学習プログラム作りをする。それらを実際に実施する。そのプログラムに集まり、さらなる学習を、公民館を利用して重ねたいという人たちの相談にのる。ということが主な仕事だ。

学習プログラムを作る時は、その内容にあう講師を探さなくてはならない。その講師に対して、手紙や電話で講演の依頼をする。時にタクシーの手配、弁当の世話までこなす。小さい子どもを持つお母さんたちのために、保育ボランティアの人たちを確保する。企画は大変だけれど、やりがいのある仕事だ。しかし、それに伴うつまらない細々とした仕事もこなさなくてはいい。たぶん、それはどんな仕事でも言えることだと思う。コピーをとることも、ホッチキス留めをして冊子を作ることも不可欠



で大切な仕事だ。それなくして学習会は成り立たない。

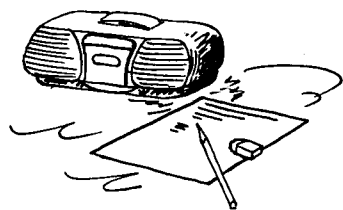
実際、公民館で仕事をする日は、週二日から三日ではあつたけれど、他の日も私はあちこちとでかけて講師探しに励んだ。自分のイメージする講師を探すことは、とても大切なことという思いがあつた。手間も時間もたつぷり使つて、私はプログラム作りをした。

そうやって作ったプログラムは、集まってくれた人たちを喜ばせた。喜んでもらえれば、単純に私も嬉しい。さらなる私の学習につながっていった。新しい交友も広がり、私自身の成長を助けてくれた。

「わいふ」との出合いもそのころだ。田中、和田両氏にも講師としておいでいただいたこともある。

私の生活全部が仕事につながっていた。仕事、私の暮しぶりに反映されていた。その二年間で、私は多くの人に出会い、多くの本に出会い、見知らぬ私、忘れていた私に出会っていった。

社会教育指導員という仕事は、当時の私には満足できる仕事だった。しかし、いろ



いろいろな事を学ばば学ぶほど、知れば知るほどこの仕事の限界というのも見えてくる。

本来、こういったことは市民が自発的自主的に、とり行なつてこそ意味がある。その昔、生徒会での文化祭や体育祭のノリで、ああでもないこうでもないと言いがら、楽しいこともめんどくさいことも含めて、あるひとつのことをめざして時を過す。それは本当に楽しいものだ。その楽し

みを私たち一部の市民が独占するというのは考えものだ。

また、私たち非常勤職員には、通勤手当もボーナスもない。時間外手当も、出張旅費も本を買う費用でもない。

何かよいものを作りたいと思えば、かかる費用はすべて自分の金を使う以外ない。私の手にした給料は、それらのことに消えていった。

仕事を上手にこなしていけば勤務時間内で納まったかも知れない。しかし、たとえば講師への連絡とて日中とれるとは限らず、家に帰ってから夜の九時過ぎに受話器を握りしめることも一回や二回のことではない。テープ起こしをするために家に持ち帰ったこともある。そういったことを、平気でボランティアという言葉でかたづけしてしまう職員にも腹が立った。職員のほうが、私たちの仕事の調整を上手にしてくれさえすれば、五時以降残らずにすむということも何度かあった。彼らの創意工夫のなさにあきれた。

プログラム作りは、とても楽しかったから、私はほとんど新しいことに挑戦した。しかし、こういったことは、私ひとりが進んで走りすることにもなった。ひとりよがりの企画だと言われた。市民あるいは職員の考えるものと、私のものに大きなずれが生じてきた。そうなると私の居場所とは、ここではないのではないかという思いが湧いてくる。次のだれかにこの席を譲る時なのかも知れない。もちろん三年間は続けたいという気持ちがないわけではない。

そんなことを考えていた矢先、夫の転勤が決った。それも今度は海外だ。せっかく働き出した私は、再び仕事を手放さなければならなくなった。二年間の社会教育指導員という仕事は終わった。

読むこと。書くこと。考えること。創ること。この仕事で得たものは大きい。

テニス

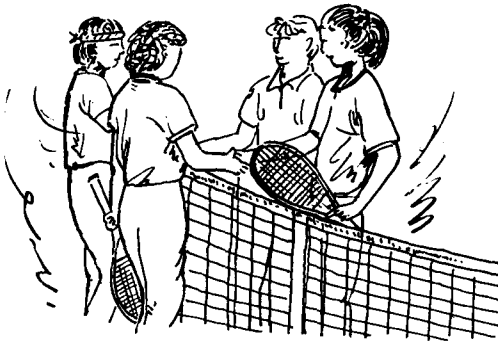
東京都小平市 ● 奥島千恵子

私の打った球は、ネットにかかりゲームセット、八ゲーム先取8―5で、今回の市民大会も一回戦で負けてしまった。風の強い、春らしく晴れた、テニスをするのには絶好の日だった。せめてもう一試合ぐらいできればよかったのにと悔やまれる。トーナメントなので仕方がない。

この硬式テニス市民大会は、春と秋と年に二回、上級者の一部、中級者の二部の二

グループに分れてトーナメントが行なわれる。私はまだ二部のグループ、テニスを始めて五年、大会に出るようになって三年、六回目になる。私の住むこの市は、主婦が

テニスをするのにとっても恵まれていて、市営コートは利用しやすく、テニスクラブもたくさんある。あちこちにテニスウェアにラケットをもった主婦がいる。とてもよい



環境なのだ。

子供が二歳ぐらいの時、子守りで公園によく行っていたが、そこに市営テニスコートがあつて、公園で知り合つた友達かテニスをしていた。小さい、まだ幼稚園に入る前の子供を持つお母さん同士、それぞれの子供を交替で子守しながらテニスをしていたのだ。

子育てオンリーの生活にあきあきして、私自身のことを何かやりたかつたこともあり、このグループにいれてもらった。子供から一時間だけ離れてのテニス、それはそれは幸せだった。テニスをしている瞬間は、妻でもなく、母でもなく、私、私自身そのものだった。

週に一度のこの時間を大事に、少しずつ上達した。上達するともっとやりたくなつた。子供も大きくなつて幼稚園に行くようになれば時間ができ、テニスをする友人も増える。私はテニスにはまった。

テニスはやってみると意外に難しい。ラケットに球をあてて打ち返せばよいことなのだが、最初はそれができない。あたるようになる、コントロールが要求される。

たいていはストロークから練習する。コートでできるだけたくさんの人で利用できるように、私たちのテニスはほとんどがダブルスでゲームをするため、ストローク以上にボレーが必要になる。ストローク、ボレー、サーブ、そのレシーブがある程度できるようになつてゲームを楽しむことができるのである。

同じレベル同士のゲームになるとゲーム中の打ち合い、かけひきが楽しい。今の私はようやくテニスを楽しめるようになった。でもまだまだ奥が深く、練習したいことがたくさんある。

市民大会にもどるが、仲間うちでゲームができるようになって、実力を試すためにも、そういった大会に出てみる。するといつもの実力が出せず、練習のようにうまくいかない。緊張してしまうのだ。この緊張感もふだんの生活にはあまりないのでよい。

また、一緒に組むベアの人との関係もうきばりになつて、その人がどんなに技術的に優れている人でも、心から信頼できる人でないとうまくゲームを進めることができない。テニスのなかにその人らしさがでて

くる、人のつき合いも育つ。

今回の市民大会では負けてしまつたが、テニスを楽しむことを第一目的に、自分の技術の向上、ベアとの関係を大事にして、次回に向けて練習をしていきたいと思つている。

おしまいに、テニスのおもしろさをもう一つ付け加えると、ミックスダブルスというのがあつて、男性とベアを組んで、体力差があつてもゲームができることである。夫と組んでもよいし、他の誰かと組んでもよい。要は、男女、年齢を越えて、いつまでも楽しめる。どうぞ皆さんも、テニスを始めてみてはいかが。

私のゴルフデビュー

広島県呉市●松本 育子（42歳）

熱しやすくさめやすい、ガラスのような脆い石（意志）の持ち主の私は、一時期ゴ

ルフに凝った。と言っても、とてもまともにコースに出るまでにはいかない。せっせと練習場に通い、これでもか、これでもかと、仇のように球を打つ。フックかと思えばスライス、スライスかと思いきやフック。せっかちの私はポコッと球がセットされると、手を出さずにはいられない。白いゴルフボールが泉のようにポコポコと湧き出てくる。いつも気が付くと二百球を超えていた。

よし、どうせなら筋力トレーニングもと

思い、ダンベル体操にも手を出した(本当は瘦せるのが目的)。一キログラムぐらいから始めればいいものを、いずればと思いきなり三キログラムを振り回す。これはかなりこたえた。

いよいよ一週間後にはコースに出るというころ、左手指の関節に痛みが走る。グリップが握れない。どうもダンベルのせいか右肩の調子もよくない。

そしてデビュー当日、朝刊の「今日の占い」の「捨てる神あれば拾う神あり」にす

がるような気持ちで出かけた。結果は散々である。独身時代握力五十もあった私。腕相撲も強かった。そんな私だから当れば飛ぶ。それが悪い。ティーショットでいきなりグリーンを越え、砂にもぐってしまった。全く加減というものを知らない。散々のデビュー戦だった。

後日お医者さんに「腱鞘炎です。当分はクラブを握らないように」と言われる始末。ただの筋肉痛と思っていた右肩の痛みも普通じゃない。

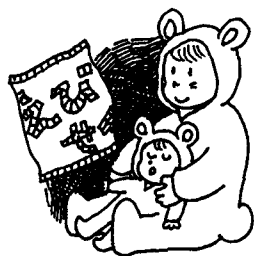
そして、これが私の四十肩の始まりとなった。一年近くたった今でも肩の痛みは益々ひどく、左ファスナーは上げられないし、もちろんブラジャーも留められない。ゴルフ熱もすっかり冷めてしまった。

今では、ゴルフクラブは主人の山菜採りの七つ道具の一つになっている。タラの芽のトゲトゲの枝を引き寄せるのに最適なのだそうだ。蛇避けにもよいそうなの……。

これから春本番。しばらくはタラの芽のほろ苦い天ぶらが、我が家の食卓を賑わしてくれる事だろう。



おさない子を育てる



わたしのだっこ考

埼玉県大宮市

井上いづみ (29歳)

例えば、かっぱえびせん。

二歳の子どもが、かっぱえびせんをもっと食べたいと泣いているとする。

親としては、もうかなり食べているので、これ以上は食べさせたくないと考えている、こんな時。泣いても叫んでも、応えてくれない。もっと大きな声で泣いてみるが、まだ応えてくれない。だんだん泣き声も小さくなってやがて泣き止む。この子どもは、応えてくれなかった大人に絶望し、無力感を感じるのだろうか。

もちろんそんなことはない。

親としては、あれ以上食べたなら、お腹をこわすし、ご飯だって食べられなくなる。ここは、心を鬼にして、もうあげないと決めたのだから。

だっことかっぱえびせんはもちろん違う。

違うけど、何が違うのだろうか。かっぱえびせんは愛情がこもっていないけど、だっこはイコール愛情なのだろうか？ いやいや、だっこは愛情の表現のひとつではあるけれど、決して

イコール愛情のすべてではない。

私の子どもは、生まれたときから規則正しい子だった。四時間毎におっぱいを飲み、その間はほとんど寝ていた。しかし、一カ月もすると起きている時間が出てきて、起きてるときはふぎやふぎや言った。初めてさわる赤ちゃんだったから、泣いているのか、ただ声を出しているのかよくわからなくて、とにかく起きているときはだっこするようになった。だっこすればふぎやふぎや言わないし、にこっと笑いかけさえしたから。だっこしながら赤ちゃんとは会話するのはもちろん楽しかった。

そうして、二カ月を過ぎるころには、大げさじゃなく一日十五時間はだっこしていた。掃除や洗濯は一時間もあればすつかり終わってしまうし、食事の準備だって、小間切れにやればそんなに時間はかからない。全然無理な感じはしなかった。だっこしながら文庫本くらいは読めるし、もっと分厚い本も読みたかったが、まあ赤ちゃん

を泣かしてまで（この言葉がキーンワードなのだけでも）読みたい訳じゃないし、今しかこんなに抱ける時間はないんだし、と思っていた。

一日十五時間、赤ちゃんを抱いてずーっとソファに座っていた。ベラン

ダのすぐそばに置かれたソファからは、空も見えたり、隣の竹やぶにとまる鳥も見えて、素晴らしい景色だった。なんてゆつたりとした素晴らしい時間なんだろうとさえ思っていた。

赤ちゃんは、だっこしながらでしか



昼寝をしなくなった。眠っているから布団に入れようとすると、泣いた。腕の中ではよく眠った。育児相談で「赤ちゃんは子宮の狭い中にいたのだから、お母さんの腕の中が安心するのよ。赤ちゃんがそうして欲しいというならそうしてあげなさい。そのうち、布団で寝るようになるから、それまで待ってあげなさい」と言われた。そんなものかなと思って、だっこを続けた。

でも、三カ月も過ぎたころから次第に苦痛になってきた。いや、苦痛と言うほど積極的なことじゃない。だっこそのものは全然無理なことじゃない。だっこせずにしなければならぬことなんて思いつかなかつたし、たとえしたいことがあっても赤ちゃん時代は今しかないし、それを押し切ってまでしようという強い希望にまではなり得なかった。私の生活は赤ちゃんのための生活。あまり楽しい生活ではないけれど、赤ちゃんがいるんだもの、こんなものよね、そんな感じ。

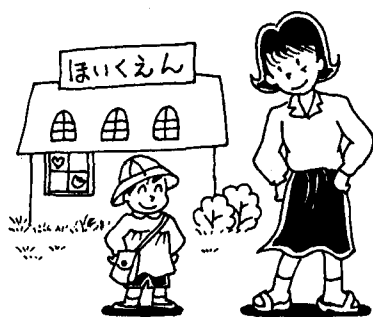
結局、私は五カ月になる少し前に職

場に復帰したので、子どもも保育園に行くようになった。本当に、保育園に預けてよかったと思っている。あの時点で、かっぱえびせんだっこれが終わったから。

「保育園の子ってかわいそうだね、何でも自分でしなくちゃいけないんだもん」と言われてびっくりしたことがあるが、まさにその通り、一歳四カ月の我が子は、汚れたおむつも自分でパケツに持っていくし、着替えも洗濯機に持っていく。ご飯食べよう、というとすぐ自分の椅子によじ登る。私が忙しそうにしているときは、おとなしく一人で遊んでいる。私のコーヒーを欲しがっても、「これはお母さんのだよ、あなたのはこのミルクだよ」と言うし、あ、そうか、という顔をしている。もちろん、子どもを怒鳴ったこともないし、叩いたこともない。そんなことしなくてもけじめはつく。ただし、そんなけじめがつく「保育園の子」はかわいそうなのかもしれないけれど。

田中さんが言う「けじめ」は、かっ

ぱえびせんだっこでは絶対に無理だった。それは、私の生活はあなたの生活とでもいうような、極端なまでに密着・一体化した生活だったから。おじい



ちゃんおばあちゃんがいる家ならともかく、母子二人ではそうなってしまうのではないかと今でも思う。あのままの延長だったら、私は我が子をどんな

子どもにしていたことか。

私は保育園と田中さんのニュー・マザリングシステム（モニターとして受講しました）で救われたけれど、保育園だけがよいと言っているわけではない（でもNMSはいいよ）。保育園に行き始めてかえって休日にわがままを言うようになった子もいるし、保育園に行かなくてもきちんとした考えを持って育てているお母さん友達もいるし、人それぞれだ。

ただ、かっぱえびせんだっこは明らかに存在するし（少なくともここにいた）、それを助長させる育児論も多いと思う。

「赤ちゃんの言うことを聞いてあげる」と親自身の生活をどう確立していくか、というバランスをしつかり考えないとあつという間に「子どもの言うことをすべて聞いてあげる」親、「言うことをすべて聞いてもらわないと我慢できない」子どもになってしまうのではないだろうか。

（え・小宅昌枝）

おすすめの一冊

アドラー心理学の愛と勇気づけの子育て

「ぼくお母さんの子どもでよかった」

岩井俊憲 著
坂本洲子

東京都世田谷区 篠田英子



いったい、これまでにどれくらい育児書が出版されたことだろう。何十？ いや何百？ 書店には、一昔前までは想像できなかったほど、大量の育児雑誌が並んでいる。育児以前の「妊婦雑誌」だってある。一方、合計特殊出生率（二人の女性が生涯に平均何人の子どもを産むかの推計）は、減少の一途をたどり、平成八年には一・四三までになった。

洪水のように押し寄せる情報の中で、辿り着く岸がどこにあるのかわからず、必死にもがいている母親。そんな情景が目に見えよう。『案じすぎるあまり、産めもせず』、なんて妙な格言（？）がでたりして。

本書は、そんな迷える母親たちに「楽

しく幸せに子育てをしていただく」ことを願って書かれたものである。大きな柱としては、「子どもの声に耳を傾ける」ことと「子どもを勇気づける」こと。子どもを一個の人間として尊重して接すれば、親と子の信頼が生まれるという。

「そんなことはわかってるわ。実際、日々の生活のなかで、それができないから悩むんじゃないの」という人のために、具体的な対応の仕方が、さまざまな場面を想定して示されているので、参考にしてみると突破口が見えてくるかもしれない。

だからといって、本書の方法を実行して、上手いかなかったとしても落ち込んだり、悩んだりする必要はない。それ

では、マニュアル通りに事が進まない、とたんにパニックに陥るロボット人間だ。どんなに素晴らしい育児法であっても、子どもは千差万別。その親も千差万別。そして、親子の組合せや環境を考えれば星の数ほどのケースがあるはず。なるほど、と思えるエッセンスを頂戴する、といった気楽さと、図太さで育児に臨みたいものだ。

「プロのお母さんは、たとえ失敗があつたとしても、自分の不完全さを認めながら、失敗から学ぼうとする勇気をもっている」と著者も述べているのだから。

PHP研究所
本体 一一六五円＋税



私が宗教に近づかないわけ

千葉県我孫子市

中野耀子

私の宗教

私は、自分の宗教観や日常の宗教に対するあり方について、いつも自信がなく、迷いのある人間です。ですから本誌三五五号で、松本とみよさんの「私の宗教観」や、時事放談「私にとっての宗教」を、強い関心をもって読みました。人は生活の中で、どのように宗教を受け入れているのか。宗教の果たしている役割とはどんなものなのか。それらを知りたいという気持ちが強かったからです。

松本とみよさんの「私の宗教観」は、とても面白く、読んだ私をぐっと引きつけるものがありました。時事放談は、信仰を持っている方々の、そこに到達された心の軌跡みたいなものを知りたいと思い、期待して読みました。信仰に入られたきっかけとか、信仰を持った後の生活や心境の変化などについても、知りたいと思いました。

しかし残念ながら、時事放談では、それらを理解することは出来ませんでした。

さて私自身のことですが、どちらかと言えば宗教に関しては無知で、信仰心のない人間だと言えましょう。

日頃から宗教に無頓着な生活をしていますから、お葬式などでは、会葬の作法がわからず、予習と練習が必要な有様です。いつだったかお通夜で、お坊さんの席に座ってしまったことさえありました。しかも、私の夫ともども、夫婦揃って間違えてしまったのですか

ら。

そんな私自身の宗教観が、どのように形成されてしまったのか、記憶のままに振り返り、なぞってみることも、少しは意味のあることかも知れません。

寺のお堂で過ごした幼いころ

私は幼いころ、家のすぐ近くの仏教の寺にある幼稚園に通いました。日曜日には、寺の日曜学校へ行つて、仏教の話を聞き、紙芝居を見て、「仏さまの教え」を学びました。その紙芝居には、善人と悪人が出てきて、悪人には必ず、その人に見合つた結末が待つていました。

幼いころの遊び場は、寺のお堂や境内でしたから、どちらかと言えば宗教的環境で育つたと言えるでしょう。ある時、その寺のお坊さんが、彼の奥さんと立ち話をしているのを目撃したのですが、そのお坊さんは、奥さんを低いドスの利いた声で叱りつけていたのです。その態度が何とも横暴に見えました。

私は、お坊さんとはとても偉い人だと思っていましたから、幼心にもハッキリと、「なんだ、お坊さんもウチのお父さんも、奥さんに対して横暴なところは、全然変わらないじゃないか。同じだ」と思ったものでした。

近所に、独り暮らしのおばあさんが住んでいて、その人が神社や寺にお詣りに行く時には、よく連れていつて貰つた記憶があります。そのおばあさんは、自分の息子夫婦と孫娘三人と、同じ屋根の下に暮らしていましたが、彼らとは仲が悪く、屋内別居をしていました。食事も別々にとり、息子一家とはほとんど言葉も交わさないような仲であることが、幼い私にも、なぜかよく分かっていました。おばあさんには、三人も孫娘がいるのに、彼女らを連れて歩くこともなく、私を連れては寺参りをしたのです。そのことは、幼かった私にさえ、「やっぱり仲が悪いのだ」と思わせるものがありました。

おばあさんは、頻繁に嫁の悪口を近所の人に言いふらしながら、一方では、頻繁に神仏



に参詣しましたので、私には、おばあさんの気持ち、全く分かりませんでした。「こんなに神仏を拝むおばあさんが、どうして、息子一家とは仲良く出来ないのだろうか」と、幼かった私にとっても、実に不思議なことでした。

おばあさんが、神仏に参っている時には、「また、嫁の悪口を言ってしまいました。どうぞ、お許し下さい」と神様の前で、反省をしているのだろうかと思ったり、信仰なんて、なんの役にも立っていないのではなからうかと、そんなことを考えた記憶があります。

小学校に入学前に、字が読めるようになってからは、自分で読んだ絵本などで、納得のいかないことが幾つかあったように思います。寺のお坊さんが、人から貰った「おはぎ」を、小僧さんに内緒で、自分一人で食べてしまい、仏像を煮て「クツタ、クツタ、食った」と仏像が食ったことにした話。お坊さんに、お堂の柱に縛りつけられた「雪舟」が、涙で床に鼠を描いたら、その鼠が生きているように上手だったという絵本。

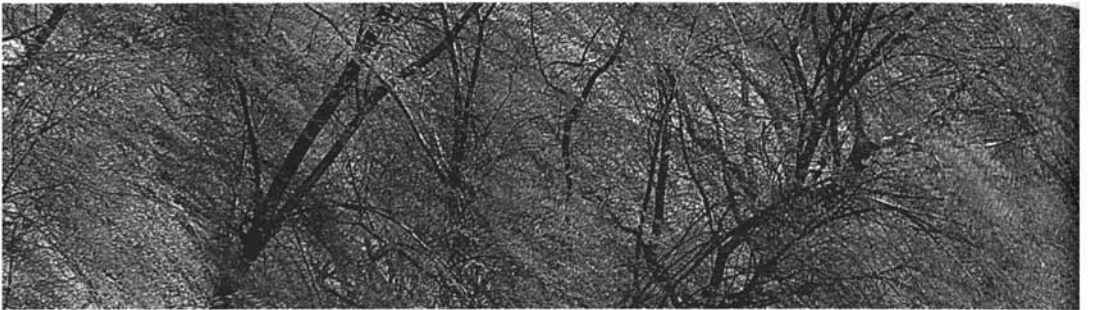
私は幼いながらも、とても驚いた記憶があります。なぜ、心正しい、仏の教えを説くはずのお坊さんが、一人で隠れて「おはぎ」を食べてしまうのか。なぜ、柱に雪舟を縛りつけるような酷いことをするのか。

長じて、少し歴史を学んでからは、ガリレオが地動説を唱え、カソリック教会から迫害されて、「それでも地球は動いている」と言ったこと。キリスト教会や仏教の寺、そして怪僧などが絡み、大きな役割を演じている数々の歴史的な出来事は、宗教に対して疑問を抱かせ、幻滅させるのには十分でした。

しかし歴史上、迫害を受けた殉教者たちにも、十分同情を寄せる気持ちはあったように思います。

私に宗教を勧めた人たち

私が中学生になると、近所に、朝晩一家そろって、「ナンミョウホウレンゲツキョウ」とお題目を唱える家が出現しました。その家の当主は、私の姉が虚弱だと聞きつけると、



この宗教に入信すれば、病気はすぐにも治ると、熱心に母に入信を勧めました。しかし、このことに關しては漠然とではありますが、私の母は決してそんなことで入信するような人ではないという、確信に似たものがありました。母は病氣に關しては、必ず原因があつて、この結果があるのだという考えをもっていたからです。

朝晩、近所からお題目を唱える声が聞こえて来ると、「あんなことをしている間に、釘が一本打てる」と母は私によく言いました。私は、「なるほど」と思い、この言葉に大きな影響を受けています。

高校生になったころ、友人から、キリスト教の日曜礼拝に誘われたことがありました。

その日、牧師さんは、「○○県人は、理屈っぽい」というお説教をしました。それを聞いた時の私は、非常に驚くとともに大変失望してしまいました。その説教の内容は、数日前の新聞のコラム欄に、作家の平林たい子氏が書いていた内容と、ほとんど同じだったからです。

もしあの時、牧師さんが、「平林たい子さんは、こう書いているが……」と付け加えたならば、牧師さんに対する私の見方は、相当違っていたはずです。牧師さんが最後に、

「最近はお金が少ない。先週も非常に少なかった。もっと献金をするように」

とお説教を締め括ったことも、私にとっては衝撃的で、忘れ難い体験になってしまいました。まだ若かったので、そんな私の気持ちを、教会に誘ってくれた友人に、正直に伝える勇氣はありませんでした。

大学時代、指導教官であつたT教授は、非常に熱心なクリスチャンでした。私は、T教授の生き方や、身の処し方に関して、多くを学び、心から敬意をもっております。この大学に入学でき、T教授の教えを受けることが出来ただけでも、本当に価値ある学生生活を送れたと思いました。

ただ一点、T教授について分からなかったことと言えば、なぜキリスト教徒になられたのかということでした。私は、T教授がなぜキリスト教徒になられたのか、お尋ねしたい



と思いながら、とうとう伺うことは出来ませんでした。そんな質問をする勇気がなかったのです。

外国での「宗教を信ずる人たち」は

社会人になってから、ヨーロッパで暮した経験があります。私は仏教徒の家庭に生れましたので、宗教に関する質問には一応、「私は仏教徒です」と答えることに決めておりました。それは、どう説明すればよいのか分かりませんが、「私は無宗教です」と正直に答えることは、何ともそら恐ろしいことのように思えたのです。相手によっては、どう思われるか分からないという想像が働いて、不安な気持ちにさせられたからでしょう。

ある町で、カソリック教会が経営するレジデンスに入居を申し込んで、即座に断わられたことがあります。宗教を尋ねられて、「仏教徒です」と答えたからです。「お気の毒さま、ここはカソリック・オンリーよ」とシスターの服装をした老婦人に、そっけなく冷たくあしらわれたことは、また忘れられない思い出になってしまいました。

近年、北米に暮した時の経験です。私の住んだ町には実に教会が多く、私の家の周辺だけでも、ハンガリー系のカソリック教会や新興のビープルズ・チャーチ、韓国系のキリスト教会などがありました。そして毎週、日曜日ごとに、その教会に集まって来る人々の不法駐車に、悩まされ続けました。信者たちの路上駐車で道はふさがれ、進入路をふさぐ迷惑駐車には、本当に参ってしまいました。ここに集まる人々は、こんな教会周辺の住民に迷惑をかけておきながら、一体、何を祈るのだろうかと思っていました。

また、私が北米に滞在した数年間に、カソリック系の学校で、驚くような事件が頻発しました。その学校の教師であり、神職にある神父や修道士たちが、男子生徒を性的オモチャにして弄んだことで、男子生徒から訴えられたのです。そして同様の事件が、頻繁に、何度も裁判サタになり、新聞やテレビで大きく報道されたのでした。

現在、私が暮している家のすぐ裏に、朝晩「ナンミョウホウレンゲッキョウ」とお題目



を唱える一家が住んでいます。その家の当主は、自分の庭木を剪定しては、その切りくずやゴミを、我が家の裏庭にボンと捨てるのです。自動車を掃除しては、車から出るゴミや吸い殻を、我が家の裏庭にボンと捨てるのです。あなたは一体、何を祈っているのですか。なぜ毎日お題目を唱えているのですかと、つい聞いてみたいという気持ちを抑えることができません。

私が「神」を感じた時

このような体験から、私は日常のどんな困難な時にも、「どうか神様、助けて」などと祈ったことはありません。神にすることを潔しとさせなかったのは、たぶん母の影響を強く受けているからだと思います。

ただ、漠然とはありますが、私流の「神」を意識したことはあります。ずっと以前に、NHKのテレビ番組で、鶏に人為的に「青い卵」を生ませたのを見た時に、人間はそんなことをしてもいいのだろうかと思ったのです。それから、どこかの国で初めて心臓移植手術をしたと聞いた時も、やはり、人間はそんなことをしてもいいのだろうかと思いました。

そして、アメリカの宇宙飛行士たちを乗せたチャレンジャーが、発射後すぐに爆発して、ちりぢりに飛び散ってしまった時にも、同様に感じました。人間の飽くことのない、計り知れない傲慢さ。もつと自然の前に謙虚であるべきだと思ったのです。そのような時、私は自然と神の采配を感じ、人間は小さな存在であると改めて意識したのでした。

以上、私の体験から、印象的だった事がらを挙げてみました。もちろん、どここの世界にも、無宗教の人たちの中にも、眉をしかめたくなくなるような不屈きな人間はいるものです。けれども、信仰心を持っていると公言しているような人々が、私にもたらしたこのような体験は、そこから私自身が感じ取った宗教を、「少し距離をおいて眺める」という姿勢にさせているのです。



私は「キレた」

匿名

昨年の十二月に義父が死んだ。夫は父を亡くした悲しみより、ただただ残された義母のひとり暮らしが気がかりの様子である。何かと言うと同居の話をする。私みたいな鬼嫁でも、老人のひとり暮らしが気にならない訳がない。が、夫のほうから四六時中「オフクロ、オフクロ」を連発されては、ウンザリしてくる。加えて、私の本心として

同居は何が何でも避けたい。このことから、私の体は「キレる」準備態勢に入っていた、と思われる。

運命の平成九年元旦。暮れのうちから私の提案により、義母の家に皆で泊まりがけ（二月一日、三日）で遊びに行くことにしていた。これまで、年始の挨拶だけで泊まることはしていなかったのだ。嫁として妻として、我ながら涙ぐましい発案であったと思う。

ところが、神が私に味方したのか見限ったのか、息子がインフルエンザにかかってしまった。夫の正月休みは一月五日までである。予定をずらせばいいだけの話だと、かるーく考えていた……のは私だけだった。置いてきぼりにされるなんて思いもよらぬことだった。高熱を出している息子や私を無視して、自分だけ「お母ちゃんのオッパイを吸いに」行くというのか。義母と一緒にいたいため、いそいそと下の娘をお供に行ってしまうなんて……。娘はお調子者だから、「泊まる」と言い張ったに違いない。が、そんな大人の説得ひとつでどうにでもなるシロモノである。

義母は、「お兄ちゃんが病気ののだから」と、帰るようには言わなかったのだろうか。タクシーですぐの所にいる義姉夫婦は、何をしていたのだ

ろう。たった一回の電話も入れず（バツが悪いという感性は残っていたのか）、たっぷり二泊してくる夫の無神経さには、とことん呆れた。

とってつけたような、「具合はどう?」の言葉を聞いた途端、私は「ギレた」。三日間も知らんぷりで何て白々しい。気がつく、私はヤクザのおかみさん以上の迫力で、叫んでいた。夫は心の中で、「オフクロのためだもの」と、こらえていたのか開き直っていたのか、やけに平然としている。あろうことか私に説教をし始める。「親と妻子を比べて、どちらが大事かなど、ナンセンス」とか、自分の子に冷たくされた時のことを考え

ろ、とか、のたまう。またもや私は、叫んだ。

「ふざけるんじゃないわよ!」……テレビのコメンテーターじゃあるまいし聞いた風なこと言うんじゃない! モノの本に書いてあったことを音読しているような台詞回しに、怒りは頂点に達した。爆発しさらにガソリンをぶっつけたごとく、怒りの炎が体中を支配した。

「夫は、親と私を秤にかけ、親を選んだのである」——誰が何と言おうと、そーなのだ。

この人は、大地震がきたら這ってでも親を助けにいく人なのだ。——がれきに埋もれている私や子供たちは、さておいて……。



ひがみ根性のイヤな女で大いにけっこう！ 私
は、夫である人には親より誰より、私を一番大切
に思っていて欲しい。いついかなる時においても
……。

幸か不幸か、私はこんなことぐらいで立ち直れ
ないほど、しおらしい女じゃあ、ない。同情も説
教もご免だ！

かれこれ十五年前、私は殊勝な新妻であつた。
「愛する人のお母様だもの、大切にします」「いず
れ同居するのも当然だワ」。これらは少しずつ、
少しずつ蹴飛ばしてしまつて、居所不明のままで
ある。今度は、思い知つた夫の本性を蹴飛ばすだ
けのこと、ナノダ。

夫の韓国旅行

匿名

先日、夫が二泊三日の韓国旅行に出かけた。地
域の消防団の慰安旅行である。

「いやな予感」そんな気持ちもあつたが、みんな
で出かけるのに、不平も言えず気持ちよく送りだ

した。

行く前に、

「氣をつけてね。やばい病氣をもらつて来ないで
ね」

「そんなことあるはずないだろ。信用してくれ
よ」

そんなやりとりを交わした。周りからは絶対や
ばいにきまつてると言われながら、心のやさし
い、淡白な彼のことだからという信頼感もあつ
た。

帰つてきて、当たり前障りのないみやげ話の後、
「旅行のバックになつてるようなんだ。ツーリス
トの人が、こちらへと連れていくとそこは……
」。 (えっ、うそ) 心の動揺をかくして「ふー
ん」。横顔で聞き流すふりをしながらどきどきし
てしまつた。その後、少しその様子について話し
た。韓国は、まさしく日本の男性が女を買いに行
くところのようだ。(聞きはしていたが、実際に
自分の夫がなんてシミュレーションしていなかつ
た)

十人の男性に対して、集団見合いのように女性
が二十人ほど出てきて、誰がいいか選んで、好み
の女性と個室に向かう。中には避妊具さえつけな
かつた人もいたようだ、笑つて言つた。



夫の浮気について、未婚のころは遊びでも絶対に許せなと思った。結婚して八年。少しくらいの遊びなら、という寛容な心も生まれたように思えた。しかし、日本人の女買ひツアーのようなもののそのものは、許しがたい。経済的に豊かといわれる日本人の蛮行だと思ふ。アジアの女性が、日本人の性欲処理を明日の糧とする行為そのものに、せつない気持ちさえ持っていた。

とりわけ自分自身、女性蔑視の行動や、考え方については常日頃から嫌悪感を抱いていた。ましてや、女性を性欲処理の対象とする行動や、愛のないセックスに対しては、最も理解しがたい気持ちを持つている。こういう動物的な性欲に対して潔癖なのは、多くの女性を持つ感情ではないだろうかと思ふし、結婚している女性なら、多かれ少なかれこういった気持ちになるのではないかと思ふ。

日本の中で行なわれている援助交際や売春も、買う男がいるから、成り立つのであると常々から思っている(それだけでない供給の立場もあるのだろうが……)。そんな私の心の中には、自分の夫が、そういう人間の一人になったことが許せないのだ。それと、「浮気(遊びも含めて)」もちよつとくらいなら」と思ふ気持ちの陰に隠れて

いた、絶対に許せないという夫に対する嫌悪感が、心の表面を覆ってしまったのだ。

「嘘をついてくれればよかったのに」そんな気持ちもないではないが、人一倍勤の鋭い私の前で、彼は嘘をつけない。どこから、もれ聞こえたときの反動も恐れたのだろうか。その気持ちもわからないではない。きつと、嘘をついて後で私に知れたとしたら、普通の生活さえできないくらい反動があることくらいは、自分自身が一番予測できる。

帰ってきた夜から、一緒に布団で寝られなくなった。子供と一緒に二段ベッドの狭い場所に入って眠る日が続いている。普段は普通に話し、笑いあったり、相談もして、何の変化もない生活を過ごしている。そのことについて夫は何も言わない。言い訳もしないし、私もそのことについて触れたりもしない。何事もない二人の関係に、実は大きな溝があるのだ。しかしその溝をお互いに渡ろうとしない。まだほんの一週間ばかり過ぎたところである。

時が解決するのだろうかという客観的な想像もする。しかし、私の心の奥深くから、分離して浮き上がってきた、男に対する嫌悪感は、なかなか元のように混ざり合いそうもない。いつまでも心の表面にゆらゆらと漂う、ぎらぎら光る油のように。

在宅介護を決意するまで

東京都日野市 十河温子

ああ自分はなんて不幸なんだろうと嘆いてみても始まらない。姑の介護から逃げようと、夫に「したくない」ではなく「できない」とはつきり宣言した。そして夫のいる時に集中的に家事をして、疲れた風を装い、夫の翻意を願った。

ひよつとしたら逃げ切れるかも知れないと一時は明るい見通しだった。しかし、

「お前は強い、スーパーウーマンやものな」

とおだてられ最悪のパターンとなっていた。

きっかけは入院中の母の転院先が見つからないことにあつた。病院のケースワーカーの人に関連病院を紹介してもらい、いくつか申し込みに行ったがどこもうまくいかなかったのだ。

まさか断わられるとは。母は寝たきりとなり自力で体位を変えることができず、食事は経管栄養のみ。一滴の水さえ飲み込み難く、常に医療行為を必要とする容態にある。それでも「当院には該当しません」と返事された時には、思わず我が耳を疑った。

残るは老人専門病院か老人保健施設しかない。
パンフレットを集めてみた。

「どこがいい？」
と聞く私に、

「見学してくれば？ まるでブローイラーやで」
と夫は気のない返事をする。

夫は母を「ブローイラー」にしたくはないのだ。
私は自分の自由と、母が「ブローイラー」になるこ



とを天秤にかければ、私は自分の自由を取りたい。どんなねぎらいの言葉があろうともだ。

しかし夫はなおも食い下がる。

「厄介者扱いはどうかと思う。もう少しや。我慢してーな。そのうちええことあるさかい（これはもう二年前から聞いている）」

私が在宅を拒否するのは、一つには不安でならないからだ。痰を喉につめたらどうしよう。吸引器はうまく使えるだろうか。もし私一人の時に息絶えたらどうしよう。警察が入って疑いをかけられるのは目に見えている。

「介護疲れの嫁、姑の息の根止める!!」

と新聞に載るかも知れない。記者が飛びつきそうな事件だ。私の動揺をよそに友人たちは、

「大丈夫よ、十河さん。私たちちゃんと弁明してあげるから。『どういえば随分悪口言つてましたワ』って」

持つべきものは友か？

家で看するということは、また家で死を看取するということだ。それは私にはあまりにも重い。耐え難い任務だ。

耐え難いのは夫も同様かも知れない。母を「人質」に取られて恐妻家へとなり下がらなくてはならない無念。夫婦の力関係が大きく逆転したと、

両手を上下に大きく引き離す身振りでことあるごとくに人に話し、笑いを買う夫。それでも肉親としての気持ちを大切にする。その心意気に私の心は揺らいだ。

日野市は医師会が訪問看護制度を作っていて、週二―三回看護婦さんが訪問してくれる。若くてハンサムな看護士さんなら元氣も出るだろうが、欲は言わない。他にヘルパー派遣、在宅入浴サービスもある。

シナリオは夫の思い通りになってきた。私が健康で無職であつたばかりに、母用に使える客間があつたばかりに、そして優しい息子さんⅡ夫が内科医であつたばかりに、私は「逃亡者」にはなれなくなった。

グメ押しをするかのように、同情的だった京都に住む私の母が、

「こうなったら最後まで看てあげよし」

と私をウラギった。母は変わり身が早い。さらに、

「人生そんな甘いもんと違ふえ。苦勞しよし」とも言う。

出家しなくても修行ができるということか。

アリガタイ。アリガタイ。

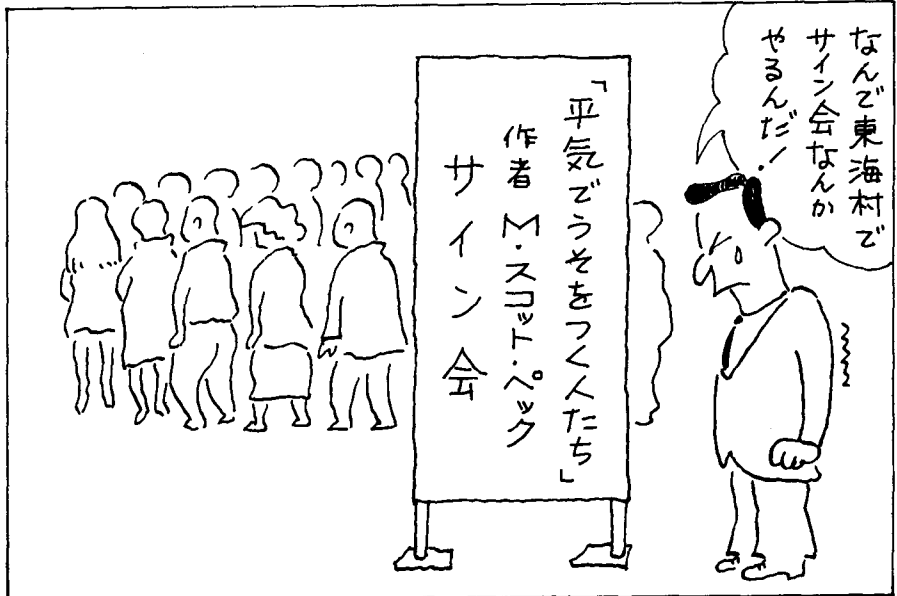
(え・カステラネンコ)



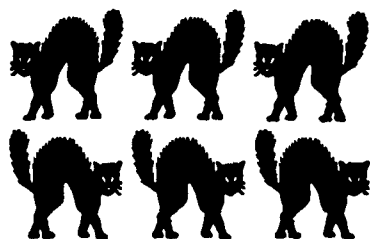
平成
おたまたげーション

32

「平気どうぞをつく人たち」
動燃の



サブ



レ シ ー ブ

私も議員を 目指そうかな……

東京都目黒区 クワシイ智美

二六五号の田中編集長のファム・ポリ
ティク編集室より「女性よ、議員を目指そ
う」を読んで、なんだか耳元で呼ばれてい
るような気がしました。私が小学生から二
十代になるまで、父は三期十二年、区議会
議員をやっていました。それが誘因かどう
かわかりませんが、この再就職の提案は私
にとってハッとするものがありました。

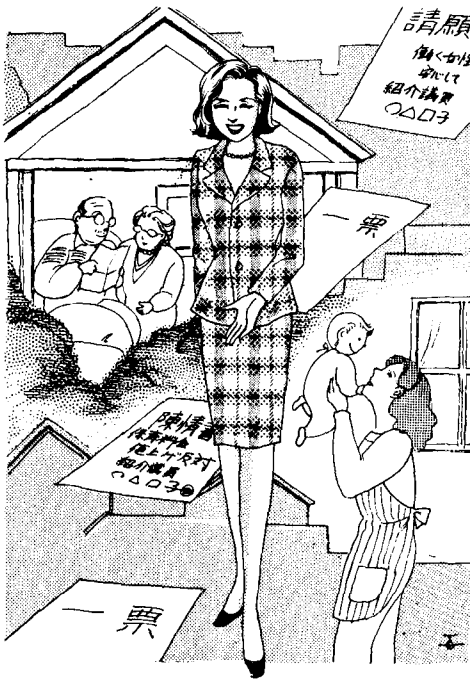
最近議会へのもどかしさを感じる機会
が、ごく身近に起こりました。保育園の保
育料の値上げ反対運動に関してです。国や
区の言い分としては、十数年保育料の値上
げがなかったから、今回は値上げすべきと
言います。でも実際には毎年のベースアッ
プによって査定額が上がっていくので、実
質的には値上げをしているのと同じなわけ
です。私たち保育園の親は一生懸命、地域の
議員たちに値上げを反対して下さるよう
にお願いしました。ハガキやファックスで要
望を書いて送ったり、電話を直接して話を
聞いてもらったり。

やはり議員というのは今まで長年自治体

の主導権を握っていた人、男性、中年以上
が多いですね。今回の件で私たちを随分
バックアップして下さった女性議員は、共
産党の方でした。私は特別共産党を支持し
ているわけではありません。共産党という
と周りの目が「アカだ、あの人は」とかに
なりがちです。しかし私だけの見方かもしれ
ませんが、共産党の方は弱い立場の人の
面倒みがいいのではないのでしょうか。

私が現在住んでいる区は老人が多く、子供
を持つ若い夫婦があまりいないようです。
周りはみんな豪邸住まい。住むところ、生
活費、とにかく経済的には困っていないの
です。私のように幼い子が二人いて、ア

パート住まいでギリギリの給料で過ごしている家庭は、とても少ないものと推測されます。この保育料値上げ反対運動・署名運動を通して思ったこと。それは今の私たちの状況をよっぽど分かってくれる人でなくては、理解し合えるのは難しいのだという



ことです。

私はなんの組織も持っていないしこの区に住んでまだ三年しか経っていませんが、私なりに活動してきたつもりです。区が主催する女性問題フォーラムの実行委員を二年やったことによって、区内の同じ意識を

持った人と知り合いになりました。区の広報も毎号欠かさず読み、区内の行事によく参加します。区政モニター（期間は二年）に立候補して施設見学に参加したり、区長との対話集会で、子育て家庭の現状や予算案についての質問などもしました。でもあまり大きく行政を動かせない。区長との集会でも質問時間が足りなくなったり他のモニターはご老人が多数。議会と同じ状況です。私は人のために働くというより、自分のような立場の弱い人間の意見を反映させるためには、安易ではありますが、この手段で議員がいいのではと思ったのです。議員になれば少しずつでも政治・予算を動かせるのではと。

私は女性。勤め人。幼い子を育てる親。夫が外国人。付け加えるならば、収入の面では生活保護世帯より上で中流家庭より下というスレスレ生活で、どうにかやりくりして毎日暮らしています。マイノリティに足をつっ込んでるので、その思いを語ることができる。

立候補するには事務所をかり、チラシやポスターを製作し、かなりの出費があるだ

ろうし、人のイヤな部分を見てしまうおそれもあります。応援してくれると思った人が候補に投票する約束しているとかなど。でも元々人前に出て話をしたりするのは大好きな性格です。十年経ってもまだ四十歳になっていないので、その間にもっと人脈を作っていくかと思っています。自分の中で起こったパワーを無駄にするのも勿体ない。その間に議員への野望が薄れていっても、ネットワーク作りはけっして無駄にはならないと思います。

特集を読んで思ったこと

京都市伏見区 飯塚真里 (33歳)

二六五号の特集「私の初体験」を興味深く読んだ。なるほどおもしろいなと思ったのは「お粗末でした」の文中。肉体的な快楽は精神安定剤どまり、精神的な快楽が先行する相手は、かならずしも肉体的

快楽になるとはかぎらないということ。きつとそうなんだろうなあと感じた。

気になったのは「実際に体験してみるとセックスを汚いものと表現されていること。セックスすることによって体が汚されるのではないかと危惧した、を読んで「うーん」とうなった。また、忘れ得ぬ人々「心の夫」で昔の恋は美しかった。清らかだった。「セックスすると思えば美しくなくなり、清らかではなくなるのか」とため息がもれた。

かくいう私も十代のころはセックスに対してマイナスのイメージを持っていた。周りにいた大人たち（親や教師）の影響でそのように刷り込まれていったのだと思う。昔の性教育は今のようになされていなかった。女子だけ集められ、ビデオを見ておしまいの性教育だったように記憶している。そういう環境の元に育ってきたのだから、汚い暗いものと感じるのは当然かもしれない。

が、今はセックスをプラスのイメージでとらえている。たしかにグロテスクで人間が一番、動物に近くなる格好になり、照れ

もあり恥ずかしい。でもセックスはスキンスリップの一つであり、快楽を得ることができ素敵なことだと思う。他にこんなに気持ちよくする行為があるだろうか。セックスをどうとらえるかは個人の自由。だが、よいお世話と承知しつつあえて言いたい。セックスのよさを知らずに人生終わらすのは、もったいない気がする。

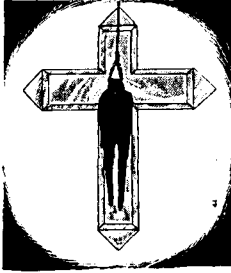


「死刑廃止」について 思うこと

東京都八王子市 島田容子

二六五号「時事放談」を興味深く読みました。

今年の三月ごろ高校二年の娘に「現代社会の時間に『死刑廃止』をテーマにディベートをする事になったから意見を聞かせて」と言われて、話し合った直後だったか



からです。

私の中にずっと前から「死刑制度」への疑問があり、娘も「死刑廃止」賛成の立場で発言すると言うので、ありのままの気持ちを伝えることができました。

娘と議論したことのひとつは「理論としては理解できるが、被害者の立場に立てば『死刑』も仕方がない」という考え方についてです。私も人の子の親として、この心情はよくわかるのですが、その反面加害者が「刑死」しても、失った子供が帰る訳ではなく、合法的にはあっても、一人の人の死を願った事やその結果に、心を晴らすこともできず、かえって暗く心が閉じてしまうような気がします。

新聞で、地下鉄サリン事件の被害者の家族が「簡単に死刑になつてほしくない」と言い、自分の行為の結果を受け止め、まず謝罪してほしいのだとの気持ちちをのべられていました。

私はこの心情にとても共感できます。「死刑」などで、簡単に手の届かない世界に消えてはしくない。加害者は犯した罪を冷静に受け止め、償いの日々を重ねてほし

い。受刑者として暮らしているという事実の積み重ねだけが、恨みの感情を和らげてくれるような気がするのです。

「時事放談」では話題になっていませんでしたが、犯罪の発生と社会背景についても気になります。個人的な事件に見えても、犯罪のうしろに社会の問題点がかくれています。例えば地下鉄サリン事件なら、若者の心の問題とか宗教法人に対する警察の弱腰など……。

こういう現実を改善しようとせず黙認していた社会背景に助けられて、サリン事件は実行されてしまいました。主権を持ち、社会を構成し秩序を維持して暮らしている私たちに、責任はないのでしょうか。

同じ時代に暮らしていても皆が犯罪に走る訳ではなく、本人の責任は回避できませんが、社会の構成員である以上、私たちもまた「私は関係ない」と言い切れないと思うのです。

「死刑にすればいいんだよ」と自分と全く無関係の事と割り切り、切り捨ててる事に、危険を感じてしまうのは変でしょうか。

(え・梅村 蒔)



忘れ得ぬ人々



○君

茨城県竜ヶ崎市の

小川文字

中学のクラスの中、ムードメーカーと言えるグループの中に○君がいた。勉強はまるでだめ。でもマンガの主人公に似た風貌と、ボケの役割を進んで引き受ける姿勢と、目立ちたさ丸出しの行動が混ぜ合わさって、クラス内のヒーロ的なポジションに納まっていた。

そんな彼にはずつと年の離れた妹がいた。日頃からよく面倒を見ており、連れ歩いたりして可愛がる姿を時折見かけた。

ある日○君は自転車の後ろに妹を乗せて、近くまで買い物に出かけた。店の前に

自転車を止め、ちよつとの間だからと、荷台の妹をそのままにして店内に入って行った。その時、前を通り過ぎようとしたトラックが、自転車を引っかけて転倒させ、投げ出された女の子をひいてしまったのだ。妹は即死。

目の前で、しかも自分の不注意でこんな事故を引き起こし、妹をも失った彼が、大変なショックを受けたことが見て取れた。

やがて季節が変わり、事故のことも人々の話題から消え、○君も以前の明るさを取り戻し始めたある日、学校で交通安全教室が行なわれることになった。校庭に並んだ全校生徒の前に、地元警察からやって来た警察官が、交通安全についての講話をした。その話の中、「この近くの学校のこと

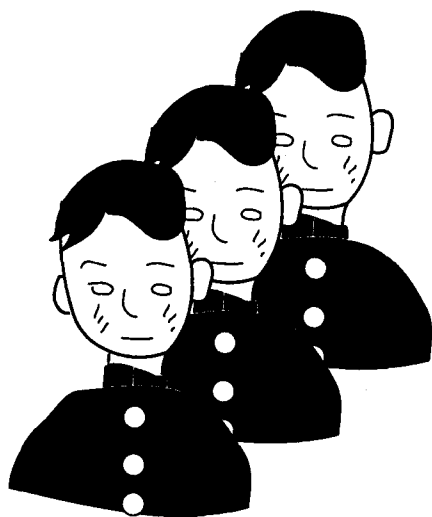
ですが……」という前置きで、○君の妹のことが語られたのである。兄の不注意ということを強調して話される話に、私の斜め前に立つ○君は、胸に顔がくっついてしまふほどうなだれて、拳を握りしめたままじつと耐えているのだった。

下調べもせずにやってきて、とうとうと話し続ける警官の無神経さ、静観するばかりの教師たち。私はただただ怒りの視線を投げかけることしか出来ずにいた。

やがて年が変わり、私たちの受験日も近づいたある日のこと、○君から突然電話がかかってきた。話があるので会ってほしいと言う。

訳のわからぬまま出かけていくと、いきなり「交際してくれないか」と切り出して

きた。私にとってはクラスメイトであるだけで、特に親しく話したことはないし、「面白い人」以外、何の感情も彼に対して持ち合わせてはいない。けれど高校へ進学せず働けらしいという噂と、事故によって傷ついた彼のあの日の姿が頭をよぎり、無



下に断ることが出来なくて、「友達ならば」という曖昧な返事をしてしまったのだ。翌日登校していくと、友人達という私に對し、あからさまに親しみを込めて、話しかけてくるようになった。何日かそんな日が続いたけれど、O君と付き合っているな

なんて、私は友達には絶対に知られたくなかった。何でもないふうを装って無視することにも疲れ、ついに彼に手紙を出したのである。

「受験直前で迷惑です」と書いてポストに入れる時、ほっとした思いと、中途半端な同情でO君を翻弄してしまった後悔とが交錯し、苦い思いが胸に広がった。

やがて受験も終わり、卒業式を待つばかりとなったある日のこと。仲良し数人でたわいもない話をしている時、一人が、

「O君に電話で付き合ってくれて言われたけど、断った」と言う。するともう一人も、

「やだあ、私も」

何のことはない、彼はクラスの女の子何人にも声をかけていたのである。

あれから二十五年が過ぎた。

卒業後は担任の尽力で、一応は進学したと聞いたが、その後の噂は途絶えたまま。何度か開かれた同窓会に顔を出すこともなく、名簿のO君の欄には名前があるだけで、住所も何も空白のままである。

(え・山田京子)

豊穰の女神

——アンナプルナでの骨折——

奈良県生駒郡 高松恭子

■豊穰の女神■

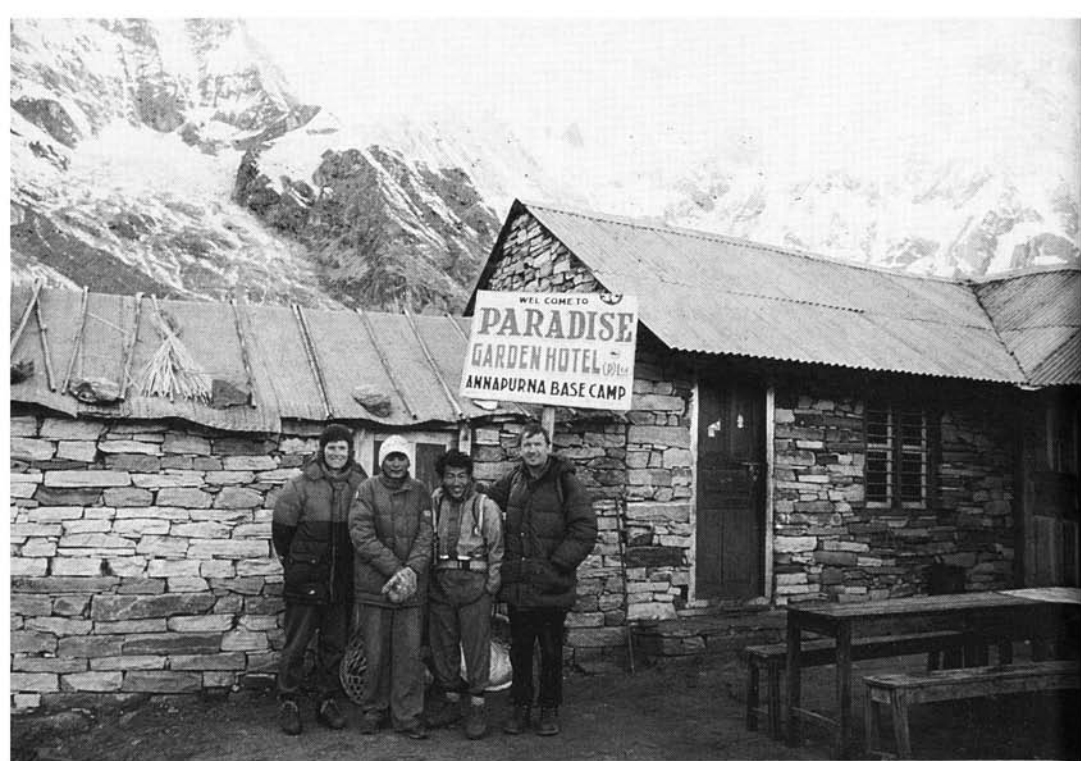
十二月二十九日、トレック八日目。これまではのぼり下りを繰り返しながらここまでたどり着いたが、今日はひたすらベースキャンピング目ざしてのぼるだけだ。予定どおり七時にドバンを出発した。前日行く予定だったヒンクまでは暗い樹林の中を歩いた。こういうところはまるで日本の山を歩いている感じだ。

ヒンクに着いたころ、ダニーボーイ一行が追いついてきた。彼らのお客はジーナ&マイケル・クリスチャンといってイギリスのヨークから来ている。私たちがヨークに行ったことがあると知って、すっかり仲良しになったが、ことトレッキングに関してはどうもこの夫婦は負けず嫌いで、必ず私たちを追い抜いていった。

ところがロッジなどで休憩するとき、このイギリス人は必ずお茶を注文して飲む。私たちは水筒の水をぐぐつと飲むだけなのですぐ出発できるわけだ。そこでひと足お先にと、出発するのだが、必ず追いつかれ追い越された。マラソンをやっている夫は、これが気に入らずまた追い抜こうとする。こんなわけで昼過ぎまで何時間も抜きつ抜かれつの登山競争が続いた。

ヒンクから上は、大雪崩のあとが残るところや氷結した河を渡らねばならず、思いのほか危険だった。

「こんなところをのぼるの!」と叫んだのが二度や三度ではなかった。右手高くにマチャプチャレがそそり立っている。一週間前、はるか遠くに眺めた山が、いま私の真横にそびえているのだ。仰ぎ見て感無量だった。



マイケル、ジーナ、ダニーボーイ、ダニダニボーイ。ベースキャンプにて

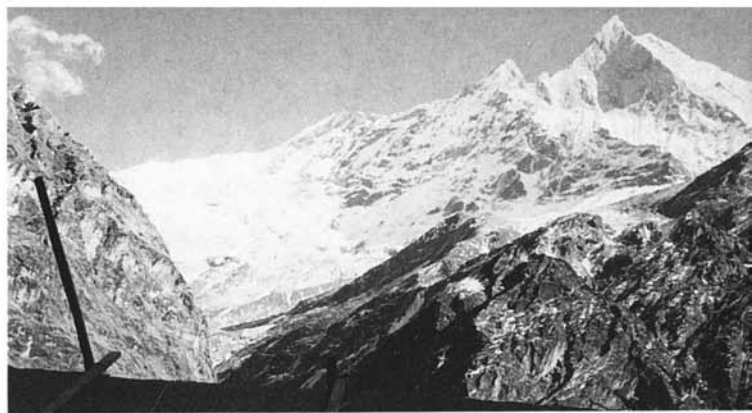
昼ごろから日がどんどん照り出し、雲ひとつない紺碧の空をバックに、雪を頂いた山々は眩しいほど輝いた。

昼食はたいへんなごちそうだった（ごはん、ボルシチふう野菜スープ、ベジタブルカレー、缶詰のソーセージ、青菜のソテー、バナナのフリッター、オレングジ、ミルク）。休憩中、写真を撮っていた夫は戻ってくるなり言った。

「おい、勝負はあったぞ！」

近くのロッジで、マイケルとジーナがインスタントラーメンを食べていたらしい。食い物の差で俺たちが勝つと、断言した。昼食後はほとんど休むことなく、ゆっくりゆっくりのほりにのぼった。マイケルたちは先に行ったのだろうか。姿が見えない。午後四時過ぎ、マチャプチャレ・ベースキャンプ（三六五〇メートル）に到着。モティさんが紅茶を用意して迎えてくれた。いよいよあと一時間あまりでアンナプルナ・ベースキャンプだ。空気が薄くなっているのか、このあたりからさっさと歩くのが少し辛くなってきた。私たちは大岩の散らばる山道を氷河に沿って黙々と歩いた。ふと見ると、前方から見慣れた色合いの服が近づいてくる。

あれっ？ ダニーボーイ一行だ。……？ 早くもベースキャンプにたどり着いた彼らだが、ジーナが頭



未踏峰マチャブチャレ (6,993m)。過去挑戦したクライマーは全員死亡したとか

痛を訴えたので高山病を心配して下るといふ。私たちは氷河のそばでこれまでの健闘?を讃えあい、「グッド・ラック」と、固い握手をかわして別れた。ダニーボーイは、もうすっかり冷たくなったカイロをポケットから出して私に見せ、また大事そうにしまった。

遠ざかっていくダニーボーイ一行を見送って、夫は私を振り返ってニタツと笑ってVサインをした。

五時を過ぎている。ベースキャンプが近づいてきた。しかし体は重く足はなかなか進まない。氷を踏みしめて一歩一歩のぼっていった。向こうから手を振って誰かがやってくる。トールン・グルンだ。彼は私のリュックを受け取ると、歌を歌いながら歩き出した。何という元気さだろう。

そしてとうとう五時半、ベースキャンプ(四〇一〇メートル)に到着した。夫と手をつないで万歳をした。グルン、出迎えてくれたモティさんと思わず抱き

合った。

地面は凍りついているが、雪はそれほど積もっていない。モティさんによると、この時期、胸まで積もることもしばしばあるという。夕方まで天気は全く崩れることもなくラッキーだった。

アンナブルナ、そのことは豊穡の女神を意味する。私は眼前に輝く神々の頂を仰ぎ見た。豊穡の女神はついに私に微笑んでくれたのだ。

■神々の頂■

アンナブルナ・ベースキャンプでの夕暮れは、私が今まで経験した喜びを百とするなら、そのうちの半分がここに凝縮されていると言ってもいいくらいのひとつときだった。夕日に映え、マチャブチャレをはじめとする山々がばら色から薄紫に、そして深い紫色に染まっていき、やがて暗闇の中のシルエットになった。

日が暮れると風が強くなった。凍りつきそうに冷たい風だ。ポーターたちは何と、素足で寒さに震えながらも、薄いシャツ一枚で仕事をしている。見ているだけでも寒そうで、私たちは多分もう着ないだろうと思う衣服を、彼らにあげてしまった。これでかなり荷物が減ってすっきりした。

この夜はロッジに泊まった。ロッジといっても二人用の小屋で木のベッドが二つあるだけだ。日本の山小

屋のようにストーブがあるわけではない。戸を開けるたびに突風が吹き込んでくるので、夜中、トイレに行くときの寒さはたまらなかった。

毎夜トイレのたびに星空に見入ったものだが、このベイスキャンプからの眺めは、どんな形容詞を使っても言い尽くせないほどだった。私は寒さも忘れ、夜空を見上げた。

これほど見事な星空を眺めることはおそらくもうないだろう。まさに神の成せる技といった感じだった。

翌朝も快晴だった。しかしモティさんは空を見上げて、「今日はだめ、曇る」と言った。私たちは熱いラーメンと卵入りのお粥を食べ、モティさんと三人でさらにのぼることにした。ふだんなら雪をかき分けて進まねばならないらしいが、この日は雪が少なく楽だった。とはいえ、四〇〇〇メートル以上の高地だから、一步一步足を踏み出すのが辛かった。そして二時間余り、とうとう氷河に接する地点までのぼりつめた。幸いなことに空はまだ快晴だった。

ここへ再び来ることはもうないかもしれない。名残りは尽きなかったが、空模様を心配したモティさんは、「そろそろおりなければ」と言った。

アンナブルナ・ヒマールの大パノラマはとてもカメラには収まらない。私はかつて自分が体験した中で、天に一番近いこの風景を網膜にしっかりと焼きつけ

た。

ベイスキャンプに戻り早めの昼食を食べた私たちは、ちょうど昼ごろから下り始めた。ポーターたちの足の早いこと！ あとから来て私たちを追い抜き、どんどん離れていった。

雪を避けてジグザグに歩きながら、マチャプチャレ・ベイスキャンプまで来ると、モティさんとポーターたちが休憩していた。ここを過ぎるとアンナブルナ・サウスは視界から消えるので、記念写真を撮ることにした。初めて全員そろって写真を写した。

ここから道は険しくなる。モティさんの予想通り、雲が厚くなり霧が出始めた。ここからの下りのしんどさは前日ののぼり以上だった。何度も足がすくみそうになって立ち止まった。どうやってこんな所をのぼったのだろうかと思う。霧で数メートル先が見えなくなった。ポーターのグルンがそばにつき、危険な所では手をかしてくれ、荷物を持ってあげようと言ってくれた。三〇キロもの荷物を背負ってなお、私の荷物まで持ってやろうというやさしさに胸が熱くなった。

それにしても長い長い下りだった。前年の富士山でも下りに三時間以上もかかったのだ、いい加減うんざりしたもののだが、この日は歩けど歩けど目的地のドバンにたどり着かない。すっかり日が暮れ真っ暗になったころ、ようやくドバンに着いた。八時間かかったの

ほったところを下るのに、六時間かかった。何とこの日一日で、十時間も急な山道を歩いたのである。疲労困憊でテントに転がり込み、夕食を食べてすぐに寝入ってしまった。寒さのためいつもは二〜三回トイレに起きるが、この夜は朝まで一度も目覚めなかった。これほど心地よい疲労はなかった。

そして翌十二月三十一日、これほど気持ちよい目覚めも初めてだった。

「今日はどこまで行くの?」と、モティさんに尋ねると、「ランドルン、できればホットスプリング」と答えた。

私たちはそろって「ホットスプリング?」と聞き返した。ばんざーい! 今日温泉に入る! 温泉に入って新年を迎えられるなんて最高だ。モティさんは、昼までにチョムロンに着けば、温泉のあるランドルンに行けると言う。来るとき一日かけて歩いた距離を、半日でカバーするわけだから強行軍ではあったが、下りだし、何よりもよく寝て体が生き生きするほど元気だった。温泉に入れると思っただけで、さらに元気が出てきた。私たちは朝食を済ませると、早々と出発した。

落とし穴

前日の下りの恐ろしさを見ると、この日の何と快適



アンナブルナサウス (7,219m) をバックに記念写真。右となりはチャトレイさん

だったことか。こんな楽しい歩きをトレッキングというのだ。きのうまではどう考えてもトレッキングではなく登山だった。いつもはどんな先に行ってしまうポーターたちも、この日はいっしょに歌ったりおしゃべりしたりしながら歩いた。このころには、彼らも私たちがお客というより仲間といった感じで接してくれるようになっていた。

トレックも残すところあと四日、かけがえのない心の交流を得られた十一日間だった。そのトレックの最後になって落とし穴があろうとは想像もしなかった。

あつ！と思った瞬間、濡れた石に足を滑らした私は、一・五メートルほど下の岩場に転げ落ちてしまった。滑った瞬間、体を支えられないことはなかったのに、咄嗟に足を庇った。捻挫をしたらおしまい、という考えが、いつも頭にあったのだ。だから肩から転落した。運悪く、尖った岩にいやというほど左肩をぶつけた。

「痛っ！」と、思ったときにはモティさんが岩場へ跳び降り、助けあげてくれた。たいしたことはないと思っただ。私は笑顔で「びっくりさせてごめんごめん」と言ったそのとき、あれれ、左腕が支えられない。

スーッと血の気が引いていった。おそろおそろ肩を触ると骨が飛び出していた。しかし指は自由に動くし、痛みも打撲の痛みだけだ。腕も腫れてこない。子

供のころ、二階から転げ落ちて腕の骨にひびが入った経験があるが、あのときはたちまち腫れてきたし激痛だった。今はそんなことはない。ただ腕が途方もなく重かった。多分脱臼だろう。そうだ、脱臼に違いない。あーあ、もう少しで終わりというときにヘマをしたものだ。日本ならすぐ救急車を呼んでもらうところだが、ここはヒマラヤだ。皆、私を囲んで途方に暮れた。私たちと前後して歩いていたイラン人の一行が心配してくれ、痛み止めを十錠もくれた。そして耳寄りなことを教えてくれた。

「ジャパニーズ 四メン ^{フーイ}カム」と、言った。なんでもその四人組のひとりがスチューデントドクターだという。

私と夫は、「ああ、あの人」と顔を見合わせた。三日前、途中で会った日本人から聞いたのだが、ひどい咳で困っていたところ、たまたま出会った医学部の学生という人から薬をもらって飲んだら、ピタリと止まったと言う。私たちと同じコースのトレックなので、困ったときはこの人を捜すといいですよ、と言われた。イラン人もその医学生に何か世話になったらしい。奇特な人だ。イラン人によると、彼はチョムロンに泊まるそうだ。とにかく頑張ってチョムロンまで行くよりほかない。

ここからが難行苦行の始まりだった。モティさんに

左腕を支えてもらい、細い山道を小走りに駆けた。駆けた、というよりこれが本来のモティさんの足の速さなのであろう。私とモティさんの荷物は、夫とサブシエルパのラッパ君が持ったのでとても身軽で、クロスカントリーはこんな感じなのだろうかと思いつながら駆けた。

チョムロンでどうかうまくスチューデントドクターを見つけれそうですように……と、祈るような気持ちだった。

二時間余りでチョムロンにたどり着いた。コックが食事の支度をしている間に、夫はその医学生を捜しに行った。幸いすぐに見つかり、彼を伴って戻ってきた。

「あれー、どこかでお会いしましたね？」

そうそう、カトマンズからポカラまでのおんぼろバスにいつしよに乗り合わせた人だ。

彼は私の肩を見るなり、

「うあー、ひどい！」

と、言った。

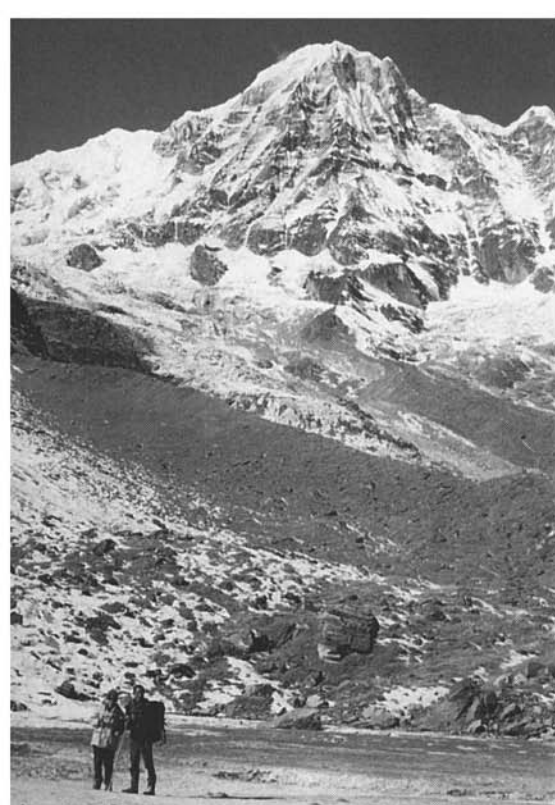
「脱臼なら入れたら問題ないですが、骨折しているかもしれませんねえ。どちらにしても一刻も早く処置したほうがいいので、すぐヘリコプターをチャーターしてカトマンズに戻ってください。たとえ歩けてもポカラからあのカタガタのバスに乗るのは無理ですよ。振動はいけません。このチョムロンにはヘリポートもあ

りますし、下のポリスで要請すればいいでしょう。あしたの午前中には迎えに来てくれます」

彼は坂本さんといって、大阪市立大の医学部の五回生だった。ラッキーなことに、ここチョムロンで偶然、坂本さんたちとは別の日本人四人組のトレックカーに会い、彼らのシエルパがこれまた偶然モティさんの知り合いで日本語がかなり堪能だった。夫はこのダワ・シエルパさんの助けを借り、モティさんと三人で交渉に行った。坂本さんによると、ヘリコプターのチャーター費は一時間八〇〇ドルということだった。私は夫が交渉に行ったあと、すぐ電卓を出して換算した。カトマンズまで約一時間というから、このときのレートで九万六千円。

九万六千円……！……思わずため息が出た。事故のための海外旅行保険には入っているが、山岳救助保険には入っていないかった。世話をしてくれたメラ・ピーク遠征隊の藤川さんが、四〇〇〇メートルくらいでは、命にかかわるような高山病にかかることはないと言ったからだ。登山そのものが危険を伴うため、普通の保険ではヘリコプターの救助費用は出ないのだ。

夫が戻ってきた。確かにここにはヘリポートがあるが、その要請の電話は、山を二つ越したガンドルンという村まで、かけに行かねばならぬらしい。しかもここは気流の状態がいつも不安定で、着陸できなけれ



アンナブルナサウスの氷河で。モティさんと

ば次の日まで待たねばならないという。
目の前が真っ暗になった。電話のための往復はポーターが走ってくれるが、帰って来るのに八時間かかるという。それもヘリコプターは来るかどうかかわからない。

電話をかけるのに八時間！

私はこのときほど、ふだん何気なしにその恩恵にあずかっている文明のありがたさを、痛感したことはなかった。考えたあげく、ガンドルンまで頑張つて歩き、そこでヘリコプターを要請することにした。このガンドルンには、ほとんどまちがいなく着陸できるということだった。

昼食の後片付けが済むや、私たち一行は早々とチョムロンを出発した。

「一時間九万六千円よ、痛いなあ」

と言うと、夫は、

「おいおい、戻るのに一時間というのはなあ、迎えに来るのにも一時間かかるということやで」

と言った。

「ヒエー、じゃあ十九万二千円！」

思わず

「ごめん！」と謝った。

「まあ、命が無事だったからいい。それにしても、こどものときから乗りたくてたまらんかったヘリコプターに、やっと乗れる。それもめったに墜落なんかさせへん軍用ヘリコプターやからな」と、夫は明るい声で言った。

夫は前から旅先などで観光用ヘリコプターに乗りたがったが、よく墜落のニュースを耳にするので私はいつも反対していた。それが今回、私のせいで乗るはめになったのだから皮肉なものである。

■ 山越え谷越え ■

チョムロンを出発してからは、ひたすら長い長いのはりだった。そういえば行きは下る一方で、せっかくのぼったところをこんなに下るなんて……と、もった

いない気がしたものだ。結局この日は、タウルング（約二五〇メートル）までのぼった。

一刻も早くヘリポートのあるガンドルンに着きたかったので、夫はモティさんに言った。

「もう少し先まで行けないだろうか。ワイフはまだ歩けると言っているから」

しかしモティさんは言った。

「もう暗くなりかけている。次のキャンプ地まで行く」と完全に日が暮れる。ポーターの足もとが危ない」

どちらにしてもガンドルンに着くのは翌日になるので、先へ行くのは諦めた。この日は風が非常に強くテントが張りにくかったので、小屋に泊まった。小屋は崖から飛び出した格好で、大きな岩にへばりついていて。戸をあけて中に入ると傾いていて、ギギギーと不気味な音がした。床の板には隙間があり、はるか下の岩肌が見えて、高所恐怖症の私は思わず足が竦んだ。

片手が使えないというのは本当に不自由である。靴の紐さえ結べないのだから。ベッドでは全く横にはなれなかった。肩が後ろへ下がると激痛が走った。肩から腕にかけて何かを枕にすればうんと楽になったのだが、そのときはショックで、そんなことを考えるゆとりがなかったのだ。

すっかり日が暮れたころ、コックのドルシーが私の好物のお粥と野菜の煮込みを持ってきた。半分ほど食

べたとき、まあ何とトリのから揚げを持ってきた。

そうだ、今日は大晦日だったのだ。香ばしいにおいが漂った。そういえば少し前に、モティさんがロッジの主とコッココッココッコと走り回っている鶏を指さして、何か話をしていた。缶詰以外のたんばく質を食べるのは、トレック中ではじめてだ。なのに夫は言った。

「もう食べられないからいいです」。夫はいつもそうだが、心配事があると食欲が落ちる。そして自分が欲しくなかったら、人も当然欲しくないとはい込む。

「ちょい待ちイー！　なんで断るのよー、私、食べる！」

と、叫んだ。元気に走り回っているトリなので、硬かったがこくのあるおいしさだった。最後の日にトリを食べてこの一年を終えた。

母の病気の悪化、看病、富士登山、母の死、それに続く葬儀、諸々の法事、そしてヒマラヤトレッキング……、最後に怪我というおまけ付きではあったが、ラッキーとアンラッキーが入り交じって変化に富んだ一年だった。

この夜は板の間から吹き込む隙間風が冷たく、痛みも加わって眠れなかった。

—つづく—

（写真提供・筆者）

だれにもわかる遺伝子組み換え食品Q&A



渡辺雄二 著

昨年末、日本に上陸したという「遺伝子組み換えダイズ」。みそやしょうゆなどに加工されて、もう食卓に上がっているかも知れない。

アメリカやカナダが栽培した「遺伝子組み換え作物」は、ダイズ、ナタネ、ジャガイモ、トウモロコシ。ダイズやナタネを九五パーセント以上輸入に頼っている日本の厚生省は、食品添加物よりあまい規制で安全性を

認めてしまった。表示がないため、「組み換え作物」は普通のものと同じやませになつて出回っているのだ。

「組み換え食品」による死亡事故も過去にあり、医薬品と同程度の規制が必要と著者は言う。

また、「組み換え作物」栽培による「遺伝子汚染」は、放射能汚染よりも怖く、雑草や昆虫、小動物へと、ドミノ崩しのよう

に、生態系が破壊される危険を指摘している。

ヨーロッパのように表示を義務付け、企業エゴを追放しなければ、人類の未来は危ういとのこと。消費者はもう、お客様ではないられないという警告である。

カゴメやキリンも「組み換えトマト」を発売予定にあり、今消費者の姿勢が問われている。

青木書店
本体一三〇〇円十税(倉)

校長先生、大好き！

アラビアのオマーン王国に学校をつかった日本女性の物語



スワード・アル・ムダファーラ 著

オマーンってどこだ？ そう、あのアラビアンナイトの国である。そんな未知の国に学校を建てた日本女性って？

彼女はふとしたきっかけで、数日オマーンに派遣される。当時、オマーンに住むなんて思いもしなかった彼女だが、あるオマーン人と運命の出会いをし、離婚し引き取っていた自分の娘とさえ別れ、再度、單身オマーンに渡る。その後娘の意志で一緒に暮らすことになり、夫と夫の前妻の子の六人で暮らし始める。このあたりのドラマチックな展開は、読んでいてわくわくする。そして公私ともに色々な苦勞をしながら、彼女はついに学校を作ることになる。

彼女がひかれたイスラム教の教えや文化・生活習慣の違いは、大変興味深く、新鮮そのもの。

また、日本における子供の教育の素晴らしい部分に気付かせてくれた彼女に、感謝したい。

常に前進する彼女のバイタリティーや、随所に見られる潔さ、いい意味での開き直りには見習うことも多く、女性の持つ本当のパワーを教えてくれる、元氣の一冊である。

求龍堂
本体一六〇〇円十税(宮)



時事放談

わが家でやっているリサイクル

出席者

菊池裕子
(東京都品川区)
木暮洋子
(東京都新宿区)
平尾輝子
(東京都新宿区)
和田好子
田中喜美子

編集部 司会

司会 本日はお忙しいところ、有り難うございます。今回のテーマは「わが家でやっているリサイクル」です。

新宿区でも、事業所のゴミが有料化されて、ゴミ問題がだんだん足元に迫ってきておりますけれども、みなさん、リサイクルのために何をしていらっしゃるか。それぞれ努力していらっしゃる方ばかり、お集まり下さったので、私たちも大いに参考にさせていただきます。と思っています。

まず、ご家庭で何をしていらっしゃるかと。木暮さんからお願ひします。

リサイクル生活

木暮 ビン、カンはず新宿区の集団回収に出します。ボロも集団回収に出します。

牛乳パックは、新宿区は各出張所にケースが置いてありますので、そこへ出します。

厨房のゴミは、猫の額くらい庭がありまして、堆肥を作るコンポストへ入れてい

ます。

枝を落したり木を切ったりした木屑は、長野県の山小屋へ持って行って燃やします。

司会 大変でしょう。自動車に積んで、持っていくのは。

木暮 そうですね。

それから、細くなってくるんですが、お魚の骨とか、おみおつけの残りとか、犬が一切食べてくれるので、うちはゴミない

んですよ。

司会 でも犬は糞をするから、それはどこへいくんですか。

木暮 あのォー、最終的には東京都のお世話になります。(一同笑)

司会 有り難うございました。また後で、ゆつくりうかがいます。

じゃあ菊池さん、どうぞ。

菊池 私は、家の中では木暮さんほど細かいことはしていません。しなくちやいけない、と思いつながら、やっていない状況です。現在は車椅子の方をはじめ、障害者と高齢者の衣服づくりをして、ファッションショー、和服のリフォームを加えて活動し

ているところです。

なぜリフォームをはじめたかという点、障害者の方の着る洋服がない、という問題からでした。その中で、ファッションショーでいっしょの年配の方から、家に着物がたくさんあって困っているの、リフォームの仕方を教えてほしい、ということがありまして、和服からのリフォーム教室を開いています。

タンスに眠っているものをリサイクルする、という意味でお話できるんじゃないかと思って、今日は出席させていただきしました。

作品集と写真を持ってきました。もうすぐ本を出す予定にしています。昨年は十回ほどファッションショーをしまして、そのうち一回はイタリアでしてきました。

イタリアでのファッションショーは元王宮が舞台。次の日は修道院が経営している老人ホームで、ミニファッションショーをやりました。こちらから持って行った衣装を、八点くらい着ていただいて、それをすぐ喜んでいただいたことがまた活動力になっています。ことし十一月には、ドイツ



着物リサイクルのファッションショー
1996.11.29、イタリアナポリ修道院ケアホームのサロンで

でファッションショーを開く予定です。
司会 それはぜひ、「わいふ」に書いてください。

菊池 ドイツのパンフレットもできたので、全国に呼びかけて参加者を募って、国際交流をしながら日本の着物を伝えてもらいたいな、と思っています。

和田 イタリアへ行ったり、ドイツへ行っ



菊池裕子さん

たりというのは、そういう交流をする組織があるんですか。

菊池 ありません。イタリアは、よく分かっていらっしゃる方といっしょに、ドイツは私が独自で企画しました。ドイツ語ですから、全然分からない。全部分かる人によってもらうんですが。

司会 たいしたもんです。素晴らしい。

回収は業者がやるべき

平尾 初めまして。

たまたま実家の弟が障害者なもので、その弟を引き取って八年になります。新宿区の障害者センターへ通うことになりまして、弟といっしょに歩んできたなかで、私たち健常者に何ができるかしら、と。

試行錯誤のときに、資源回収とかゴミの山から印刷屋さんが出すパルプの芯、紙の

巻いてあった長い芯をいくつかに切って、底をつけて、色紙とか千代紙を貼って……（と、持参の作品を手に説明）物入れやペン立てをつくりまします。これは、赤ちゃんのミルクの缶。廃物利用できないかと思って、よく見ると雑ですけど、手が利かない障害者でも、ちよつとサポートすると結構意欲があつてできるんです。これを始めてから、まだ二年ぐらいです。

我が家でのリサイクルということになりますと、うちの町会、結構資源回収がスゴインですよ。

トレイとかいろんな方が集めてくださいますけど、家の近くにはスーパーが三軒ありまして、三軒とも大きな箱を出しています。またたくまに一杯になります。

それと、乾電池ね、なんとかマンつていう乾電池ボックスへ捨てます。

木暮 夕陽のガンマン。

平尾 そうそう。

木暮 区の施設によくありますけど、あれリサイクルする手立てがつかないで、北海道のどこかへ持って行って、ストックしてる。

菊池 それ、行政がやっているんですよ。そういうのもおかしい。ペットボトルの回収も。新聞に出ていましたけど。

木暮 ペットボトルの回収は新宿区はやらないんですよ。業者がやるべきだというスタンスだから。

平尾 うちの町会にもポリシーがあつて、資源回収とかリサイクルにはお金がかかるものだと。それをやってくださる方には、図書券の補助券が出るとか、何らかの報酬がないとなかなか続かないんじゃないでしょうか。

菊池 無償ボランティアばかりじゃね。

平尾 だからボランティアというのが、ちよつとおかしな方向へいきかけている。交通費くらい出なくちゃ行かれませんか。

木暮 お食事はどうなっていますかと。か、お食事はどうなっていますかと。か。木暮 むしろ、行政がそういう方向へもってきている、と私は思います。

行政から何か頼まれるときに、交通費とお弁当がついてきちゃうんですよ。その中にどっぷり浸かって慣れちゃうと、それが当たり前になってくるのかも知れません。

行政が回収するのはおかしい

司会 話がそれてきました。リサイクルに戻しましょう。

平尾 それから廃油（天ぷら油）で石鹼づくりを、グループでやっています。今はちよつと開店休業ですけど、ゼリー状で、私たち、ちゃんと固まるまでできないんですけど、本当に汚れがよく落ちますね。子供の白い靴下なんか、よく落ちます。あれには驚きました。

和田 昔からつくられていたものだし、そんなに難しくありませんよね。

司会 洗剤なんかよりいいですか。

平尾 手も荒れませんか。

あとは、資源回収のときに出る無地の色紙とか白い紙を、子供会のお知らせを刷る紙用に調達して歩いています。

菊池 紙屋さんが出す、裁断のときに寸法が余って使えない紙とか……。

平尾 そうそう。紙屋さんはバサツと出します。結構出る。ツルツルのは駄目なんです。機械にあうのを選んで、そういう紙をためておく。

菊池 チラシを刷るぐらいだったら、紙の色がかわっても構わないですもんね。

平尾 そうです。区の出張所とか、印刷機は無料で貸してくれますしね。

地域の青少年対策委員会、私はそこに属してまして、要するに町のオバサンですよ。お金をかけないで、子供たちに私たちのしていることを見せたい。ま、ちよつとおこがましいかなと思いますけれど。

最近、子供たちが「オバサン、手伝うか」って、声をかけてくれるようになりました。まんざらでもないなあ、って。

和田 だけどもなさん、よくやってらっしゃいますよねえ。

木暮 はまりこむと、どんどんはまってっちゃんいますから。

平尾 もったいなくてね。つつい。

娘や息子のＴシャツや上着も、ちよつとボタンの位置をかえたり、それでも結構着られるんですよ。

菊池 だからね、リサイクルをしなければいけない状態、というのがおかしい。

つまり、サイズがあわなければ使える紙だって捨てちゃうわけですよ。洋服も、

ちよつと嫌になったら着ない。だからリサイクルをしましょう、という話になる。

捨てたほうが早いとか、何千枚と揃った紙じゃないと駄目とか、そういう要望が強くなってきている。

和田 システムとしてリサイクル社会になっているんじゃないか……。

木暮 個人がカバーしてる。

菊池 安くて簡単にできるからといって、業者がペットボトルをつくる。消費者が飲んで捨てる。それを行政が高いお金を使つて回収するなんて、すごくおかしい。

司会 われわれ本をつくっている立場で、いつも忸怩たる思いをしているんですけど、ホントに紙屑製造業という趣があるんですよ。

最初にきちんとしたものをつくって、それが通ればいいけど、間違つてたら何度も何度もやり直して、それからファクスなんものは、今やっている仕事はすごく使うもんでニョロニョロと出てきて、その紙は結局最後には無駄になるわけです。

和田 ＯＡ化がますます助長している。

司会 紙を使っている量は、以前より多い

んじゃないでしょうかね。

木暮 本つくってる人だけじゃないですよ。私たちも何かの会合にいくと、資料やレジメをもらう。それを捨てられないで、やつぱり読まなくちゃと思ったり、いつか要るかも知れないと思って保存しておく。紙屑の中でやつと生きている、という感じになってきましたよ。

司会 今回のテーマは私が出したんですが、何をリサイクルで心がけているかといえば、私は紙を無駄にしないこと。よそでもらった資料も捨てないで、コピーするときは表、裏使おうとか、絶えず心がけているんだけど……。

みなさんのお話を聞いていて思うのは、いつも女の人はこういうかたちで一生懸命やつてらっしゃる、リサイクルを。

平尾 まず女性ですよ。

司会 川上からドーッと流すものを、女性が川下でザルですくっている。一生懸命すくって、汚れたものを取り除くとか、水を清くしようとかが、無駄なものが流れてきたら、もう一回使おうとか、やっているんだけど、いくら一生懸命やつても、ナン

カ、ますます使い捨てられる物量が、前より増えているような気がするんです。

人類は遠からず減じる

木暮 私、ここ二三年、人生観が変わって、人間が悪くなったんですよ。

何十年とリサイクルにかかわってきて、いろいろ見たり聞いたり勉強すればするほど、はじめは虚しかったんですが、このごろは腹が立ってきて気持ちが悪地悪になってきたんです。

リサイクルに一生懸命になっている人たちが、みんな忙しいのに、非常に気持ちが悪くて、善意の固まりみたいな人たち。その人たちが、熱心に行っている。それでもシワ寄せがくる。

牛乳パックを開いて、水を使って洗って（水を汚染させて）、回収場所へ持って行って、車に積んで、排気ガスを出して富士（製紙工場）へ持って行く。富士でまた水を使ってトイレットペーパーにする。それがはたして地球にいいことなのかどうか。ピンを再利用することが、いいのかどうか。ピンを往復させるために車が走って、

排ガスを出して、また環境を汚染するわけですから、何が一番いいのかって考えると、わからなくなってくるんですよ。

それが全部自分のなかでイライラになる。こんなに私がトレイを集めても、ピンを集めても、ゴミは溢れかえっている。リサイクル法ができたって完全な法律じゃないから、ヒン曲がっていきますでしょ。だんだん腹が立ってくるわけです。

こんなことを、われわれが末端でやっているから、ちつともよくならないんだ、と。誰も何もしなくなると、世の中、全部ゴミだらけになって、人が住むところもゴミを捨てるところもなくなったら、国が本気で考えるんじゃないか。

女性は末端で一生懸命やりますよ。だけど男どもは気がつかない。

司会 そうみたい。

木暮 外国から安い古紙や段ボールを買ってきて、日本の古紙は暴落する。

町内会総会の資料に、リサイクルの雑誌はマイナス三円、ボロは〇円。それでもゴミを減らすためのリサイクル運動だから、雑誌もボロも集め続けます、と。

リサイクルの輪を完成させるためには、国政レベルで段ボールは輸入しないとか、関税をかけるとかやってくれないと、絶対解決しない。

それで私はだんだん生きているのが嫌になつてきて、死んだほうがいい、となつてくるんですよ。突き詰めると。

和田 確かに、よほど悪いことが起こらなければ国はやりません。

木暮 やらないです。オバサンたちが一生懸命はいずりまわつてやつてれば、ゴミが少なくなつて、埋め立て地が満杯になるのが遅くなつていいや、やらせておけ、つてなもんですよ。東京都は。

和田 そこまでの効果もないじゃない？

これはあまりにも根が深い。社会の構造がそうなっているんだから……。

木暮 で、私は、人類は遠からず滅びる。そこまでいつちゃうんですよ。

値段が高ければ捨てない

菊池 ゴミは、事業ゴミがほとんどなんですよ。

司会 そういますね。六〇パーセントで

すか、事業ゴミは。

菊池 家庭で一生懸命分別しているけれども、企業ゴミのほうが多い。

和田 その企業でみんな働いているわけよ。

企業の活動がなければみんな生きていられない。企業が大量生産、大量販売のシステムでやつてきているから、そのシステムが改まらないとリサイクル社会にならないわけよ。

やつぱり人口が多すぎるんですよ。

司会 ドイツは、同じ資本主義で大量生産システムだけど、分別が徹底しているらしいですね。

和田 ところがね、この前テレビでやつた。あれは徹底しているように見えるけど、みんなブルー言っている。やる人はやつぱり少数派なんだつて。あんなに分別していたら、台所中ゴミ箱だらけにな

る、つてやんない人もいるらしい。

アレ、どれだけ効果あるのか、わかんないわよ。とても各家庭ではやりにくいんだつて。あれだけのことは。

イギリスはね、行つてみるとすごくきれいで、のんきな社会なのね。山がなくて平らだから、広くてどこへでも住める。そこへもつてきて、景気が悪いから、物が売れない。

フリーマーケットがそこら中にある。

木暮 何も捨てないし、買わないし、つくらない。

司会 身なりも古ぼけてますもんね、イギリス人は。

和田 ヨーロッパではどこでも、すごく家具が高い。職人のギルドがあつて、いまだに手作り家具が幅をきかせている。それを代々使っていくし、中古品が出回つていて、寝室にそっくり中古の家具を買ってくる。高いけど、何代にもわたつて使っていくわけですよ。

だから、値段が高いつてことが、一つのカギでしょうね。高いとみんな捨てないし、長くもつ。



平尾輝子さん



木暮洋子さん

平尾 日本はまったくその逆です。機械ものは全部一年でしょう。壊れたから電話をする、「もう部品はありません」。

木暮 部品がないから、捨てるを得ないところへ追い込まれちゃうんですよ。

和田 景気をよくしなければ、事業がどんどん発展しなければみんなが食べられないという社会のあり方に、ゴミ問題も絡んでんじゃないですかね。

それと、中国の人口が十二億だといっているけど、本当は二十億じゃないかって噂がある。開の人口がたくさんあって、大変な勢いで増えているでしょ。今は彼らは日本よりずっと少ないエネルギーで済んでいるけど、将来日本並みに使いたしたらどうなるのか、という問題がある。

司会 諸悪の根源は人間が多すぎることでしょ。いや、いくら人間が多くなつて、大

量生産、大量消費をしなかったら、汚染はこんなじゃないわよ。

和田 だけどね、大量生産しない社会の労働のつらさったら、歴史をみるとわかるし、私たちは少し経験してるけど、とても戻つたらたまらない。

司会 昭和三十年代からこうなってきたんだけど、三十年代のはじめに死にそうならさつて、もうなかったですよ。

原始時代に帰れとか、そんならオマエ、電気を使わないのか、という人がいるけど、そんな極端なことをいわなくなつて、私はできると思うんです。二十年前はちよつとつらいかもしれないけど、十五年前なら、絶対平気。

和田 昭和三十年以前だったら、エアコンがなくて、暖房がなくて、エネルギーが少ない。石油以前ですよ。

昭和三十五、六年に石油ストーブが普及しはじめた。化学繊維は三十一年ごろから盛んになっている。石油が出はじめてから、大量消費の時代がはじまつたといつても過言ではないんじゃないかな。コレ、石油がなくなつたらお終いですよ。

教育に希望を託して

司会 私が結婚したのが三十五年前で、軽井沢に別荘を借りていて、炭火でやってました。炭火はちよつとイヤだねえ。

木暮 みんなが炭火を使つたら、日本中の山は丸裸になつちやいますよ。炭焼きで。

司会 そうじゃないと思うわよ。山持ちが手入れして、炭にする木を植えたり切つたりするから、大丈夫なの。

和田 十五年サイクルで再生産できるのよ。**菊池** 花粉症の問題もなくなりますね。

司会 杉ばかり植えたからいけないのよ。**和田** 石油が出てきたんで炭は競争に負けちゃつたけど、火鉢だけなら効率のいいやり方よ。とにかく問題は石油。石油以前に戻らないとあまり効果はない。

木暮 石油が早くなくなつちやえばいいんです。

司会 今は原子力に頼っているでしょう。原子力も後始末の問題がある。科学が発達すると、超伝導とか核融合とか、あまりゴミを出さないエネルギーを使えるかも知れないのね。

だけど、エネルギー自体はあまりゴミを出さないにしても、そのエネルギーでつくった物は最終的にゴミになってしまいうから、ゴミ問題って、いつも先細りになって、話にならない。

木暮 建設、通産、大蔵大臣くらいを女性にすればいいんです。

司会 結局、我慢しろってことですよ。使うな、と。夏は暑く、冬は寒く、不便で不自由に暮らしましょう、それしかない。

このままでいくと減びちゃうね。

木暮 ゴミよりも先に私は、核か細菌か遺伝子の組み換え食品あたりで人類は減びると思いますよ。

司会 そうよォー。だから臓器移植も反対なんだ。

木暮 もうゴミとかリサイクルで、ワァーワァー言っている段階じゃないと思う。

平尾 でもね、うちだけでも知れませんが、牛乳パックを開いて干しているおじいちゃんのを孫が見ていて、結構やつているんですよ。だから、小さいころから教育すれば何とかなるかな、って。

私ももう頭がこんがらがってきています

が、各家庭が今手をこまねいて何ももしないでいたら、破壊は早くくるでしょう。でもやはり、意識をもってやり続けていくことで、ナントカ少しは芽が出るんじゃない。

菊池 中学校の家庭科の教材ビデオをつくっている会社から連絡があつて、障害者の衣服の問題を取り入れたい、というわけです。初めての試みで、十二分のビデオのなかでたった何十秒かの紹介ですが、私のところへ連絡がきて、撮影をした。

そしたらもう一つ、被服科IIでリサイクルの問題を取り上げるっていうんですよ。

私は今まで二十年間、手作り品をつくって商品開発してきたんですけど、ヒット商品は古タオルでつくったバスマットでした。

やつとそういう話が中学におりた、という感じですね。それが小学生の教材ビデオに入ればいいし、幼稚園、保育園へ入っていったらいいなと思います。

和田 だからね、私は思うんです。こういう問題の解決は、時期がこなきや駄目なん

で、解決のチャンスがきたときに、それまでの運動が必ず役に立つんですよ。

司会 そうなの。

和田 時代を先取りする人がいる。その人が少数派であるうちは全然役に立たないんだけど、時代が変わったときに運動の経験が生きてくる。

木暮 行政がここまで、例えば新宿区がピン・カンを集めるようになったのも、リサイクル法でベットのボルトが問題になったというのも、われわれが細々と惨めな活動を二十年間も続けてきたから。はじめからやらなかったから、行政も気づかないし、法律もできない。

和田 現在効果が上がらないってところにこだわっちゃうと、どうにもこうにもならなくなる。だから、イザというときの準備だと思って、やっていくよりしようがないとこありますよ。

司会 ほら、木暮さん、気を取り直して。

菊池 だけど行政って、上手ですねエ。みんながワァーと盛り上がって基盤が出来てきたら「やりましょう」って。

平尾 いいところだけ取って……。

菊池 まるで、自分たちが全部やったみたいになる。

痛快！ 一解人

栗田 光









春樹のクラス写真。マレー人1人、インド人1人、春樹（後ろ右から3人め）その外は中国人。担任はマレー人と中国人、校長はインド人、教頭が中国人



三度おいしいマレーシア ②

色とりどりの国で

東京都世田谷区

上田弥生子

激しい天候

久しぶりに春を迎えて、心がぽかぽかあたたまっていて。四季のあることの幸せ。そんな国に生まれた幸せ。桜の木の下で、陽の光を存分に浴びてごろごろできる幸せ。散りゆく花びらに別れを告げる幸せ。春ってこんなに一斉に花が咲くのだったつけ。むせかえるような香りの中で、小さなモンシロチョウを追っ掛けて、そこらじゅうを走り回っている息子春樹を目で追いつながら、とろとろと流れる時に身を任せている。

マレーシアでは何もかもが激しかった。毎日毎日三十三度まで気温が上がる。その日差しの痛いこと。マレーシアでの苦行のひとつは、歩きたい盛りの春樹を連れて、郵便局へ公共料金を払に行くことだった。なかなか思うほうへ歩いてくれないわ、放し飼いの大型犬に吠えられるわ、片道十分の道のりに三十分は費やして、やっと家にとどりと着くと、もう半日は何をする気

力もわき起こってこない。

激しいのは雨も同じだ。晴れのち曇りなんていう穏やかさを、この国の気象は持ち合わせない。快晴、または快晴のち豪雨である。

普段は開けっ放しの窓も、雨音を耳にするやいなや、ばたんばたん閉めてまわらねばならない。日本のアパートと違ってけっこう家が広いし、ひとつひとつの窓が小振りで、その分たくさん窓があるため、のんびりしていると雨が吹き込んで水浸しになる。そこで先ず雨の落ちていく方向をよく見定め、どの部屋から閉めて回るか優先順位をつけることが大切である。その後は天地を分かつような雷の音に身を縮めつつ、バケツや洗面器をかかえて、雨漏り要注意箇所へ配ってまわる。築三年にしてこの騒ぎである。庭の芝生は池になり、屋根から落ちる水は玉簾の滝になる。

稲光は真下に伸びる。だからどこかに落ちてはいるが、落ちたという話はありません。落ちないような設備

があるのか、あまりに当然のことで、話題にもならないのか。たぶん、後者だ。ああ今真上に来たな、という時に、電気のブレーカーがぱちんと下りる。雷が落ちたときに備えての、電化製品保護のためのシステムだ。雷が遠のいていったのを見計らって、恐る恐る解除する。見事電気がつければほっと一息、つかなければ停電だ。そのまま夜を迎えると、暑い、暗い、料理ができない、の三重苦が待っている。数分後に電気が来るとわかっていれば迷わず

があるのか、あまりに当然のことで、話題にもならないのか。たぶん、後者だ。ああ今真上に来たな、という時に、電気のブレーカーがぱちんと下りる。雷が落ちたときに備えての、電化製品保護のためのシステムだ。雷が遠のいていったのを見計らって、恐る恐る解除する。見事電気がつければほっと一息、つかなければ停電だ。そのまま夜を迎えると、暑い、暗い、料理ができない、の三重苦が待っている。数分後に電気が来るとわかっていれば迷わず

開ける冷蔵庫も、何時間続くかも知れない停電の前では大きな白い塊になる。なにしろ冷凍庫の中には、三時間もかけて首都の日系デパートへ買い出しにいった納豆や、刺身種類が銀座ましましているのだ。あだやおろそかに庫内の冷気を逃がしてはならない。

薄暗くなっても電気は来ない。熱帯の夕暮れは早い。十五分ほどで闇の中だ。そこで取り敢えず家の外へと脱出を図る。門灯のスイッチを入れ、車に春樹を乗せて、街頭のない暗い道を光



中国正月に初詣。盆と正月がいっしょにきたような飾りつけ



タイプーサン。願をかけてかなうと行なう、インド人のお礼参りの祭だ。輿をかついで寺へ詣でる

で過ごして家路につく。わが家の門灯のきらめきが目に入ると、心の底からほっとする。

色白が最高

マレー人は一〇〇パーセントイスラム教徒だ。肌がいわゆる健康的な小麦色で、目はまん丸でとても大きい。背はあまり高くなく、鼻が少し平たい。女性性の多くが、バジユクロンと呼ばれる

長袖のブラウスと、足首までの巻きスカートのツーピースを着ている。手首から先は見せてもよいが、他は恥部

だということ、髪は見せないようにベールを被っている人も多い。耳元をまち針で押さえているので、見ているほうがひやひやする。ベールが外れた

時に備えて、下に丸い帽子を被っている人もいるらしい。しかし、中東の女性のように真つ黒で禁欲的というわけではなく、むしろその逆、もう一色少なかったら結構すてきなのに、という

賑やかな出で立ちである。インド人はスタイルがよい。顔が小

さく背が高く、脚が細くて美しい。この国に色白を尊ぶ風習があるため、ずいぶんと損をしている。食生活のせい、年をとると上半身が膨らみ、細くて長い脚が目立つ。お祭りやお祝いの日には、女性はサリーという民族衣装を身に着ける。半袖のＴシャツにロングスカート、それになくさんの腕輪や指輪、耳や鼻のピアスなどきらびやかで、それがまた美しい彼女らによく似合う。肉付きのよい背中を大きく見せるのがポイントである。

中国人は日本人とだいたい同じような外見だが、日本人のほうが鼻が小さくて高いわ、とわが町に住む欧米人が口をそろえる。ちゃんと見分けがつく

のよ、と。
中国人女性の色白を保つのに神経を使う。美しいというだけでなく、富の象徴でもあるからだ。北陸や東北の色白美人とはわけが違い、年がら年じゅう日差しの強いこの国で、日焼けをせず

を求めて彷徨う。夫は現場に単身赴任で、春樹と二人の生活に慣れてはいても、停電の夜だけは心細い。それでもだんだん賢くなって、薄暗くなると直ぐエンジンをかけ、ジェネレーター（発電機）を備えたスーパーに走るようになる。駐車スペースに限りがあるので、一分一秒を争う問題である。人々は一族郎党引き連れて、着の身着のままやって来るので、バジャマ姿の子どもがうじゃうじゃしている。ここには明かりもある。人もいる。クーラーもそこそこ効いていて、食べ物もふんだんにある。十時の閉店までここ



タイプーサン。体には数限りないフックがかけられ、ほおや舌には金ぐしが貫通している。危険なので、インド本国では禁止されている



タイプーサンの日に寺に詣でるお手伝いさん（パートタイム）一家。
母親が着ているのはサリー、子供たちのはバンジャビスツ

遊びをさせると、親が、子どもが日焼けしたと文句を言いに来るとも聞く。子ども達が外で遊べるのは、日差しが比較的弱い日の朝三十分くらいと、日没まえ一時間くらいなものだ。この国に引越して来てすぐ、そんな事とはつゆ知らず、公園デビューをしようと勇んで出かけたものの、目に入るのは青々として美しい芝生ばかり。人っ子

一人見かけず、随分がっかりして帰ってきたことがあった。近所の中国人の友達にそれを話すと、当たり前じゃないの、と一笑にふされてしまった。夕方は賑わう公園も、昼間はあまりの人の少なさに、犯罪危険地帯になるとまで言う人もいる。
そういう訳で、この国の中国人のお嬢ちゃまお坊っちゃまは青白い。二、

三日リゾートに遊びにいった春樹が小麦色に焼けた時、春樹の通う幼稚園（ちよつと学費の高いローカル園で、生徒のほとんどは経済力のある中国人の子どもだ）の先生に「どうしたの？こんなに日焼けさせて！」と叱られたこともあった。それほど肌の色に気に留めない日本人は、住みはじめてしばらくすると、はっきり区別がつく肌色になってくる。真つ昼間からテニスやゴルフをしている東洋人は、たいてい日本人だ。服の材質も日本人は綿を、中国人は化繊の鮮やかなものを好む。デザインも違うし、女性の場合はけっこう見分けがつく。
春樹は北国、秋田生まれで、一歳三カ月の、まだ肌がまっ白なうちにマレーシアにやって来た。春樹のモテようといったらなかった。近所の子どもは、どうしたら春樹のような可愛い子どもが生まれるのか、同じくらいの妹や弟がいるというのに、一晩でいいから春樹を弟にしてみたい、と言いだすし、写真屋のお姉さんは是非ともコン



マレー人の結婚式。自宅をきれいに飾りつける。少女達は花嫁の妹達

テストに応募しろ、絶対大丈夫だ、と言う。レストランのおばさんはちょっとほった触らせて、とおずおず頼みに来るし、博物館に出かけたら、なんてかわいいの、と何度も声をかけられる。一度通り過ぎたマレー人がわざわざ二、三步戻ってきて、ビュティフルベイベイと言った時には、私も少し、

有頂天になってしまった。もしかしたら、この子はこの国の美意識では、絶世の美こどもなのではないかと。

お手伝いに間違えられた

こどもが美しい?ことで私自身は随分傷ついた。近所を散歩していると、市の清掃員なんかに決まって声をかけられる。「インドネシアから来たの?」「じゃあ、フィリピン?」。そう、私はお金持ちのうちの坊っちゃんをお散歩させてる出稼ぎ娘に見えるのだ。

中国人の友達と市場に行き、買い物の後、屋台で朝ごはんを食べていた時に、友達が急に笑いだした。何かと思ったら、屋台のおっちゃんがその友達に「あんた、金持ちだなあ。ベビシッター雇ってるなんて」と言ったんだという。そりゃ、私はすでに朝食を済ましていたので息子に食べさせてばかりだったし、春樹はどちらかと言うと父親似だけど。確かに、たった九カ月のアフリカ生活で、私は取り返しのつかない色を肌にしみ込ませてしまっ

たのだ。アフリカにいたときはまわりの人の肌の色がもつと濃いので、いくら日焼けしてもあまり気が付かなかった。

子どもを昼寝させようといういろいろ手を尽くして、あとひと息というところで玄関のチャイムが鳴る。二階の扉を少し開けて、知らない人だったら居ないことにしようとの様子でうかがったのが間違いのもと。自転車に乗ったインド人のおっちゃんに見つけられて、出てこいと手招きされる。仕方なく子どもを置いて階下へ行くと、そのおっちゃんは郵便局の臨時雇いかなんかで、大家さん宛の書留を届けに来ていた。「お前はお手伝いか。なに人だ」。やたら居丈高である。日本人だ、と言うのに信じない。こんな色黒のTシャツ短パン姿の女が、金持ちの日本人の訳がないと思ったのだろう。大家が来た時にでも渡しといてやると言うのに、なかなか信用しない。結局私がサインして受け取ったのだが、そのおっちゃんは去り際にわざわざ振り向い

て、「やっぱりお前はお手伝いやと、わしは思う」と言い残して自転車をはからふら漕いで行ってしまった。

しかしまあ、ロータリークラブの副会長の奥さん（中国人）も、子どもと庭で遊んでいたら、お肉を届けにきた人に、奥様に渡ししておくようにと言いつかつたことがあるそうで、それを聞いてちよつと怒りがとけた私は、それを逆手に取り始めた。うちに来るセールスマンは、「奥様はお留守なの」と追い払われる羽目に。日本人の友達の家で庭木の手入れのセールスにきたマレー人相手に、「奥様はいらないって。ごめんね」と、やたら文法を無視した英語でやったこともある。

なに人だつてかまわないのかも

私が一発で外国人と見破られるのに対して、夫はこの国に完全に同化してしまっている。例えば山手線に乗っていて、隣に中国人が座っていても普通は気がつかないだろう。でもひと度流暢な中国語を話し始めると、しかし

たら中国人かも知れないと思うだろう。

ところが夫は疑つてももらえないのだ。お正月の休暇に、観光地ランカウイへ遊びに行った時のこと。日本語の流暢なマレー人のタクシーの運転手が「ご主人も日本人ですか？」と何度も振り返って尋ねるのだ。本当ですか、と信じてくれない。ちゃんんと流暢に（当たり前だ）日本語で話してるのに。ホテルのレストランでは地元の中国人だと思われて、ご親切にも帰りのタクシーの手配をしてくれそうになる。私の日本語クラスの生徒（週に一度、ボランティアで上級クラスを教えていた）の中国人からも「ご主人も日本人ですか？」を連発され、本人はきつと服のせいだと言っているが、私は中国人男性のような隙のない、鋭い顔つきのせいだと思っている。

夫婦揃つて日本人とは思ってもらえない私たちが、こういう色とりどりの多民族社会では、そんなこともとりたてて言うほどのことではないのかも知れない。

自費出版は

「わいふ」へどうぞ！

「わいふ」ならではの

親身なアドバイス

良心的な費用

ご満足いただける仕上がり

をお約束します。

● 自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックなど何でも作れます。

● ご自分で撮られた写真やイラストを使って楽しめます。もちろん、イラストレーターに依頼もできます。

● 興味がおありの方は、わいふ編集部（☎〇三―三二六〇―五〇七〇）までご連絡ください。案内のリーフレットをお送りいたします。

―つづく―

（写真提供・筆者）

わいわいがやがや

気持ちのいいもの
じゃない

千葉市稲毛区 小澤長太郎(93歳)

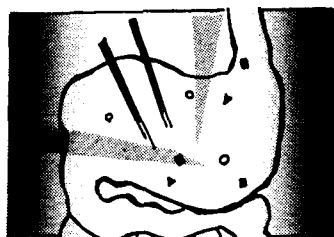
一度経験すればあとはたいしたことはないが。私は七年前、初めて吞んだ(胃カメラ)。いや吞まされた。レントゲンであやしいと見られたからだ。で手術ということになった。小さな診療所だったので、ここ系の病院を紹介された。病院で二度目を吞んだ。若い医者で、いたかった。それに白衣がキレイでなく、部屋も暗かった。私は言った。

「手術はいやだ。ほうっておいたらどうなる」

「五、六年は生きていられるでしょう」

専門の大病院にかかりたい。娘に相談。

大病院で三度目を吞んだ。少



しもいたくなかった。熟練した中年の医者。

三週間待つて、やっと入院。翌日、点滴を受けながら六階の病室から車椅子に乗せられて、一階の手術室へ。おどかされた医者の言葉を思い出して心細かった。

「八十を半ばすぎたの手術、大変ですよ。覚悟して下さい」

思ったより簡単。たった四分で終った。

「もう、心配ないよ。この次手術するのは、あなたが百十歳ぐらいだろうから。それまで生きていられる」

私の胃がん手術。たった二週間の入院だった。

※早期胃がん五年生存率

消化器外科医 榊原宣先生

粘膜 九八%

粘膜筋板 九五%

粘膜下層 八〇%

夫が単身赴任になつて

埼玉県三郷市 渡辺初子(38歳)

夫が二月から単身赴任になつた。彼のいない生活で、一番驚いたことは、自分の時間ができ

たことだ。

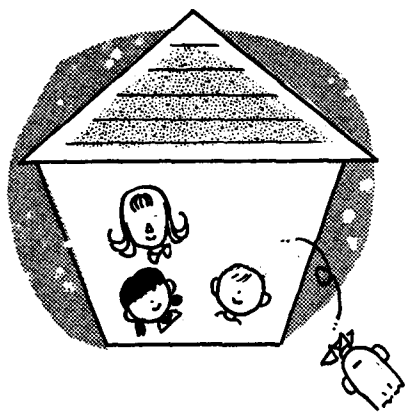
夜九時になれば、「イツツ、ショータイムー」。ゆつくりと私の時間を楽しむ。

今までは、その前後に夫が帰宅したので、汁物などを温めるなどして、食卓をもう一度整え、話し相手になりながら、といっても、彼はほとんどの場合、夕刊に目をとおしながら食べているが、そのあとかたづけをして風呂の湯かけんをみ、夫がふとんに入る時、蛍光灯の電気を消して、就寝。その日々から離れて、今の現状と比べると、確実に二時間、私は夜間の労働をしていたことになる。家事には、時間外労働、超過勤務など、もとよりない。サービス残業などというだけ無駄な夫の遅い帰宅には、頭が下がるし、感謝もする。

しかし、扶養家族という立場を、フツと思ひ、自立を思ひ、は

ては気が重くなってしまうのだ。

今、子供が就寝する時間に、私の労働時間は終わる。でも、子供とほんとの意味で、共存で



は、手伝いは「してやっているのだ」と思っている気配がする。家事は、生きていくための真剣な営みの積み重ねであること、

きるように、子供を変えていきたいと思っている。家事は母親のすること、だなんて思っけはしくないので、どうやら子供

家族なら同じように参加しなければならぬことなのだ、子供が理解し、実行できるようにするにはどうしたらよいのか、

今思案中である。「勉強しなさい」なんて言う、ような親子関係のうちは、無理かとも思っけしまうが。

夫が帰宅した時、私は胃が痛んだ。

「やつぱり家が一番だ」とデーシと動かなくなる人のお世話を、「お疲れ様でした」といいながら、させていただく。いっしょに歩く夫婦になっているか、と、自問している。

正直者は怪我をする？

千葉県松戸市 石山美佐

「駅前の交番ですが」。電話口の男性の声に一瞬ヒヤリとした。友達の家からそろそろ帰宅するはずの、小二の娘の身に何か？「お宅の娘さんが、拾ったお金



を届けてくれました。今、書類を作成しています。半年たつて落とし主が名乗り出なければ、警察署へ行ってその金額を受け取ることが出来ます」

なあんだ。力が抜けた。一安心。安心すると気になるのは金額。いくら拾ったんだろ。電話口で聞くのは、まるで半年後を期待しているようで気が引ける。期待しているけど。手続きが終

わり次第帰宅させますとのことを受話器を置き、娘の帰宅をうきうきと待っていた私だった。しかし数分後私の耳に届いたのは、家の外から聞こえる娘の泣き叫ぶ声だった。「うわああん！ うわああん！」

何だ、何だ、一体。

「交番出るときドアに指はさんだあ！ うわああん！ 痛い痛い痛ーい！ ぎゃあああ！」

ひょっとして、交番出てから家まで泣き叫びながら帰ってきたのか？ 指からは少し血が出て腫れている。念のため医者に連れて行った。検査の結果骨に異状なし。ガーゼを当ててもらって一件落着。その帰り道、「ところでいくら拾ったの？」。ようやく聞けた、期待の質問。帰ってきた答えは「十円」。

ほお。十円拾って交番に届けて、ドアに指挟んで検査代が千二百円と。「半年たつて誰も取りにこなかったら、私がもらえるんだよね！」と娘ははしゃいでいる。まあね。バス代払って警察まで行けばね。

それから二カ月。娘の指の傷も目立たなくなつた。交番でもらつた「十円拾った証明」の書類も紛失してしまつた。娘も学年が上がつた。もう十円拾って交番へ届けることもしなくなるのだらう。ところで私は先日外

出先で三千円を拾つた。私はそれをどうしたか……それはご想像におまかせしましょう。

四十女が赤い 着物を着るワケ

神奈川県藤沢市 木村澄子

ある日突然、旧友の高野貴子さんから電話がきた。「一緒に一人芝居を見に行かない？」と言うのである。島田正吾の「白野弁十郎」を。

そうねえ、島田正吾もそろそろかも（これは大きな誤りだと観てわかつたが）。思い切つて行くわ。でも着ていくものがないうだけど、他もろくなのがない。せっかくだから気分の変わるものじゃなくちゃね。思い切つて着物にしようよ。若いこ

ろので簞笥の肥やしになつてゐるがあるでしょ。手入れするにもお金がかかるから、そのまゝまで着ようよ。

というようなわけで、二人共着物で新橋演舞場に行った。彼女は顔に皺もシミもないのでとても若く、白地に朱色の裂れ取りの小紋がきれい。私は錆び朱に飛び飛びの絞り。どちらも一色染だったので、「派手じゃないわよ」と相手をほめて、写真など撮った。夜だし、女同士だし、まわりにも着物の人は多いし、島田正吾はすばらしかったし、すっかりいい気持ち。

何といつても一番簡単な虫干しだ。味をしめて、次の機会にも赤い着物を着た。今度は文楽。国立小劇場で「女殺し油の地獄」。

彼女は牡丹色に銀杏の葉の裾模様の着物で、模様の一色を取った赤の道行。着物ならではの

の鮮やかな色合わせ。私は洗ひ朱に露で、朱茶の道行。このときの写真は私が下手でうまく撮れずに残念だったが、友達が若いのは何といつてもすてき。一緒にいてほっとする。自分の顔はふけていても見えないので、

同じ年頃の友人が若いと同化して自分も安心できてしまう。

こんなふうに、最近自分が関心を持ちはじめたせいもあるだろうが、着物を着ている人も着物の本もひところと比べて増えたような気がする。金欠で苦し



高野貴子さんと筆者（写真提供・筆者）

む私の理解では、洋服が買えないので活用する人が増えた、と思うけれども、初心者向けの本も随分出ている。それがみんな非常に地味なものばかり。

ロングセラーだという波野好江さんの「初めて買うきもの」（光文社）なんて、先のことはかり考えた渋好み。でもお役者の女房は、舞台の挨拶の裏方だから、普段から地味につくるだろうし、そういう玄人は着なれているから、地味を淡く粋に着こなすだろうけれども、我々トウシロが同じようにしたところで決して粋にはならない。野暮に地味を重ねたのでは、映えないことおびただしい。

だからやっぱり派手でいいよね。自分たちが気持ちよくなれるように着ればいいんだからさ。また二人で赤姫、やろうね！

（え・田村幹代）

わいふ ネット

お答えします

「草木染めの方法」を知りたい
後藤さんへ

★やさしい色に染まる草木染め★

埼玉県八潮市 遠藤玲子
草木染めにはいろいろなやり方があります。材料も玉ねぎ、蕎麦、ヨモギ、まつよい草と、身近なものから珍しい植物まで、いろいろです。媒染（染まりやすくする）のために

加える物質もさまざま。染めるために布を煮る温度や時間も微妙です。くわしくは手紙でお知らせします。（編集部より転送）

「わいふ」は株式会社ですか
の伊藤さんへ

★株式会社なんですけど……★

「わいふ」社員 間瀬中子
「わいふ」誌は一九六三年にボランテアのミニコミ誌としてスタートしましたが、一九八〇年に株式会社となりました。責任をはっきりさせ、仕事としてやっていこうという意気込みでここまでできましたが、まだNPO（非営利団体）に近い部分も残っています。よりよい会社を目指して一層頑張ります。

「子供会は盛んですか？」
の藤池さんへ

★子供会、盛んにしましょう★

岡山県倉敷市 小野喜美子
子供会しかり、PTAしかり。昔から続いているという理由で、その活動の意義を確認

することなく続けていくから、人間関係がひずんでくるのでしょうか。子供のために何をなすべきか、何ができるか話しあう必要がありますよね（難しいですけど）。

子供会活動自体は、子供に自分の住んでいる地域や人間関係を認識させるという意味で、今だからこそ必要性は増している、と私は思います。

「映画のタイトルを知りたい」
間瀬さんへ

★タイトルは「愛と哀しみの果て」です★

川崎市麻生区 白井民子
一九八五年にアメリカで製作されたシドニー・ポラック監督の映画で、アフリカに魅せられたデンマークの女性の物語です。主演はメル・ストリープとロバート・レッドフォードで、アフリカの原野が美しかったのが記憶に残ってます。原題はOUT OF AFRICAで原作者はアイザック・ディネーセン。私は読みましたが邦題は「アフリカの日々」となっていたと思いますが、不確かです。
※東京都府中市の中田慶子さん、福島県いわ

き市の加原世子さんからも、同じような内容のお答えをいただきました。

教えてください

難聴についての情報

埼玉県所沢市 平谷公江

私の四歳になる姪（埼玉県大宮市在住）が重度の難聴である事がわかりました。私と妹共に困惑するばかりで……。とにかく経験、サークル等、なんでもいいので情報を下さい。

おたふく風邪と不妊について

茨城県竜ヶ崎市の 小川文子

十三歳の息子がおたふく風邪になった。医者から副睾丸炎を併発したら、種なしになると言われ、予防としてクロブリンの点滴（自費で四万八千円）をすすめられてうけた。しかし一週間後に下腹部の痛みを訴え、他の病院で受診すると、副睾丸炎のようだがこの年齢では不妊の心配はないと言われた。

どなたかこのことで情報をお持ちの方、実際はどうなのか教えて下さい。

「あやめ団子」をご存知ですか

富山県富山市 沢潟裕子

一見、みたらし団子。しかし、団子を軽くあぶってあり、黒砂糖を煮溶かしドロリとさせた透明感あるたれをからませている。これが「あやめ団子」です。おやつに五本はペロリといってしまう美味しさ。なのにこのお団子、夏（七・九月ごろ）のもので一年中、和菓子屋に並ぶことがない。東京で一度も見ることのなかったこのお団子、あなたの町にはありますか？

本を探しています

和歌山県日高郡 中松ミナ子

戦後、母が買ってきたてくれた本です。「手をつなぐ子等」という題名だけ覚えていて、貧しい生活の中で母はよく本を買ってくれました。私を本好きにさせた原点でしょうか。その中でこの「手をつなぐ子等」は、幼心に深い感動を呼びました。つい同じ感動を友にもと貸したら、そのほかの本と共に戻ってきませんでした。作者も記憶にありません、もう一度読み返してみたいのです。

お持ちの方、ご存知の方、お教え下さい。
牛乳パックでできるおもちゃは？

川崎市宮前区 布施孝子

牛乳パックで作る幼児用のおもちゃの作り方を教えてください。TVやビデオ、キャラクターにまみれた玩具でなく、手作りのものを見直していきたいと感じています。

その後

◎子供たちは成長しました

千葉県印旛郡 祇園邦子

現状をお伝えします。長女を寝かせつけに行こうとすると、長男は「待ってるね」と言い、一人で遊んでいます。そして、私が戻ってくると「一人で賢く待ってた」と言ってくれます。それから私たちの昼寝です。時がたつて、長男は妹がいることに慣れ、「必ずママは戻ってくる」と、私を信用してくれるようになったのだと思います（編集長のおっしゃるとおり）。下の子も（きりぎりまで起こされて）すぐ眠るようになりました。

母のベッド転落

母が骨折？

八十六歳の母が七〇センチの高さに上げた介護ベッドから落ちた。数秒の不注意だった。市内のホームに入所して一カ月ほど経った昨年四月八日、我が家でおむつ交換の時である。実はこれが二回目なのだ。一カ月前にも落ちたが、その時は大事には至らなかった。今回は様子が違う。

レントゲンを撮らないかと思ひ、入院の可能性も考えて、三年前母が脳梗塞で入院した病院へ、電話した。この病院が我が家から一番近く、私が通いやすいからである。しかしベッドの空きがないと言ってレントゲン撮影も断られた。母が痴呆で一級身障者であると、ばか正直に言ったからだろうか。それ

奈良県奈良市

田中 慶子

で母の在宅介護の時にも診てもらい、この前の転落の時にも診てもらった、近くの診療所の医者に往診してもらったと、

「骨折はしていないと思うが、レントゲンを撮らないと一〇〇パーセント大丈夫とは言えない。しかし二、三日様子を見たらどうですか」ということだった。

翌朝、祈るような気持ちで母を起こしに行ったが、奇跡は起きなかった。上体を少しでも起こすととても痛がる。もうこれはレントゲンだ。前日の診療所の系列の、Y病院で診てもらったことになった。

レントゲン撮影の後、私が緊張して診察室に入ると、

「骨折していますね」

といきなり医者がぶつきらばうに言った。ずっと不安に怯えていたが、その瞬間目の前が真っ暗になり、頭が真っ白になった。続いて医者が、

「どうされますか。これは入院してもどうすることもできないし。ホームでみてくれるかな。家でみられますか」

と無愛想に非情に言った。私がショックのあまり何も言えないでいると、写真を見続けていた彼が、

「しかし、この骨折は古いですね。圧迫骨折ですね」と言ったので、私は医者のこのことばにとびついた。

「それは八年前、母がたんすを持ったためになった圧迫骨折です」



思えばこの圧迫骨折がきっかけだったかのよう
に、この時から、直前に言った自分のことばを忘
れというような、普通ではない物忘れが始まったの
だった。さらに医者は、在宅介護を恐れる私にとっ
て、嬉しいことを言ってくれた。
「痛みはベッドから落ちたことによるもので、安静
にしておくことです」
私は、
「そうならそのことを書いていただけますか。骨折
はなくて、ホームでの生活はできると言うことを。
私の夫はよくしてくれますが、兄がいながら私の実
母をまたも在宅介護するとなると、夫の姉たちに対

しても気兼ねがあるんです」

と夢中で言った。特別養護老人ホームへの入所案内を市から受けた時には、入所を大変躊躇した私だったのに、この時は在宅介護に戻ることをととても恐れていた。

親のお金の管理だけをする兄夫婦の身勝手さに、夫が、

「一度お母さんを兄さんに返せ」

と言ったことがあったのだ。それに対して私が、

「兄にはそれでいいけど、かわいそうなのはお母ちゃんや」

と言うと、夫は黙ってしまったのだった。それに私は椎間板ヘルニアがひどくなっていた。

いや、それよりも何よりも、母をホームに預かってもらっているのは楽だった。たとえ毎週三泊四日で母を我が家に外泊させていても、週に三日も母からまるまる解放されるのは、本当にありがたかった。せっかく手にした自由を失いたくはなかった。

ぶっくらぼうでこわそうだが、心のやさしそうなその医者の書いてくれた診断書を持って、母を寝台車タクシーに乗せてホームに戻った。寮母さんたちは、

「よかった、よかった」

と笑って迎えてくれたが、看護婦さんは責任ある立

場上からか、厳しい表情だった。

心配顔の彼女の話によると、以前はホームのベッドで入所者に点滴もしていたが、最近は医療費が抑えられて、点滴が必要になると入院させなくてはならないらしい。ところが老人を受け入れてくれる病院が、なかなかない。手がかかるからである。

「どうすればいいんでしょう」

彼女と同じく、私も途方にくれて言った。

「（入院させてくれる）＼病院を大事にして下さい」と彼女は言った。

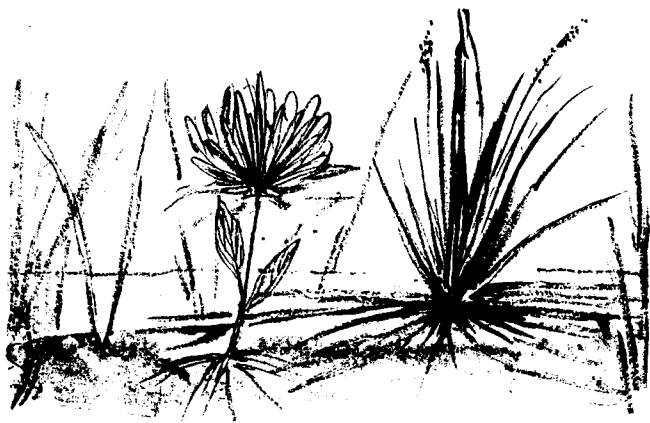
夜寝る時、きょうはどんでん返しのように奇跡が起こり、何とか在宅介護を免れたと思ったものの、不安はずっと鉛のようにあった。そして不安はやはり当たった。

在宅介護を覚悟して

翌日の夕方、母の様子がやはりおかしいと、ホームの看護婦さんから電話があった。

りんごの甘く煮たのはおいしいと言って食べたが、朝食も昼食も食べないらしい。胸も痛いと言い、大きな息をするので不安だと言う。明日病院で、骨折以外のところを診てもらってほしいということだった。

前日の私は在宅介護に戻る心配でいっぱいだった



が、この時はそんなことよりも母のことが心配だった。必要なら、どんな障害があっても在宅介護をしようと思っていた。私の腰痛や夫の姉たちの思惑など言っておられない。一旦腹をくくると、何事もそんなに大変だとは思わないものなのかもしれない。なぜあんなに在宅介護を恐れたのか、自分でも不思議だった。それより母をベッドから落としてしまったこんなことになってと、母に対して申し訳なく、母がかわいそうで辛かった。頭が混乱していたので、何をどういう順序で明日行動するかをメモしてから床に就いた。

次の日の朝診療所に電話したが、なじみの看護婦さんはふたりとも留守だった。私が初めての看護婦さんに事情を言うと、今後のことを相談したいから診療所に来てほしいと、悠長なことを言う。こちらは切羽詰まっているし、レントゲンを撮るだけのことなのに、なぜそういうことを言うのだろうかと歯がゆかった。母の様子を言うと、ベッドから落ちたショックのせいだろうと言うだけで、母を診察してほしいという私の希望には答えてくれない。しばらく様子を見るようにと言うだけで、明らかに逃げている。不可解としか言いようがない意外な態度に面食らった。

ホームに、先ほどの看護婦さんのことを伝える

と、副園長が、
「一週間ほど様子を見ましようか」
と言ひ、そうすることになった。しかしその後すぐ



に、ホームの寮母主任から、差し迫った声で電話があり、母が食べた物を戻したのですぐに病院へ連れて行くようにと言う。大変慌てた様子だったので私

も慌てた。

すぐに車で診療所に行くと、先ほどの看護婦さんがゆっくりした調子で、今ベッドがないと言う。そしてもし検査の結果入院となったら、付き添う人が要ると言う。

「私が付き添います」

と言うと、

「あなたは自営業で忙しいでしょう？ 検査の結果、もしホームが受け入れられないと言ったら、在宅になりますか？」

と言うので、

「在宅の覚悟はしています」

と言った。

呼ばれて診察室に入ると、母がベッドから落ちた時往診してくれた医者である。彼は母の在宅介護の時もいつも往診してくれた、なじみのある人である。それなのに彼も、母の症状はベッドから落ちたショックのせいだと、先程の看護婦さんと同じことを言う。私は必死になって訴えた。

「ホームの人が母の様子を見て不安に思っているの
で、とにかく母を診察して下さい。何ともなかったらホームの人でも安心しますから。そうして下さ
い！」

すると、

「何もそう慌てなくても」

と言いながらも、彼は看護婦さんにY病院に連絡するように指示した。

しばらくして、

「午後から退院する人がいて、ベッドがあきま
すので、午前中に検査を受けて下さい」
ということになった。

老人医療の貧困

レントゲン撮影の時はすぐに引き受けてくれたのに、レントゲン以外の診察を頼んだこの日はなぜこ
うもしぶるのか、ふしぎだった。しかし何か簡単に
は引き受けられない事情があるのだろうかとは思っ
た。

考えてみると、この春から付き添い制度が廃止に
なっている。思えば前々日、母が脑梗塞で入院した
病院にレントゲン撮影を頼んだのに、ベッドがない
という理由で断られたのもこのためかもしれない。
付き添い制度の廃止で、家族の付き添いが期待でき
ない老人の入院は、病院としては困るのだろう。仮
に家族が付き添うと言っても、実際入院してしまえ
ば放ったらかし、ということも多いのかもしれない。
手のかかる老人は、入院させたくても病院も人
手がないのだ。診察の結果入院の必要があれば、病

院としてもそれを断るわけにはいかない。それで門前払いをしたいのだろう。

良心的なことで近所でも評判のこの診療所で、しかも母のホームドクターとも言うべき医者に、この



ような態度をとられるのはとても悲しいことだ。老人医療行政の悪化は目を覆うばかりにひどい。

ホームが寝台車を出してくれ、母を乗せてY病院へ向かった。この事故がなかったら、この日は私と

娘で、母を平城旧跡の桜を見せに連れて行こうと言っていたのだ。それがこんなことになって。車を運転しているホームの指導員さんが、落ち込む私を、「あまりご自分を責めないで下さい」と慰めてくれた。

病院でのCT検査、血液検査の結果、異常はなく、ただ風邪気味だということだった。そう言えば、嘔吐も微熱も顔色の悪いのも風邪の症状である。

迎えに来てくれたホームの指導員さんが、桜が数本並んでいる所へさしかかると、母のためにゆっくり走ってくれた。きょうは母をお花見に連れて行くつもりだったと、先ほど私が言ったからである。私は寝たままの母の横にすわり、目を閉じる母に、母の頬を指で強引に開け、

「お母ちゃん、桜やで！ 桜やで！」

と叫んだ。早く桜に気がつかないと通り過ぎてしまう。あらぬほうを見る母に私は苛々し、また、

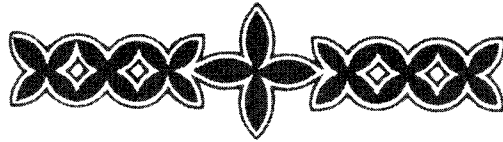
「桜やで！」

と叫んだ。母はやつと桜に目を留め、

「桜や」

と笑った。

昨年十二月二十九日に母が亡くなりました。この文の最後の二行を読み返して少し涙が出ました。



フリースペース



ヒマラヤの動物たち

香川県小豆郡

広瀬サカエ

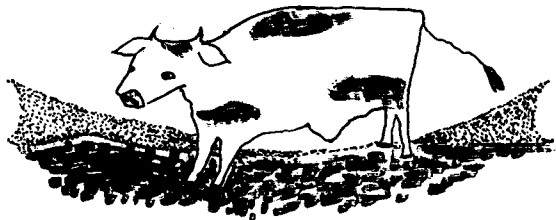
三月の下旬、友人とヒマラヤ・トレッキングツアーに参加した。

ヒマラヤの山々を自分の目で見てみたいというのが第一の目的ではあったけれど、そこに住む動物や自生している植物も観察したいと思った。

今度のトレッキングでは、ヒマラヤの家畜たちが置かれている環境に興味を覚えた。

家畜の種類は日本で飼われているのと同じものが多かったが、ヒマラヤの家畜たちは飼われているというより、人といっしょに生きているように思える。

牛はたくさんいて草を食^はんだり、寝そべったり、好き勝手にしている。神聖なる牛は働かず束縛されず、肉にして食べられもしない結構な身分なのだ。幅の狭い道を人も牛もいっしょに歩くのだが、ストレ



スがたまらないからだろうか、大きな角を持ち、でかい図体をしていても非常に温厚である。

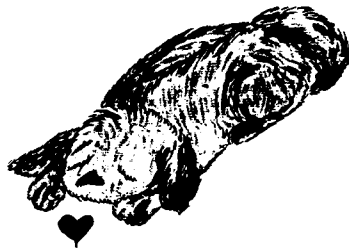
ある日、家の前で数人が動物の解体をしているのを見た。その大きさからして牛のようである。不思議に思っただけで、牛の仲間ではあるが水牛とヤクは、食べてもいいのだと言う。

私たちは食事の度に、こくがあつて美味しいヤクのミルクをたらふく飲まして貰ったのに、それって牛種差別じゃないですか。犬も繋いでないので、どこでも勝手にうろついている。食事をしていると、子牛ほどもある犬がテーブルの下にもぐり込んできて、何か貰えないかとおとなしく待っているのだが、食事を作ってくれるコックさんやキッチンボーイたちの手前、食卓に出された物を与えるわけにはいかない。

家があるところには、必ずといっていいほどニワトリがいる。いろいろな種類のがいて、そのまわりにはヒヨコがいっぱい、屋根の上にはホロホロ鳥までいる。

それらが餌をあさりながらほつきまわっているのに、犬が危害を加えないのが

不思議である。生まれた時から共存していると、襲ったりはしないのかも知れない。不思議といえば猫はヒマヤンが大好きないるのではないかと期待していたが、一週間ほどの間に三匹見かけたにすぎない。



それもみんなキジトラだった。

羊も山羊もほとんどが放し飼いで、首輪も名札もついていないのに、飼い主は自分の家畜は見分けがつくのだろうか。

トレッキングコースになっているジヨムソン街道は、何様が通ってもいいフリーウェイである。ロバの隊商も通れば、ヒヨコを連れたニワトリが横切る、犬も歩けばアヒルも走る、牛などは堂々と道の真ん中に座り込んでいることもある。車と名のつくものがないのだから呑気なものだ。動物たちは所かまわずばたばたとフンをしながら通る。

繋がれたり囲われたりすることがない家畜たちが幸せかといえば、そうとばかりは言い切れない気がする。

私が通りすぎりに見かけただけでも、ロバの隊商の中の一頭が、衰弱して低い石段がどうしても上がれずに立ち往生している。通り過ぎて振り返ると力つきて倒れていた。

急な坂道を登っている時のことだった。

上から牛の母子が下りてきた。母牛は片方の前足が曲がつたままで地面に着かない。一歩進める度によろめき、その拍子にくっついて歩いていた子牛が、はね跳はされるかたちで崖から滑り落ちた。「ヒャー落ちた」。悲鳴をあげて恐る恐るのぞくと、崖

の途中でかろうじて止まった子牛が、ずり落ちそうになりながら懸命に這い上がろうとしている。ヒマラヤの家畜たちは病気になることも怪我をしても、自力で歩くしかないのだ。

キッチンボーイの背負った鍋や、やかんの上にちょこんと乗っかって夕方までの命とも知らずに「コケコッコ」と勝ち誇ったように鳴いていたニワトリ君。それを見ていると、ふと「おもしろうてやがて悲しき鵜船かな」という芭蕉の句が浮かんだ。

虫歯予防デーに のりおくられています

千葉県市川市 堺 みどり

去年の暮れからずっとゆううつなことがあった。「この次、来週」と延ばし延ばしにしていたもの。それは、歯の治療であった。上の右奥の歯が舌でさわると、ぽっか

りと穴があいているようなのだ。

おせんべを食べていた時だった。たしかに、その瞬間、ガリッと音がして歯が欠けたような気がした。そして口の中に砂利がはいったように感じた。くだけたおせんべいといっしょになって、よくは見えなかったけれど。幸い痛みはなかったのだが、正月も明るい気持ちでは迎えられなかったのである。

私は自分ながら、歯の悪さには、本当に腹がたつ。子どもの時に祖母の元に預けられていたせいもあって、歯磨きをきちんとしなかった（というよりも、言ってくれる人がいなかったということ）ことと、甘いものを適当に与えられたせいだと思う。

子どもの時から泣いていた。歯医者などない村で育ったので、ただただ痛みがすごいのを待っていた。一度連れていってもらった親戚の歯医者で下の奥歯を二本抜かれ、以後それっきりでまたそれが悪い要因になっていった。

高校生あたりまでは、若かったせいか小さな穴をつめているのに留まっていた。それでもほとんど全部の歯は処置されていた。

しかし、二十歳すぎてから、それまでの詰め物の周りがすこしずつ虫歯になっていった。会社勤めの合間を縫っての歯医者通いとなった。あの金属的な音と鋭利なドリル。「これでもか」と削る歯医者。「いったいいつまで痛い思いをするのか」とただただ情けなく患者で横たわる私。

二十五歳くらいまでで、できる範囲の治療は終わった。そのころから、差し歯になった前歯と、下の歯に隙間ができたことで、あまり口を開けては笑わなくなったと思う。それから年に一回くらいの割合で、歯医者にかかっていた。しかし、ここ三年ほどは、何事もなく過ぎていたのだった。

正月が過ぎ、三月になった。四月から新しい職場に移るのはわかっていたので、今しかないと思い、決心した。重い腰をあげ、電話をし、治療となった。初めて行く歯医者である。

「どうしました」「あのー、上の奥歯に穴があいてるようなんです」「うーん、これは歯が欠けてますね。ずいぶん歯がもろくなってますよ。詰めたのも随分傷んです。下の奥歯がないから、余計に負担になって



たんだね」「そうですか。……すごく歯が
 悪いもので」「いやー、よく治しました
 ね。時間かかったでしょう。この歯は、
 じゃ、中をきれいにしますし削ってまた
 詰めます。えー、他の歯は、……」（この
 間がドキドキするのである）「ずいぶん詰
 め物も古いけど、ま、だいじょうぶでしょ
 う。歯磨きはよくできてますね」（初めて、
 医者にはめられた。うれしい）

その日は、中をガリガリかきだされ、薬
 を詰められて帰ってきた。ともかく、数年

ぶりの歯医者で、肩、首、背中とも緊張か
 らくる凝りでいっぺんに具合が悪くなっ
 た。頭まで痛みだし、夕食のしたくもでき
 ず、バファリンを飲んで寝てしまった。

あと二回で終わるというが、またこの緊
 張とあのドリルの音が待っていると思う
 と、ゆううつである。

八十歳で二十本の歯をという、啓発運動
 が行なわれているけれど、私には無理のよ
 うだ。私はなるべく入れ歯にするのを遅く
 するように努力したいと思う。

算数・数学を教えてみませんか

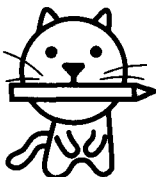
子どもたちが、算数・数学を楽しく
 学ぶことができれば……と考えたこと
 はありませんか。

これまでの数学教育は、子どもたち
 の知的好奇心を十分満足させてきたと
 は思えません。

「量」と「水道方式」による、当会
 の教材を使って子どもたちに算数・数
 学を教えてみたいという人を求めています。教材の内容・指導法その他につ
 いて講習会を開いています。開設後の
 フォローも万全です。国語・英語教室
 も開けます。

資料送ります。

水道方式による、
 丁寧で系統的な教材
 知る喜び、
 学ぶ楽しさを
 大切に



おかげさまで29年

〒160 新宿区新宿四―1―33―7F
 ☎〇二〇―四二〇―五三一
数学教育研究会

組長

千葉県松戸市 高橋 安子（53歳）

組長といっても、私が引き受けたのは町会の役、二葉五組の組長。この地へ転居して四年目の春の昨年のことだった。任期是一年、新しく転入した人が順に受け持つことになっていった。町会費の集金や回覧板を回すことや、盆踊り、祭札の手伝いが主な仕事。評議会も年に五回はある。二十二世帯のこの組で顔を知らない人もいる。この地に馴染むよい機会かもしれない。

五月に町会の役員や組長の顔合せがあり、早速町会費の集金となった。一軒一軒の戸口に立つ。ご苦労さまの声に、何かホッとします。

八月には盆踊りが神社の境内で二日間行なわれた。私は踊り手へ、飲み物の接待係として二晩盆踊り見物をした。

十月の祭札は子供神輿の渡御がある。麦茶と駄菓子^{とぎや}の袋詰め百五十箇所を用意して、

神輿について歩く子ども達へ振舞った。

この二月に町会の反省会があった。街灯を設置してほしいなど要望が出た後に、役員から次期組長の選出依頼があった。私の後に転入してきた人にCさんがいる。私は、Cさんに頼めばいいと決めた。

三月の大安吉日の土曜日、午前中にCさん宅へ、組長を頼みに行った。子どもが出てきて朝は留守、昼は寝ていると言った。夜は私のほうに用事があると言った。話をすることができた。八月までの予定で、夜に仕事をしているので、引き受ける人がいなければやります……とのことだった。仕事の都合であれば、Cさんには来年やつてもらえばいい。私は他を当ることにした。

この組に、Cさんの後に転入してきた人はいない。初めに戻って、一ばん古い人から組長を探すことにした。

町会費集金のノートには、昭和五十一年度からの組長の名前が記されているが、それ以前はわからない。ノートの二十一名の組長のうち九名がこの組を去っていた。

町会の役員を訪ねたが、昔のことは知らなかった。組長選出に役員は介入しない、

現組長に一任しているという。高齢者の世帯が多いから、若い人に頼んでみては……とも言った。組長が面倒な役だからといって、高齢者世帯と決めつけ、声も掛けずに素通りをしていいものだろうか。隣の奥さんは、Aさんに聞けば一ばん古い人を知っているはずと教えてくれた。

翌朝十時すぎにAさんを訪ねた。Aさんがここへ転居した昭和四十二年当時は、家もまばらで淋しかった。この一角は、池を埋め立てて宅地にし、分譲された所なので、古くからの土地の人はいない。「Tさんが私より前から住んでいた」とAさんは言った。

Tさんに頼みに行った。Tさんは自営業、子どもは独立して、ご主人のお母さんと夫婦の三人暮らしだ。家を建てる時にSさんから水をもらったから、Sさんが一番古くからの人よ、と言う。

Sさんはクリーニング屋さん。そうだね、うちが一番古いネ……と言いながら思案顔、組合の役も今年はやるんでネ……と言う。すこしの沈黙の後に、やる人がいないなら……と引き受けてくれた。組長が決

まっつてよかったというより、押しつけてしまった申し訳なさが残る。心の中で一年だから……と言いつつしていた。

二葉町に住んで五年になる。杜宅を改築するために出なければならず、急に家を建てることになってここへ来たのだった。

住んで二年目に、夫はアルコール依存症



の治療のために一年休職をした。サラリーマンが一日中家にいるのは目立つ。息をひそめ、まわりの目を気にしながらの通院や断酒会通いをした。それでも昼間、夫は庭に出て草木の世話をしていた。日曜でもないのに大工仕事の音をさせていた。近所の人は不審な思いで見えていたであろう。しか

し、誰もその事を聞いてはこなかった。ソツとしておいてくれた。

私はこの町、この組のやさしさを改めてありがたく思っている。四月に総会が開かれて私の組長は終った。次の組長が回ってくるまで元気でいたい。

デビュー

千葉市中央区 石川 久代

ファックスを送ると、折り返し電話が鳴った。

「これで大丈夫です。今から入稿しますから。本当にお疲れさまでした」

担当編集者Aさんの声が、いつもよりさらにハキハキと響く、私の初入稿の夜……。

今からちょうど三カ月前の一月半ば。私は週刊SPA!の副編集長と「ご対面」することになった。唐突になぜこんなことになったのか、少し長くなるが説明すると。

以前私が「わいふ」に書いていたいくつかの原稿が、NHKの女性ディレクターの目にとまり、彼女は私を取材に来了。それ以来すっかり友達になってしまった私たちは、ある夜食事の約束をし、その席にディレクターの友人であるSPA!編集部に勤める女の子が便乗した。私はこのSPA!の彼女ともすっかり意気投合し、「石川さ

んの原稿読ませて」と言う彼女に、ハイハイ早速……と今まで書き溜めた文章を送った。そしてそれでチャンチャン、のはずだった。

が、コトはそれで済まなかった。私の原稿にいたく感激してくれたSPA!嬢は、なんとそれを副編集長に読ませたのだ。さらにこの副編集長が「ウーン、ぜひ石川さんに会いたい」と言い、先のご対面となった次第。

さて副編集長との話の中で「ところで石川さんは、今後どのようなものを書くつもりですか」と聞かれた私は、おずおずと一通の企画書を取り出した。それは私の夢のまた夢、一生一度の願い事、単行本の企画書だった。

細々とでも物書きをしている以上、いつか自分の本を書いてみたい。いやその前に何よりプロとして書いてみたい。大声で言うには少しためらわれる「身のほど知らず」の夢だけど、せっかくのご対面、とにかく売り込み先の出版社だけでも紹介していただく。

「いやあ、コレいいですね。すばらしい企

どうせ死ぬなら自分らしくと思っているあなた FAN倶楽部をご存知ですか!



「FAN倶楽部」に入会すると、

1. あなた自身の意志を自分の葬儀に反映できて、葬儀費用は明瞭です。
2. 訃報通知を迅速に代行するのでご遺族の負担を省きます。
3. 東京海上・東京海上安心生命の保険契約と組み合わせることによって、リスクをワイドに補償したり、保険金を葬儀費用に充当することができます。



くわしくは「わいふ」あて
電話で資料請求して下さい 東京海上火災保険株式会社

わいふ指定代理店

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

画ですよ。石川さんの文章力にこの企画ウン、これSPA!でやらせてください!」

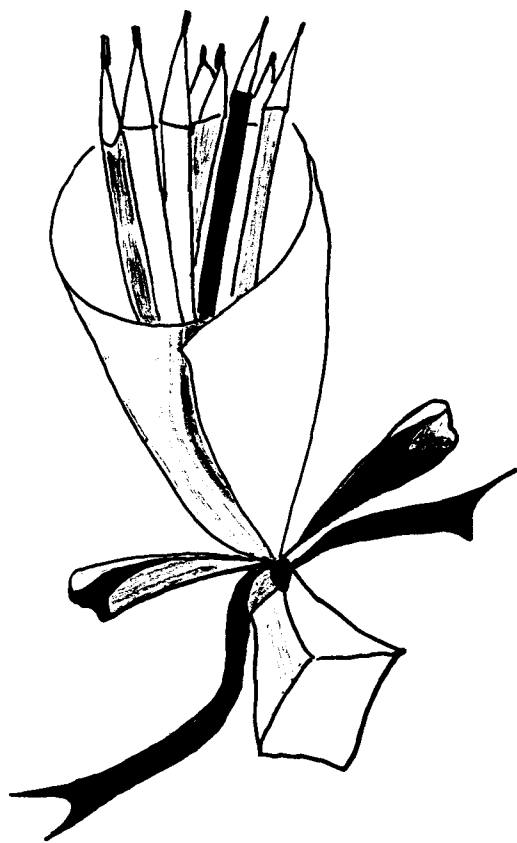
エッ? 今、なんと? SPA!でやると聞こえたけれど、私の耳はよっぽど耳クソがたまってるんだろうか……。

それからこの話は、雑誌のトップ・編集長のところへ行き、私は「今までなかったモノを書きます!」とは、つたりプレゼンテーションをかまし、正式にこの企画が「連載」として採用されることになった。

担当編集者の決定、新しい名刺、取材先へのアポ取り。布団を干し、きゅうりを漬けていた私の日常が、目まぐるしく変わった。私は「SPA!の石川」となったのだ。

喜びと同じ、いやそれ以上の不安の中で、私はそれでも精一杯原稿を書き始めた。校正記号ひとつわからないおぼちゃんライター。取材対象の深層に追れない、弱虫ライター。そんな私を時に温かく、時に厳しく、導いてくれるたくさんの人達。そして……。

階段を一段ずつ上るように、タイトルが決まり、デザインが決まり、レイアウトが仕上がる。たった一行を削る苦しさ。たっ



たひと言を変える辛さ。書くということへの妥協と情熱の戦い。けれどそれらが私を、また高めてくれる実感。

入稿まであと一時間となった時、最後に決まったものは、私のペンネームだった。特別な才能もコネもない私がここまでたどり着けたのは、多くの人との運命的な出会いがあったから。これからも人と人との結

びつきを大切にしなければ。そう思って、「石川 結貴（いしかわ・ゆうき）」とした。

連載タイトルは「ブレイク・ワイフ・カップルたちの行方（五月七日発売号より）」です。みなさんどうぞ、読んでください!

（え・田沼千恵）

厚生省指導指針による 有料老人ホームの類型

健康型の有料老人ホームに入居し介護が必要になったとき、どこで介護を受け、費用はどうか。ホームのタイプは最初から決まっています。

この類型はそのホームのタイプを表しています。よく理解しておきましょう。

終身利用（同一施設内介護）型

介護が必要になっても入居契約は解約されません。専用居室の権利はそのまま、介護を受ける場所は同じ施設の中です。介護が必要になったからといって新たな費用は不要です。

終身利用（提携施設介護）型

このタイプも入居契約は解約されません。専用居室の権利はそのまま、新たな費用は不要です。同一施設内介護型との違

いは、介護を受ける場所が変わることです。提携施設など別の場所に移ります。今まで住んでいたホーム内で介護は受けられないわけでは

提携施設移行型

このタイプのホームは入居契約が解約されます。他の提携施設と契約し、今まで住んでいた居室の権利は消滅します。介護を受ける場所は提携施設など別の施設になりますが、新たな費用は不要です。

提携施設介護型との違いは、今まで住んでいた施設との契約がなくなることです。

限定介護型

契約上定められた以上の介護が必要になると、契約は解約され居室の権利は消滅します。介

護を受けるためには介護型ホームと新たに契約します。そのための入居一時金が必要です。

注意することは「契約上定められた介護」という点です。入居契約の時、どの程度の介護までしてくれるのか、しっかり確認しておきましょう。

健康型

自分の身の回りのことが自分で出来なくなると、契約は解約されます。介護型ホームと新たに契約しますから、入居一時金が必要です。

以上が健康型の分類です。契約が解約されるホームでも、自費でヘルパーを雇えば続いて入居してよいホームなどもあり、実際は柔軟に運用されているようです。

介護型については次号でくわしくご説明します。

（水落）

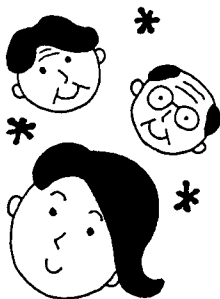
親が倒れた！
どうしよう！

高齢者の介護の問題は、待たなしで突然襲ってきます。病院から退院を迫られている、どこか入院できる施設はないか。父がどうもボケ始めたらしい。寝たきりの母親をどうしたらいいか、などなど。

緊急避難的に対応できる施設、一生涯入居できる施設など、身体状態の如何に関わらず、どんなにも対応できるさまざまなタイプの高齢者用住宅の情報を提供します。（資料は有料）

無料相談

月・木 午前十時半～午後五時
老人ホーム情報センター



私も ひとこと

時を越えた再会

栃木県真岡市 鈴木和子

「『わいふ』に導かれた不思議な出会い」と言ったら大げさだろうか。四月十七日の読者懇親会で、小学校の同級生に再会した。三十年ぶり。私の出身地の山梨からの参加と聞いて、「どこかで会ったことがある」と直感。「高校はどちらでしたか？」から溯って話していると、小学生のころの彼女の顔が浮かんできた。時を経て、お互いに通じる言葉を持って再会できたことがうれしかった。

笑わないで下さい

熊本県上益城郡 渡辺禎子（58歳）

私は天草郡の松本とみよさんの大ファン？こんな文章を送ることをお許し下さい。

夫、その両親、四人の子供たち、自分を含めて悩みは山ほどあるが、彼女からの手紙や投稿文を読むとスカッとしてしまう。

いやな言葉で姑から押しつぶされそうになった時には、ただひたすら走る馬鹿な女。なにしろ三十五歳から始めたジョギング、腹が立つと二十キロほどこなしてストレス解消。

投稿する理由^{わけ}

千葉県茂原市 米良恭子

昨年は百六十冊の本を読んだ。肩がこると分かっていても止められずマッサージに通いながら読む。反対に、母は長年新聞さえ読んだことがないほど、全く活字に興味ない。

「お前の書いたのが出てるのかい？なら読んでみるか」。初めは拾い読みでもいい。自分が見聞きし、経験するのは限られているのだから、もっと広い世界を、読む楽しさを知って欲しい。母に「わいふ」を届けます。

君が代をうたうということ

川崎市多摩区 岡田美幸

長女の公立小学校の卒業式にも、公立中学校の入学式にも、開会のことばのあと、全員起立をし、君が代斉唱をしました。卒業式に君が代が登場したのは今年からということです。「エエ？」と思いませんか。校長会への指導があったとかいう噂です。起立しない人も少数なりましたが、私はせめてうたわないことで抵抗することしかできない小市民です。校歌斉唱ならいざ知らず……。

「わいふ」投稿初体験

横浜市戸塚区 根来恵子

「私はそう思えへん」。お母さん同士の雑談で感じることである。私が何か言うのと、「へエー」とキョトンとして私の顔を見るか、まるで漫才を聞いたかのようにどっと笑う。どうも私の考えは、その他大勢の考えでないことが多いらしい。田中編集長が、著書で、皆と考え方が違うと思っている人こそ書いてみてはと勧められていたので、「わいふ」に参加することになりました。どうぞよろしく。

求む！ NOS

神奈川県平塚市 飯島まゆみ

「おじさん改造講座」(OL委員会)というのがあるが、私は「ニュー・オヤジングシステム」がほしい。夫と舅は本当に対話の下手な男たちだ。論理一辺倒、結論一直線、指示用語ばかりの寡黙な夫。主観中心、論理不在、言葉を選べぬ饒舌な舅。二人に共通するのは、相手(女・子供)の言い分を聞きながら言葉をかみ合わせようという発想がないことだ。これでは私がロボット化する日も近い？

NMSについて

オーストラリア・アーターモン 副島めぐみ

子育てって本当に難しい。私も暗中模索の日々を送っています。「こうすれば必ずうまくいく」方法があるなら教えて欲しい。でもその通りにしてうまくいかなかったら？

ある人は厳し過ぎると言い、またある人は甘すぎると言う。結局子育ては試行錯誤しながら自分の思う道を行くしかないのでは？お金を払って誰かに教えてもらうなんて、子育ての××式みたいでちよつとこわい。

「慣れ」ってすごい

東京都品川区 潮田京生子

この四月、下の子が保育園に入った。二年前、上の子の入園時は、泣く我が子を胸が張り裂けそうな思いで預けた。あれから、我が家では保育園の存在があたりまえとなり、迷うことなく二人目を入れることにした。彼は初日から、まるでずっと前から通っているかのように、自然に私から離れて行った。ほとんど泣かない。下の子はたくましい。そして、「慣れる」ってすごいことですね。

おべんとう

東京都大田区 青木千恵

保母一年生の息子の話。保育園は園児も先生も主食を持って行くことになっている。

ある日私は、ご飯の上にしらすの佃煮をのせた。食事のとき三歳の子供たちが「これ何だ」と大さわざだったとか。おむすびを持って行くと「これは何かな？」と中身の当てっこをしているとか。永遠に食べ盛りという息子のごはん二杯半、二段重ね弁当箱に詰める内容に、久し振りに頭を悩ませている。

ライターへの道

大阪市旭区 宮崎貴子

「編集室から」にライター志望の人へのコメントとして「毎号投稿して毎号入選すること」とあった。私が「わいふ」に入会したのも、そもそも「ライターになった人も多く」というたい文句？につられたからなのだ。なのにやはりその道は遠く険しい。何もブランドライターでなくていいんだけど。チョイ書きで。大阪はソンのよ！などと言いつつも空しく、やはり夢は遙か彼方、なのである。

残虐テレビはいらない

東京都世田谷区 後藤 晶(38歳)

アイドルが出演するテレビドラマや、人気アニメに、よく殺人が出てくるのに閉口する。ただの学園ドラマでも、十分楽しめると思うのに、残酷な殺人が次々と繰り返されるのはうんざり。こんなに刺激がないと、視聴率が上がらないのだろうか。ほのぼのと、コミカルに、アイドルやアニメを楽しみたい。キンキキッズのファンとして、親子でそんな番組を期待している。

珍客来訪

愛知県春日井市 伊藤てる子

昨年の秋口の深夜、我が家へ珍客（どろほう）が入った。夫も私も若くもないのに、全く気付かずグーグーに寝込んでいた。珍客は一度入ると続けて二度三度入るというジンクスがある。三カ月後、日曜日で雨降りと前回と全く同じ条件の午前三時五分前、やっぱり来た。今回は、防犯ベルがけたたましく鳴った。予想もしない音に度肝を抜かれ逃げた。「備えあれば憂いなし」正に大成果ありだ。

ルーズソックス

埼玉県大宮市 井上いづみ

ルーズソックスといえば女子高生。はやってますねえ、はいてますねえと思っていいたら、勤務する高校の健康診断で見えました。男の子もはいている！ 長ズボンの下で今まで知りませんでした。こつこつ顔した子も真面目な顔して、くしくしくやっていますよ。本人達いわく「オレ達だって結構大変なんだぜえ」とのこと。もちろん校則違反。かくれて頑張っているというわけ。

パソコンと「ラブラブ」中

川崎市宮前区 布施孝子

第二子が誕生し、前にも増してドブブリ家庭にとどまっている毎日。家計簿をつけては支出の多さにあきれ、かといってケチケチするのは余計ストレスがたままる（私はドンブリ勘定）。上の子につきまといながら自分の時間を確保しようとパソコン通信にはまっている。唯一外の事情に通じている場。フオーラムをのぞきながらしばしば母の部分脱ぎ捨てる。しかし上の子はしっかりヒザの上。

ぬぬ、できる……

静岡県清水市 鈴木美奈（33歳）

息子の指しやぶりが直らないので、指にカラスを塗ってやった。怒った息子はスキをみて、その指を私の口に突っ込んだ。この勝負、私の負け？

お花見報告

—やってよかった！—



四月十七日のお花見会、おだやかな天候に恵まれ、新緑の美しさを満喫しました。一番最初に到着したのは山梨の風間ユリさん。和田副編集長の着物姿に「私も着物を着てくればよかった」。食事のあと「わいふ」とのつながりをそれぞれの人が話してくださいました。みなさまの人生に「わいふ」が大きくかわっていることを知り、編集部一同心をひきしめたのでした。

原昭宏さん（原真知子さんのおつれあい）も参加され、あちこちで話が盛り上がり、それぞれがネットワークを広げたようです。

（編集部）

ファム・ポリティック編集室より

教育改革アンケート 回答の分析結果

田中喜美子

ファム・ポリティック (Femme Politique=仏語で「政治的女性」の意) 1993年創刊。わいふ編集長でもある田中喜美子が編集長を務め、女性のための政治情報誌として出発したが、最近「政策提言」をするために、読者のオピニオンを載せるページも設けた。A4判28ページ・季刊・315円・年間購読料1620円(送料含む)。わいふ読者の方もぜひお読みください

●「政策を提言する女性の会」では、このほど昨年九月に配布した「教師の望む教育改革」と「親たちの望む教育改革」のふたつのアンケートの集計・分析を約四〇ページの冊子にまとめました。

「ファム・ポリティック」の十三、十四号にも大体のまとめがのつていますが、誌面の都合でレジュメ的なもの。冊子では心ゆくばかり分析ができて胸がすきました。

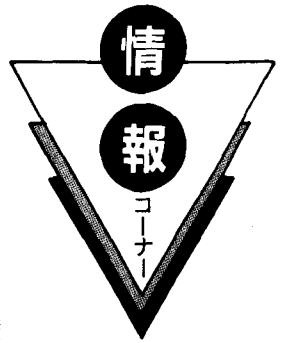
●集計に取りかかって最初ガツクリきたのは、「喜んで学校に通っている子どもたち」の数が「とても」と「まあまあ」を合わせて九〇パーセントを超えているという多さでした。その上現在の公立学校の教育に「満足」、または「まあ満足」している親たちの、これまた何と多いこと。

アンケートというものは、設問のたて方である程度答えが左右されてしまうのですが、私たちがきれいごとの返事がくるような設問を並べるはずはありません。なのにこの答え、いったい何がどうなっているんだ!と目をこすりたいたい。しかし内容を読み込むうちに、「満足」という答えの背後に潜む現実がはつきり

浮上してきました。興味のある方には冊子を読んでいただきたいと思いますが(頒価は未定ですが千円前後です)、このアンケートはやはり現実を正しくとらえているのです。

どんなときにも共通しているのですが、数量化されたデータを読み取るとき、現場に通曉している人が読むのか、紙の上のことしか知らない人が読むのかでは、結論が全然違ってくると思います。調査の項目のたて方によっても、せっかく真実にあと一歩というところまで迫りながらも、網に入りかけた大魚を逃すということも起こり得ます。教育現場を知っている女たちが作ったこのアンケートの内容は、かなり自信のもてるものだったのですが、それでもやはり官僚などに分析をまかせたら、味もそっけもないつまらないデータとして処理されたに違いありません。

●真実をとらえるためには、一に「現場を知っていること」。二には「先入観念にとらわれず全体を見る目を備えていること」。この二つがいかに必要であるか、つくづく思い知らされたのです。



|| ドイツで国際交流 ||

ジャパン・ フェスティバル

「ハンディ&シニア企画」では、五年前より東京を中心に、障害者・高齢者の衣服問題にとり組んできている。工夫した衣服を制作、ファッションショーなどにより、社会に伝え、ネットワークを広げてきた。

昨秋のイタリア・ナポリ市におけるファッションショーに続き（今号「時事放談」一〇一ページ、二五八号グラビア参照）、今年は旧ドイツ地域の南チューリンゲンへ。日独協会、州知事、日本大使館が準備してくれている。車イス用のロング

スカート、パーティドレス、雨具など持参し、ドイツ市民にモデルになつてもらう予定。
「着物からのリフォーム」教室

と関連して、日本のすぐれた芸術・芸能もホールで発表する。

アート展では、手工芸品展示ワークショップ、日本的な作品の販売などにより交流する。

茶道・華道・舞踊・音楽・歌・

作品発表などで国際交流する方を全国から募集中。舞台・音響・メイク・通訳も。観光のみも可。

▼日程 十一月六日～十三日

ベルリン→ズール→ミュンヘン

↓フランクフルト

▼主催 ハンディ&シニア企画

▼共催 芸術海外交流会（亀田）

▼旅行社 日本旅行新橋支店

▼費用 二十七万八千円

▼お問い合せ パンフレットご

希望は手紙で。〒142東京都品川

区小山五―一七―二三 菊池裕

子

ニュー・マザリングシステム（NMS）

アドバイザー養成講座を開講

二月の半ば、毎日新聞に

ニュー・マザリングシステムの

ことが報道されてから二カ月、

予想どおりの反響に嬉しい悲鳴

をあげています。まだまだ試行

錯誤の毎日なのですが。

さて今回、第二期アドバイ

ザーをそだてるための講座受講

者の募集をします。期限に遅れ

ないようにお申し込みください。

応募資格は次のとおり。

▼子どもを育てた経験のある方

あるいは現在育てている方。

▼学歴は問いません。三十歳以

上。

▼九月、十月の金曜日を予定、

一回二時間程度。連続受講が可

能な方。

▼東京都新宿区に通える範囲の

地域にお住まいの方。

▼受講料が必要です。

子育ては好きでも嫌いでもか

まいません。人間に興味があり、

読んだり書いたりすることが好

きな方。「わいふ」での投稿体

験のない方でも、十分優秀なア

ドバイザーになれます。講座の

なかでさまざまな文章を書いて

いただき、それをもとに判断い

たします。学校の試験のような

ものではありませんが、やはり

文章力が必要です。

アドバイザー応募者としての

受講でなく、自分の子どもの生

きる力を伸ばす子育てを学びた

い、という方の受講も受け付け

ます。子どもに「生きる力」を

つけるために必ず役に立つ講座

です。

〈アドバイザー体験談〉

昨年(2010年)の十二月八日に川崎市で行なわれた「だっ子(だつこ)は誰のせい?」という講演会に行ってきた。田中さんの話をもっと聴きたい」という気持ちで私の中で大きく膨れ上がっていた。

田中さんの著書「働く女性の子育て論」「いじめられっ子も親のせい!?」を読み、子育てについてずっと感じていた心の迷いを取り払われたことに感銘も受けていたので、「わいふ」誌上で「子育て通信教育のお手伝いをしてくれる方を募集します」という記事を見つけたときは迷わず応募した。

仕事はNMSの受講生から来た子育ての質問についてアドバイスするというもので、養成期間を経て合格した者だけがアドバイザーとして採用されるといふ、まったく今後の見通しが未

知数のものだった。しかも養成期間中の費用はすべて持ち出しで、遠方から通う私にとって、はつきり言っただけの負担だったが、これも自己投資だと割り切った。

養成講座はレポート提出が毎回義務づけられ、ハードではあるがとても有意義で楽しく、参加しているのは、自分の意見をしっかりと持っている優秀な方達ばかりで、久々に感じる心地よい緊張感だった。

養成期間の後、アドバイザーとして採用されたことは嬉しいことだが、それ以上に貴重なのは、他のアドバイザーの方達との出会いである。月に二回ほどのアドバイサー同士の勉強会では、自分の子育てにとってもいいヒントを与えてくれ、充実した時間を過ごすことができる。

またNMSを勉強して、試してみてもいいと、それがわが子に実践してみると、そ

の効果が自分の目で確認できるので、子育てがどんどん面白くなってきた。正直に言うと、私の子育ては甘やかしてしつけがなっていないかった。始終指図し小言をいう日々で、まさしく「働く女性の子育て論」の中に出てくる母親の事例そのものだったのである。

まず家庭内のルールを決め、それを守るといふことを実行した。たったそれだけのことで、何百回「片付けなさい!」と怒鳴っていたのに聞く耳もたずのわが子が、目の前で散らかっていたおもちゃをゴミ袋に入れて捨てられてしまうのを見て、次の日から片付け始めたのである。

テレビにしても、ガラガラ見せていたのを「一日に見たい番組一つだけよ」と子どもと約束し、見たい番組表をテレビの前に張っておくと、時間が来たら自分で消すようになった。学校

の準備も宿題も上履きを洗うのも、全て子どもの自主性に任せた。一切親は口出ししないし、その代わり穴埋めもしない。

NMSを知ってから、格段に子どもを怒る回数が減ったと思う。そして前よりも余裕を持って、子どもの言うことに耳を傾けられるようになった。何よりも子どもとの関係がよくなったことが嬉しい限りだ。

子育ては苦しく辛い出口のないトンネルのようなものだ。数年前は私も密室育児からノイローゼ寸前まで追い詰められた。一人でも多くの人がNMSを受講し、子育てが少しでも楽になってくれたらと願わずにはいられない。(小澤由香里)

▼資料請求・申し込みはハガキで、〒162東京都新宿区市谷加賀町二一五二六「わいふ」分室内「NMS研究会」へ六月二十日までにどうぞ。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所(郵便番号、都道府県名から)、氏名、会員番号を明記のこ
と。誌上匿名・ペンネーム可。

次のコラムを設けています。

●エッセイスト・クラブ (一六〇〇字まで)

びたりとキマった文章、豊かな内容を持った随筆をお寄せください。

●ズバリ一言(一六〇〇字まで)

オビニオン、評論、改善策の提案などの欄。政治、事件、芸術から身近の商品、

サービス、その他細かいことまでも何でも遠慮なく言ってください。ただしなるべくあなた独自の考えを。

●マイジヨブ・マイホビー (一六〇〇字まで)

本格的な職業生活から、パート、アルバイト、内職までの仕事について、また楽しみ、生きがいとしての趣味について等々、あなたの活動報告をお待ちします。

●家族と私(一六〇〇字まで)

一つ屋根の下にいる夫や子供はもとより、別居している親(舅・姑も含み)、成人して離れた子供、他人の始まりといわれる兄弟姉妹など、とにかく「身内」とあなたの関係レポートをどうぞ。

●おさない子を育てる(一六〇〇字まで)

子育てではやはり、女性にとつての最大の関心事です。おさない子はいかかわいい、だけど子育てはホントにしんどい!

現実のなかから、あなたと子供のありのままの関係を浮きぼりにしてください。

●サブレシーブ(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載

せします。感想、反論、何でもどうぞ。

●大人になりかかった子供たち (一六〇〇字まで)

反抗期、思春期、青年期の子供と親の関係についてお書きください。大きくなった子供の問題は、これまであまり言い立てられなかったと思いますが、若いお母さんにも将来の参考になるはず。体験談をお待ちします。

●忘れ得ぬ人々(一六〇〇字まで)

印象の深かった人の姿を描写していただきたい。想い出の中にある人、現在関わっている人どちらでもけっこうです。いやな奴、すばらしい人、奇人変人、あなたの詳しい観察を。

●フリースペース(一六〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

●わいわいがやがや(八〇〇字まで)

誰でも気軽に書けるコラム。

●私もひとこと(一八〇字まで)

何でも。添付の原稿用紙でお願いします。

●わいふネット(一八〇字まで)

教えてほしいこと、聞きたいこと、それに対する答えも。読者参加のQ&Aです。

●ワーキングマザー(二六〇〇字まで)

まだまだ母親が働くことへの偏見が残る中で、頑張っているお母さんたち、子育てのことと職業のこと家事のこと、悩み、喜び、充実感、言いたいこと叫びたいこと、何でも彼でもお書きください。

●おすすめの一冊(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

●情報コーナー(四〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

コラム以外の投稿募集

●特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

●特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も

自由。本誌に適当と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。

●ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。サブプレシブ・私もひとこと・情報コーナー・わいふネット。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです。ヨコ書きはご遠慮ください。原稿用紙は開いて右肩を(一カ所)とめてください。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字、二行を一枚に、行間をあまり詰めないよう、また禁則処理をしないで打ってください。

●ファックスでの投稿は受け付けません。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日

(当日必着)。それ以後に着いたものは次号まわしとなります。規定枚数はきっちりではなくともよく、長くても内容がよければお載せします。

●他誌との二重投稿はお断わりします。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に。住所本名は、そのすぐあとに併記してください。

また整理の都合上、住所には郵便番号を付記し、本名には会員番号(本誌送付封筒の宛名の下と、振替用紙にあります)を付記してください。

●ペンネームをいくつも使い分けるのは、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価します。濫用は困る、ということです。

●年齢をお書きそえくださる方は、名前の下に算用数字で。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

次号投稿募集

二六八号（十月一日発送）の特集テーマは「私と車」。

ゴルフデンウィークに、車でお出掛けになった方も多かったと思います。渋滞に巻き込まれたときどうしましたか？ 自分で運転しても、家族が運転しても、「地獄」という状況に立ち至った方、きつといたことでしょうか。

わが家でも、車の運転は夫婦ケンカの火種です。ふだんは、それほど怒ることがない夫、私が運転していると「ブレーキが遅い」「渋滞してるからあつちの道を行け」と命令し、ナビゲーターをしていると「よく地図を見ろ」「あの標識を見逃した」と非難します。

運転免許をとるときも大変でした。あのときのことを思い出すと胃が痛くなります。というわけで、ネタはたくさんあるのではないのでしょうか。面白い体験談待っています。

四百字詰原稿用紙で十枚ほど。

締め切り八月一日（夏休みなので）。

●時事放談

二六七号の時事放談のテーマは「家族ってなんだろう」です。

戦後さまざまなものが変化したなかで、家族の変容は大きく、いろいろな場とまどいを生んでいます。子育てや教育が大きな社会問題になっているのも、家族のあり方が変わったことと密接に関係しています。

若い夫婦の結婚生活に口出しする互いの実家、夫が仕事に忙しく孤独な妻、リストラにあつても、妻に気持ちを話せず無力感にさいなまれる夫。このような現象をあらいだし、日頃どんなことを感じているのか、あるいはそこから何がえてくるのか、率直に話しあいましょう。

最近「父性の復権」（中公新書）という本が売れているそうです。著者は「家族をまとめあげるもの」として父性をあげていますが、家族は今後まとまる方向に行くのでしょうか。もしそうでないなら、どんな家族のあり方なら可能なのでしょうか。

日時 六月二十日（金） 午後二時

場所 わいふ分室

六月十七日までに電話でお申し込みを。

アイデア募集！

生まれ変わります

わいふ

「わいふ」は十二月一日発送の号から、リニューアルを考えています。それにともない、皆さんのアイデアを募集します。

読者の投稿による「投稿誌」であることは変わりませんが、できるだけ多くの方が参加でき、読み続けていただける新しい「わいふ」を目指したいと思っています。

「こういうコラムを」「こういう特集を」という提案から、デザイン、コンセプトにかかわるものまでご意見をお寄せください。

ご意見は、宛て名に「アイデア募集係」と明記し、郵送。締め切りは六月二十日。採用させていただいたアイデアにつきましては、心ばかりのプレゼントを用意しております。

創刊50年をすぎた女たちの情報紙

女の視点で創るもう一つのメディア



アジア・さべつ・たべもの・からだ・老い・そだてる・はたらく

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

5日・15日・25日発行・年間9000円 ●見本紙どうぞ！

自分史・インタビュー・映画・CD・書評・催し

婦人民主新聞

ふえみん

東京都渋谷区神宮前

3-31-18-301

TEL 03(3402)3244

3238

FAX 03(3401)3453

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子

六月号

五〇〇円・千六八円
(見本誌(旧号)進呈)

今月の視点

子どもの発見待望

好評発売中「母と子」臨時増刊シリーズ 各二〇五〇円

PTAって何？

不思議なPTA

地域がつくるPTA

いじめの迷宮

子どもと読む

子どもの権利条約

子どもの権利条約

市民・NGOの意見集

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203 東京留米市中央町五-四八
☎〇四二四-七四一九一二五

母と子社

(○で囲んでください)

本文

[illegible]

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

編集室から

●新緑。あけびの蔓を切りに屋根へ。二十年前、今年九十歳になる実父が、娘の誕生祝いに苗を植えた。その父はいま入院中。

新聞で、学生時代は「親と教師」を選べず、社会人になれば「上司」、年を重ねると「天候と死」を選べない、と読み、父の姿とだぶった。

(菊池)

●デージー、ベルフラワー、マリーゴールド、ラベンダーなど小さな花株が今、花屋さんにあふれています。少し大きめの鉢にこれらの花々を寄せ植えにして、コンテナガーデンを作ってみませんか。庭の一部を身近に切り取ってきたようで、けっこう楽しめますよ。

(成井)

●いつも編集部は投稿を待っています。多くの投稿はおもしろい「わいふ」を生みます。わかつているんですけれど、読む

だけ会員の仲間の私は、この「編集室から」の短い文が書けません。でも多くの読むだけ会員の「わいふ」を、しっかりと支えているんですね。

(野村)

●投稿を呼ぶ女健在です。今回の投稿数は新記録。うれしい！連休返上で頑張るかいがあるというもの（今年のゴールデンウィークってゴールデンじゃないね）。

この調子で、リニユアールに向けて突き進むのだ。皆さんのアイデア待ってます。

(浅野)

●連休に友人からの誘いで、打ち立てのソバを食べた。東京に単身赴任している男性（友人の友人）が、住まいに招待して打ってくれた。自分の家を開放すると、本当にいろんなネットワークができることを再認識。

参加者でキャンプに行く計画も出た。中年も楽しいね。（間瀬）
●台所の窓からエサ台が見える。

モミジの枝にリンゴ、ボケの枝にミカン、まん中のエサ台に残りゴハンや鳥のエサを置く。すぐにヒヨドリが来る。そしてスズメ達、ハト、ムクドリ、シジユウカラ、メジロ。ジョウビタキも来た。コゲラにも出会えて図鑑がはなせないでいる。（望月）

●都会から離れると、今、野山は若芽が育って黄緑色に輝いている。田中編集長のNMSは、生れたばかりのみどり児を「生きる力」のある子に育てる、新しいシステム。私もそのお手伝いをした。もう子育てはすっかり終ってしまったけれど、何か参考になりそうだ。

(山本)

●今年のゴールデンウィークは初日に隣の奥さんが亡くなってしまい、お葬式の手伝いで二日間走り回りました。私の住む八王子の中谷戸という地区は、いまだに部落といわれた昔の風習の名残があり、お葬式は自宅で行ない近所中が手伝います。

NHK教育テレビで日曜の午後七時にやっている「ふるさと伝承」しながらの世界。なかなか興味深かったです。

この年になるとお葬式にばかり出るようになります。喪服も古くなったから新調しようか。なんてさびしい季節です。（和田）

●NMSの勉強のために読み散らかしている本のなかで「どうすれば幸福になれるか」（一光社）という一冊に出会いました。著者はW・B・ウルフという男性で、この本が書かれたのは一九三一年、彼が三十一歳のとき。三〇年代のアメリカがあまりに日本に似ていること、そして三十そこその男性にこんな本が書けるということに驚倒しました。やはり天才って、いるものなんです。凡才は長生きして何とか追いつかなくては、と唸りまくっています。（田中）

編集だより

●今回投稿の出足が悪く、少し心配しましたが、結果は一一六通（最高記録かしら）と多数でうれしい悲鳴をあげました。毎回締め切り日にどっと届きますので、それから一、二日で原稿を選び、原稿整理をして、と目が回るような忙しさをくりかえしています。

かなりの投稿がボツとなりました。そんなに悪くない（？）原稿も、掲載できませんでした。もうひといきというものがほとんどですので、また挑戦してください。

このところ『わいふ』がおもしろい！というお便りがいくつか届いています。

なんとといっても投稿数の多いことが、内容のある「わいふ」をつくっていくことになります。よろしく願っています。

●二六五号の一二七ページのイラストが逆さまになっていました。申し訳ありませんでした。

●四月十七日のお花見は天候にめぐまれ、話もはずみ、本当に企画してよかったです。一四二ページに写真と報告を載せてあります。

りますので、ごらんください。

●二六九号から「わいふ」をリニューアルする予定です。その先がけとして「パソコンワールド」というコラムをつくってみました。パソコンを使うのに苦心した話、生活のなかで活用している例など、パソコンにまつわることなんでもけっこうです。ご投稿をお待ちします。

最近女性の生活も大きく変化して、少し前の世代の人たちからは想像もできないものとなっていますね。「わいふ」にはさまざまな世代の読者がいますので、今後介護など高齢社会の問題から、パソコンのある暮らし、子育ての悩みまで幅広くとりあげていきたいと思っています。

リニューアルについて、一四八ページをご参照のうえ、「こんな『わいふ』がいいな」というご提案を、ぜひお寄せください。

●みなさんの「わいふ」誌への感想ご意見を伺いたく、アンケートを同封いたしました。ご協力くださいますようお願いいたします。

●職場体験記も募集しています。

●落丁・乱丁のあった方はご連絡ください。

購読のお申し込みは……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。
●年間購読料は割引となっております。

WIFE・266

(隔月刊)

1997年7月1日発行

編集・わいふ編集部

定価560円(本体534円)

(年間購読料送料共4560円)

印刷・平河工業社

発行所・㈱グループわいふ

〒162 東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

☎(03)3260-4771・FAX3260-4773

郵便振替 00150-3-110430

加入者名 わいふ編集部

購読中止は……

必ずお申し出ください。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

日本評論社

高石浩一／著
●河合隼雄氏推薦 四六判 1900円＋税
ことさらに母の気持ちに察し、慮ることで母を支える「良い娘」たち。しかし、それは相手を支配するための屈折した「配慮のしあい」(試合)でもある。気鋭のユング派臨床心理学者が母・娘関係を素材に日本の精神文化に切り込む。

母を支える娘たち

血液ガンの妻を介護して
浅妻正美／著
末期ガンの妻を自宅で終末を迎えさせたい。この困難事を成し遂げた男の記録。「老・老介護の時代」を迎えたい。あなたならどうするか。

老いが老いを看るとき

メリー・M・グールディング／著
深沢道子／訳
四六判 1800円＋税

さようならを告げるとき

最愛の夫を喪ったセラピスト。彼女が体験した悲嘆と孤独の深淵……立ち直るまでの心の軌跡を赤裸々に綴る。愛すること・生きること・勇気づける感動の書！

「不安・抑うつ臨床研究会」／編

四六判 1500円＋税

不安症の時代

ひとりりで悩む不安症患者。専門医グループがその治療のすべてを明かす！



21世紀へのヒューマン・セクソロジー

シリーズ 科学・人権 自立・共生の性教育

全8巻 ●B5判 ●定価各2,400円
“人間と性”教育研究協議会編
編集代表 ●高柳美知子・村瀬幸浩・山本直英

- ①性教育—その考え方・進め方
- ②小学校の性教育
- ③中学校の性教育
- ④高等学校の性教育
- ⑤障害者・マイノリティの性と性教育
- ⑥共生・人権をめざすエイズ学習
- ⑦性的ふれあい・性交をどう教えるか
- ⑧性教育—その用語と教材

①、②、③、④、⑤、⑥、
⑦、好評発売中 ⑧続刊

心とからだの主人公に

性と生の教育

Human Sexuality

No.11

編集長 ◆山本直英 編集 ◆“人間と性”教育研究協議会
隔月刊 ◆B5判・112ページ ◆定価1260円

《特集》「援助交際」と性教育

女子高校生座談会 ●商品みたいに自分に値段なんかつけられたくない！／論文 ●「価値の高い性」「価値の低い性」の二つを使い分けている／試験 ●「自己決定権」を最大限まで認める発想こそ必要／《時評＋α》＝「援助交際」する男(オヤジ)たちへのメッセージ／編集長対談 ●「異常」と言われる性器でも私にはとても大事なモノ！ゲスト 橋本秀雄ほか

●定期購読者受付中

- ・全国どこでもお申し込みいただけます。
- ・郵便振替 00180-8-10590 1年間 9,400円

日米のシングルマザーたち

生活と福祉のフェミニスト調査報告

中田照子／杉本貴代著／森田明美共著 シングルマザーに代表される「女性世帯」の生活実態と諸問題を、日米比較研究から解明、福祉援助の方向を探る。

二六〇〇円

社会福祉のなかのジェンダー

福祉の現場のフェミニスト実践

三月と五月刊行予定

杉本貴代著 女性の貧困化や離婚・未婚による家族の変化、介護・労働の場での様々な性差別、女性への暴力などの問題をジェンダーの視点で考える。

二八〇〇円

女性福祉を学ぶ

自立と共生のために

「シリーズへ女あすに生きる⑧」

橋本宏子著 「労働と女性」、「仕事・家庭と女性」、「高齢社会と女性」、「母子家庭」、「セクシャリティと女性」等、様々な女性問題を福祉の視点から考える。

二六〇〇円

そこが知りたい公的介護保険

老後はどのように変わるのか

斎藤義彦著 現役の新聞記者である著者が、利用者の立場になって、ドイツと日本両国の現場をていねいに取材し、いま知っておくべきことを報告する。

二四〇〇円

老いが老いを看とるとき

在宅介護七年のくふう

●三刷出来 ●OP叢書②

青木みか著 七二歳の娘が九八歳の母親を看る。できるだけ介護の労力を減らすようにくふうし、お互いが暮らしやすいよう生活していくコツを紹介する。

一五〇〇円

愛する人が痴呆とよばれて

25編の痴呆性老人介護手記

●重版出来 ●

財団法人大阪老人性痴呆医学研究会編 様々な立場で痴呆性老人にかかわった人々からの愛の話25編。

一五〇〇円

地域で看る みんなで看とる

女性が進める介護の社会化

「シリーズ 女・老い・福祉①」

樋口恵子編 介護は女性だけが背負わなければならないのか。福祉にかかわる様々な分野で活躍する人々の意見を通して、女性の力による介護の社会化を提案。

二〇〇〇円

介護福祉職にいま何が

求められているか

一番ヶ瀬康子監修／日本福祉学会編 介護福祉職の役割について、幅広い視点から考察しその現在の位置と課題を明らかにする。

「シリーズ・介護福祉②」二〇〇〇円

安くはいれる有料老人ホーム

付 退院後の療養・リハビリに老人保健施設

わいふ編集部編 入居金〇・一・二〇〇万円台までで、安全・自由な老後のすまいを、最新情報で紹介。未紹介の施設のリストも一挙掲載。
「ガイドブック・シリーズ④」
480頁・二五〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 価格税別/宅配可
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 振替01020-0-8076